

# 平成27年度指定 スーパーグローバルハイスクール 研究報告書・第3年次



平成30年3月

～実践の共有と前進のために～



---

本校は、昭和 42 年に普通科高校としてスタートして以来、先進的な教育を推進するよう努めるとともに、国際教育と英語教育に力を注いでまいりました。創立以来の取組は、平成 2 年における国際教養科 2 学級の併置へとつながり、さらに平成 17 年には、国際文化科と総合科学科の二つの学科を設置する専門高校、現在の国際・科学高校となりました。この改編を機に、本校は、次の新たな指導法の研究開発に取り組むこととしました。

- ・ より高い水準の国際教育と英語教育を行うための指導法
- ・ 総合科学科における効果的な指導法
- ・ 文・理両方の高い学力を育成するとともに、それぞれの学科の専門性を高めるための指導法

そして、これまでの指導法を改良するとともに、スーパーサイエンスハイスクール（第 1 期、第 2 期）をはじめ、国・府の研究指定等の活用を図ってまいりました。

平成 27 年からは、スーパーグローバルハイスクールの研究指定をいただくことができました。将来のグローバル・リーダーを育成するため、次の教育課程・指導法を開発することとしました。

- ・ 課題研究の研究領域として国連グローバル・コンパクトを取り上げるとともに、ステークホルダーが Win-Win の関係となるよう柔軟かつ創造的な提案を行える力を育むための教育課程
- ・ 高い社会貢献意識と高いレベルのコミュニケーション・ツールとしての英語力を向上させるための指導法

本校は、課題研究の質を高めるための手法として、国連グローバル・コンパクトに参画する企業と NGO それぞれの視点と取組の比較、及び、日米の比較という枠組みを設定するとともに、課題研究の導入・展開・まとめの各段階において、連携機関より具体的な指導・助言をいただくよう工夫しました。また、国内外における研修の質が段階的に向上するよう計画を立てました。

指定 3 年次の今年度は、過去 2 年間の経験の上に立ち、1・2 年次の課題研究の指導法についてさらなる質の向上と協力機関との連携の充実を図りました。8 月には、公立学校としては初めて、国連グローバル・コンパクトの署名団体、国連グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパンの会員となりました。具体的には次の 2 点を掲げて国連グローバル・コンパクトの 4 分野 10 原則に貢献することとしています。

- ・ 将来における最善の実践を進めるための新時代を築いていく考え抜かれたリーダーシップ養成のために、SDGs に深く関連した地球的課題に関する教育プログラムと授業を生徒に提供すること
- ・ 生徒による研究成果を発表・公表することを通して、様々な人々が持続可能性について学ぶ機会を提供すること

また、積極的に先進校を訪問させていただき、論文指導・海外校との交流・アクティブラーニング・ICT を用いた授業等、次年度以降の指導の充実に向けての情報収集に努めました。

本報告には、これらの記録、及び、本年度の取組のアウトプット・アウトカムを収めております。多くの皆さま方にご一読いただき、忌憚のないご批判・ご意見をいただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、本校の取組を支えていただいている運営指導委員の皆さま、課題研究の質の向上のため多大なご支援をいただいている大阪大学及び関西学院大学の先生方と事務局の皆さま、国連日本政府代表部、国連グローバル・コンパクトネットワーク・ジャパン、Anti-Defamation League、アジア太平洋人権情報センター（ヒューライツ大阪）、大阪中小企業家同友会の皆さま、そして、Tanya Odom さん、Eva Vega さんに対し、心よりお礼申し上げます。

本校としましては、多くの方々のご批判・ご意見を真摯に受けとめ、生徒が高い志を胸に文・理両方の学力と専門性を高め、時代を切り拓くグローバル・リーダーへと羽ばたいてくれるよう、引き続き全力で取り組んでまいります。

平成 30 年 3 月  
大阪府立千里高等学校  
校長 松本 透

---

---

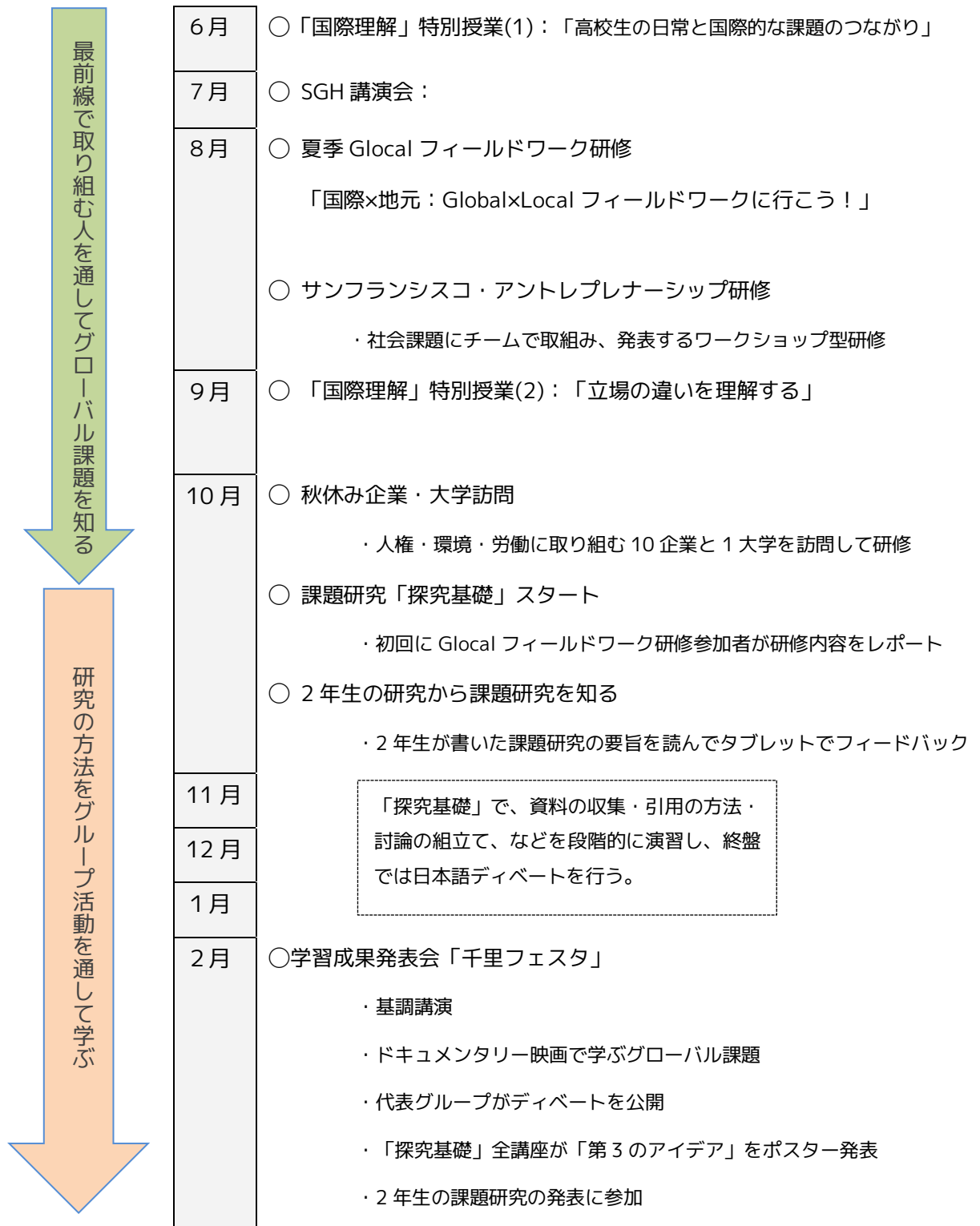
## 目次

1. 研究開発完了報告書 .....	1
2. 研究開発構想の概要（抜粋） .....	13
3. 評価の方法 .....	27
4. 実践報告と評価 .....	33
→このあとのページで詳しい内容を紹介しています。	
5. 運営	
(1) 運営指導委員会 .....	88
(2) 成果の普及 .....	92
6. 資料	
○教育課程表（平成 27~29 年度入学生・共通） .....	95

---

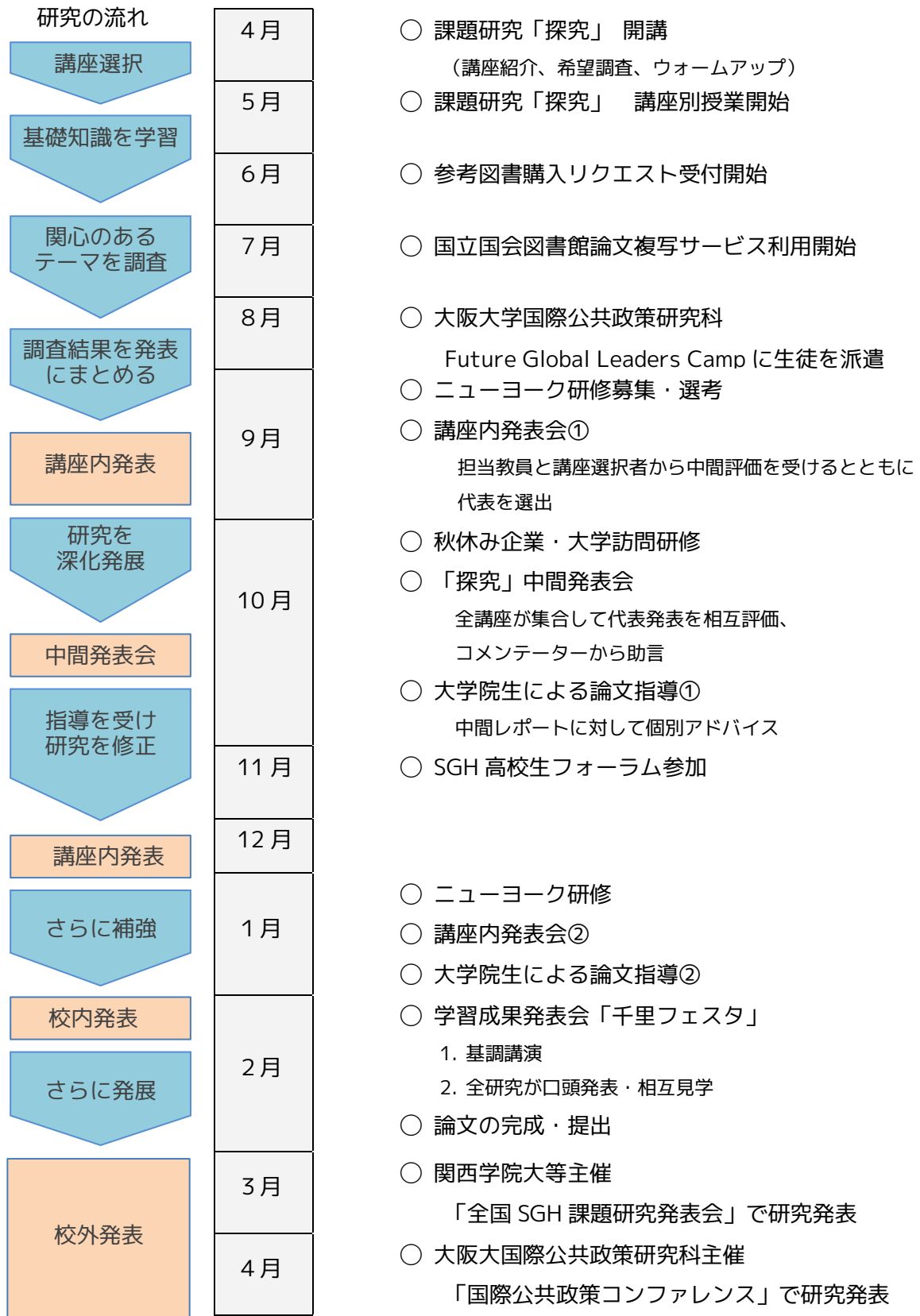
# 1 年生対象の指導の流れ

## 学習の流れ



## 2年生対象の指導の流れ

○発表を節目にして評価・指摘・アドバイスを受け、段階的に研究を進める。



(1) 『国際理解』特別授業(1) .....34



2017年6月20日、22日  
 「高校生の日常と国際的な課題のつながり  
 ～チョコレートと児童労働～」  
 ・ゲスト講師をお招きし、ワークショップ形式で、グローバルな課題が日常生活とつながっていることを教わり、SDGs との関係を考えました。

(2) 国際文化科1年 SGH 講演会 .....39



2017年7月7日  
 「『人々のストーリーを描く』国際公共政策の研究者から高校生へのメッセージ」  
 ・研究者の立場から国際問題にどう向き合っているのか、大切にしていることは何か。アフリカでの現地調査についても紹介していただきました。

(3) 夏季 GLOCAL フィールドワーク .....43



2017年8月1日～3日  
 ・地元大阪にある国際問題を知るため、とよなか国際交流協会・コリア国際学園・大阪茨木モスクを訪問し、お話をうかがいました。全体を貫くテーマとして国際人権について学習し、最後にグローバルリーダーが持つべき資質とは何かを考えました。

(4) 『国際理解』特別授業(2) .....47



2017年9月20日、21日  
 ・ゲスト講師をお招きし、社会課題の解決のためには立場の異なる人々が粘り強く意見交換し、合意を形成することであることを、地元大阪、西淀川地区の大気汚染問題をいかに解決してきたかを題材に、ロールプレイ形式で学習しました。

(5) 課題研究基礎科目「探究基礎」 .....53



2017年10月～2018年3月  
 ・後期の総合的な学習の時間を利用し、課題研究の基礎を学んでいます。2分割した少人数クラスで、週1回2時間連続で行います。学校作成のテキストを使い、資料の読取り・意見の発表・論理性等について学び、終盤にはディベートを行いました。

(6) 課題研究科目「探究」 .....58



2017年5月～2018年3月  
 ・総合的な学習の時間を利用し、課題研究に取組めます。10の講座に分かれ、自分で設定したテーマについて研究します。グループまたは個人で研究を進め、10月に中間発表会、2月に最終発表会を行い、まとめた論文を2月末に提出しました。

(7) 秋休み企業・大学訪問研修 .....73



2017年10月5日, 6日  
 ・平日で授業がない2日間の秋休みを利用し、企業の社会的責任(CSR)および国際協力・国際貢献について具体的な取組・経験から学ぶため、1,2年生約100名が大阪・京都・兵庫にある10企業・1大学を訪問して研修を行いました。

(8) 海外研修：ニューヨークでダイバーシティへの対応を学ぶ .....77



2018年1月2日～7日  
 ・アメリカはどのように多様性・偏見・共存の問題に向き合っているのか。グローバルリーダーに不可欠なこの課題をテーマに、学校・メディア・民間団体で活躍する人々から活動の内容と思いを聞きました。また博物館を訪れ移民の歴史も学習しました。

(9) 学習成果発表会「千里フェスタ」 .....82



2018年2月8日～10日  
 ・2年生両学科の課題研究を中心に、音楽・家庭・探究基礎・英語ディベート・海外研修等の学習成果を発表します。2年生は全員が発表を行います。課題研究の代表発表では、企業や大学のかたから研究の意義や期待についてお話しいただきました。

(10) 3年生への指導：「トピック・スタディズ」と「グローバル・スタディズ」 ....83



・この2つは、国際文化科全員が3年間を通して学ぶ「グローバル・コミュニケーション」に加え、さらに高いレベルの英語運用能力を育成することを目的に、選択科目として開講しています。TSでは模擬国連活動を、GSではTOEFLレベルの内容の討論をリードする活動を目標に1年間学習しました。





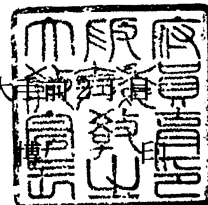
# 1.研究開発完了報告書

平成30年3月13日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住 所：大阪府大阪市中央区大  
管理機関名：大阪府教育委員会  
代表者名：教育長 向井 正



平成29年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成29年4月3日(契約締結日)～平成30年3月30日

2 指定校名

学校名 大阪府立千里高等学校

学校長名 松本 透

3 研究開発名

グローバル・マネジメント力を備えたリーダーの育成計画

4 研究開発概要

- ① 下記1)～4)の研究開発を進めるとともに、評価方法の改善を図る。
  - 1) 課題研究の研究領域として国連グローバル・コンパクトの4分野(労働, 環境, 人権, 腐敗防止)を取り上げ, 多面的に視る力を育むための指導法
  - 2) 大学・企業・NGOと連携し, 訪問研修等を通じ研究者・実践家の生き方に触れることにより, 高い社会貢献意識を育み, コミュニケーション力としての英語力を高いレベルへ向上させる研修
  - 3) 連携機関等より指導・支援を受け, 生徒が協力しながら必要な情報を収集・分析・整理する力を身につけることができる指導
  - 4) ステークホルダーがWin-Winの関係となるよう柔軟かつ創造的な提案を行える力を生徒に育むための教育課程
- ② 実践レポート・論文集の発行とウェブでの掲載に加えて, 実践報告会を開き校外への成果の普及の機会を増やす。
- ③ 課題研究以外の授業を主体的・協働的な学びとして実現するための研究開発を行う。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①英語教育支援												→
②連携大学による生徒の伸長の検証												→
③運営指導委員会								○			○	
④成果の還元普及												→
⑤指導助言												→

(2) 実績の説明

①英語教育支援

ネイティブ教員を3名配置し、英語教育を支援。また英語4技能の向上のために、卓越した英語力を有するSET (Super English Teacher) を府で雇用・配置。TOEFL iBTを推進し、海外への進学が可能となるよう支援している。

②連携大学による生徒の伸長の検証

関西学院大学による「SGH生徒の成長の検証及びグローバル人材としての資質の検証」の調査研究を実施。相対的評価の検証のみでなく、形成的評価を重視し、SGH生徒の志向性、価値観、知識、遂行力等の測定評価を試みている。

③運営指導委員会の開催

○運営指導委員

- 久 隆浩 近畿大学総合社会学部 教授
- 藤本 英子 京都市立芸術大学美術学部 教授
- 森田 直樹 吹田市立高野台中学校校長
- 杉田 真規子 大阪府教育センター 高等学校教育推進室 主任指導主事
- 松下 信之 大阪府教育センター 高等学校教育推進室 指導主事

○第1回スーパーグローバルハイスクール(SGH)運営指導委員会

日時：平成29年10月17日、場所：千里高校 校長室  
 協議 ・外部人材の活用も積極的に検討すると良い  
 ・参考文献の数が増えていると感じた  
 ・SGHに取組み、いかに学校の仕組み・授業が変わってきたかが問われている。

○第2回スーパーグローバルハイスクール(SGH)運営指導委員会

日時：平成30年2月9日、場所：千里高校 校長室  
 協議 ・自分の中で生まれた疑問に対し、自分なりの考え方をしっかり述べられている  
 ・資料をきっちり作る、前を見て発表する、アンケートを自ら行うなど、進展が実感できる  
 ・データの引用元を明示できていない発表があった

④成果の普及還元

SGH指定校と同様に課題研究に取り組む高校や、グローバル人材の育成や海外進学に関心の高い高校を中心に、SGHに係る活動状況や情報を発信した。

また、府教育委員会が主催する文系の課題研究発表会において評価に用いるループブックを作成。課題研究の質の向上を図り、その成果の普及還元に努めた。

1. 研究開発完了報告書

⑤指導助言

担当課の複数の指導主事が、授業や研究実践への関わり、また次年度の計画の作成、報告書作成など、指導助言を通年にわたって行った。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①課題研究と発表の質を高めるための指導法の研究開発												
②大学等外部機関等との連携の推進												
③学校設定科目 GS, TS の指導法, 及びグローバル課題の導入方法の研究開発												
④国際性とコミュニケーション・ツールとしての英語力を向上させる取組												
⑤成果の還元・普及												
⑥主体的・協働的な学びを実現する授業の研究												
⑦事業評価と報告書作成												

(2) 実績の説明

①課題研究と発表の質を高めるための指導法の研究開発

- 1) 「探究基礎」(1年次の課題研究)に関わる指導・支援(5ページ表1)
- 2) 「探究」(2年次の課題研究)に関わる指導・支援(6ページ表2)
- 3) 課題研究の指導法についての研修(7ページ表3)

②大学等外部機関等との連携の推進

- 1) 国連グローバルコンパクト関西分科会にて訪問研修受け入れについて説明する機会を設けていただき、直接説明とお願いを行った。

成果(以下同じ)→新たな受入企業の開拓実現

- 2) 国連グローバルコンパクトの署名団体に加わるための手続きを進め、8月に実現した。  
→外部連携をさらに強力・円滑に。来年度から本格的に活動開始
- 3) 論文指導のTA派遣を従来の関西学院大学に加え大阪大学にもお願いし、実現した。  
→全講座に2名のTAを確保

③学校設定科目 GS, TS の指導法, 及びグローバル課題の導入方法の研究開発

- 1) 国際文化科3年での学校設定科目「トピック・スタディズ(TS)」:

- ・2年で課題研究「探究」を指導した経験がある複数の教員が担当。  
→SDGsとの関連を意識したテーマ設定
- ・模擬国連活動で「交渉」部分を重視する展開に。

→「交渉には相手国の立場を理解することが大切だと理解した」との生徒の声多数

- 2) 学校設定科目「グローバル・スタディズ(GS)」:

- ・グループで Critical Question を準備する活動を重視。
- ・意見を引き出し、議論を促す(Discussion Facilitation)スキルの向上を目標に練習。

→「国際的課題について理解が進み、複数の視点から検討できる」が有意に向上

- ・大学入試制度の改革に対応するため、学校設定科目「グローバル・コミュニケーション(GC)」と合わせ、3年間を通した Global Citizen Program として再編成。

1. 研究開発完了報告書

表 1 「探究基礎」(1年次の課題研究)に関わる指導・支援

実施日	対象	取組項目名と内容	連携機関・講師等	備考
6/20 6/22	国際文化科 1年4クラス (160名)	「国際理解」特別授業(1) 『高校生の日常と国際的な課題のつながり～チョコレートと児童労働そしてSDGs』	・松岡秀紀氏(アジア太平洋人権情報センター(以下、ヒューライツ大阪)特任研究員)	図書室にてクラス単位で
7/7	国際文化科 1年生全員 (160名)	講演会 『人々のストーリーを描く～国際問題の研究者から高校1年生へのメッセージ』	・猪口絢子氏(大阪大学大学院 国際公共政策研究科比較公共政策専攻博士前期課程2年)	視聴覚室にて全員で
8/1 8/2 8/3	国際文化科 1年希望者 (3日間で延 87名)	夏季フィールドワーク研修 1日 ・会場:とよなか国際交流協会 ・プログラムの説明とアイスブレイキング ・ワークショップ『在日外国人の現状ととよなか国際交流協会の活動』 ・講演『外国にルーツのある若者の声をきく』 ・ワークショップ『権利の選択』 ・講義『国際人権とは』 2日 1.会場:コリア国際学園 ・講義『イスラームの基礎知識と日本在住のイスラム教との生活』 2.会場:大阪茨木モスク ・講義『イスラム教と茨木モスクについて』 3.会場:コリア国際学園 ・講演『「越境人」をめざすコリア国際学園』 ・講演『写真を使った私の社会活動』 3日・会場:本校図書室 ・ワークショップ『人権を身体で学ぶ～Privilege Walk』 ・講義『再び国際人権について』 ・グループワーク『グローバルリーダーに必要な資質とは?』 ・レポート作成(クラスでの報告用スライドと原稿をグループで分担して作成)	・朴君愛氏(ヒューライツ大阪 上席研究員) ・山野上隆史氏(とよなか国際交流協会事務局長) ・府立高校に通うネパール出身の高校生2人 ・山根絵美氏(大阪大学人間科学研究科大学院博士後期課程) ・大阪茨木モスクのイマーム ・都裕史コリア国際学園校長 ・コリア国際学園在校生 ・金ハリム氏(ヒューライツ大阪企画業務職) ・朴君愛氏 ・千里高校教員	学校～会場間の交通費を補助
9/20 9/21	国際文化科 1年4クラス (160名)	「国際理解」特別授業(2) 「高校生の日常と国際的な課題のつながり～西淀川の公害問題を多角的に捉えるロールプレイを使ったワークショップ」	・栗本知子氏(公益財団法人公害地域再生センター 研究員)	図書室にてクラス単位で
10/ 5 10/ 6	1,2年希望者 (1年 53名)	秋休み企業・大学訪問研修 グローバル課題に取り組む企業と国際貢献ボランティアを派遣する大学を訪問し、学習・インタビューする。	・人権・環境・労働に取り組むGCNJ 関西分科会の企業7社, 北大阪の中小企業3社, 関西学院大学	学校～会場間の交通費補助
10/13	後期科目・課題研究「探究基礎」開始 ・国際文化科1年生全員対象に、独自テキストに基づき、週2時間連続1クラス2分割20人でグループワークを中心に行う授業。情報収集と資料の読取り、意見の整理と発表を協働で行うスキルを向上させる。			
10月中旬	国際文化科 1年全員 160名	Report to Report 2年生が書いた課題研究のレポートを読んでそれに対するレポートをタブレットで提出する。		
2/ 8 2/ 9 2/10	国際文化科 1年生 (160名) 基調講演は両学科1,2年生640名合同	学習成果発表会「千里フェスタ」 1.基調講演:『iPS細胞の可能性～変異と遺伝病の治療～再生医療が人類に問いかけるもの』 2.映画による学習『バレンタイン一揆』(児童労働に関するドキュメンタリー映画) 3.代表グループがディベートを公開。 4.「探究基礎」全講座が「第3のアイデア」をポスター発表。	1.原田直樹氏(京都大学 iPS細胞研究所)	

1. 研究開発完了報告書

表 2 「探究」(2年次の課題研究)に関わる指導・支援

実施日	対象	取組項目名と内容	連携機関・講師等	備考
5月		<b>課題研究「探究」開始</b> ・国際文化科2年生全員160人が、14人以内の小講座に分かれ、個人または2,3人のグループで課題を設定し研究を進める週2時間連続の授業。 ・論文の構成、先行研究の調べ方、発表の留意点等について学び、2月には5000～7000字の論文としてまとめ、発表会で全員が口頭発表を行う。		参考図書・論文入手を支援
8/8 8/9 8/10	国際文化科 2年希望者 (7名)	<b>大阪大学研究合宿 Future Global Leaders Camp</b> 全国から集まる高校生がグローバル課題について学び、調べ、最終日に提案をプレゼンテーションする研究合宿に参加。	・大阪大学大学院国際公共政策研究科 Future Global Leaders Camp 運営委員会	参加費の一部を補助
10/5 10/6	国際文化科 1,2年希望者 (2年46名)	<b>秋休み企業・大学訪問研修</b> グローバル課題に取り組む企業と国際貢献ボランティアを派遣する大学を訪問し、学習・インタビューする。	・人権・環境・労働に取り組むGCNJ関西分科会の企業7社、北大阪の中小企業3社、関西学院大学	学校～会場間の交通費補助
10/17	国際文化科 2年全員 (160名)	<b>課題研究中間発表会</b> 講座代表10名が発表。大学と企業からコメンテーターを招き、発表・コメントを共有する。	・榎井縁氏(開発教育協会理事) / 黒田康之氏 (NTN株式会社CSR部) / 西山掌氏(株式会社マンダムCSR推進部)	本校視聴覚室にて全員で
10/19 10/24	国際文化科 2年 (145名)	<b>大学院生による論文指導(1)</b> 課題研究の各講座に大学院生がTAとして論文を個別指導。(TOEFL講座は対象外)	・大阪大学・関西学院大学の大学院生のべ20名	各講座に2名
11/25	国際文化科 2年代表 (1名)	<b>SGH全国高校生フォーラム</b> 代表1名が英語でポスター発表	・筑波大学	生徒の旅費を補助
11/15 12/8 12/16	国際文化科 2年希望者 (10名)	<b>ニューヨーク研修事前学習(1)(2)(3)</b> 米国の移民の歴史を日本語で学習する。 また、ダイバーシティに関連する語彙の学習と各講師への模擬インタビュー演習を英語で行う。	・通訳経験のある外部指導者および本校教員	
1/2 から 1/7	国際文化科 2年希望者 (10名)	<b>ニューヨーク研修</b> 米国における多様性と協働に関する現状と取組について、学校訪問・ワークショップ型研修(ADL)・民間企業での事例紹介・移民に関する博物館(Museum of Chinese in America, Tenement Museum)等の見学を通して学ぶ。	・Eva Vega氏(Town School 多様性監修者) / Lisa Maxwell氏 (MasterCardマーケティング部長) / Noopur Agarwal氏(MTV, Social Impact 部長) / Anti-Defamation League / 沼田隆一氏(元国連職員) / 芳野あき氏(国際移住機関職員)	生徒の旅費の一部を補助。
1/16 1/18	国際文化科 2年 (145名)	<b>大学院生による論文指導(2)</b> 課題研究の各講座に大学院生がTAとして論文を個別指導。(TOEFL講座は対象外)	・大阪大学・関西学院大学の大学院生のべ20名	各講座に2名
2/2 ほか	国際文化科 2年希望者 (10名)	<b>ニューヨーク研修事後学習(1)</b> 学習成果発表会での報告に向けて、研修で学んだことを英語で発表するための指導。	・本校教員 ・通訳経験のある外部指導者	
2/8 2/9 2/10	国際文化科 2年生 (160名) 基調講演は 両学科1,2 年生640名 合同	<b>学習成果発表会「千里フェスタ」</b> 1. 基調講演：『iPS細胞の可能性～変異と遺伝病の治療～再生医療が人類に問いかけるもの』 2. ニューヨーク研修等海外研修報告 3. 課題研究「探究」での研究を全員が報告 4. 課題研究「探究」代表発表には助言者招く。 5. 英語ディベート優秀組発表	1. 原田直樹氏 4. 榎井縁氏・黒田康之氏・西山掌氏	
3/5	国際文化科 2年希望者 (10名)	<b>ニューヨーク研修事後学習(2)</b> 研修報告書の英文について指導・助言	・通訳経験のある外部指導者	
3/24	国際文化科 2年希望者 (2名)	<b>全国スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会 SGH 甲子園</b> 希望者2名が課題研究をポスター発表		
3/30	国際文化科 2年代表 (約20名)	<b>課題研究「探究」優秀論文集発行</b>		

1. 研究開発完了報告書

表 3 課題研究の指導法についての研修

実施日	対象	取組項目名と内容	連携機関・講師等
8/9, 10	本校教員のべ2名	高校教員向け 探究学習指導セミナー ～入門編～受講	大阪大学主催
8/18	本校教員1名	全国スクールリーダー育成研修受講	京都大学主催
3/ 3	本校教員1名	他校課題研究発表会視察	仙台白百合学園中学高等学校
3/10	本校教員1名	他校公開授業視察	お茶の水女子大学付属高等学校

④国際性とコミュニケーション・ツールとしての英語力を向上させる取組

- 1) 『SGH 高校生フォーラム』での英語発表のための指導を複数の教員が担当。  
→伝えたいことを論理的に組立て直し、わかりやすい英語で表現する指導経験が蓄積
- 2) ニューヨーク研修の事前・事後指導を新しく複数の教員が担当。  
→生徒が「鍵となる概念を英語で理解する・相手について下調べをした上で質問を準備する・経験を紹介し知見を共有する」ための指導経験を広げる
- 3) 従来に引き続き、国際文化科2年生が全員参加するオーストラリアへのホームステイを含む海外研修旅行の事前事後指導、および短期・長期留学生の積極的な受入を実施。  
→授業内外で英語を使う豊富な機会の提供

⑤成果の還元・普及

- 1) 2年生の全員が課題研究を発表する学習成果発表会「千里フェスタ」を中学・高校・大学の教員、近隣の中学生および生徒の保護者、卒業生に公開。これまでの平日開催を土曜日に変更。  
→他校教員等13名、中学生90名、他校高校生13名、保護者約300名が参観
- 2) 上記発表会の午後に、校内・校外教員向けに「SGH 実践報告会」を実施し、経験を共有・交流。  
→他校教員等7名、本校教員55名が参加。資料集はウェブで公開。
- 3) 各研修の内容、生徒論文集、課題研究テキスト等を随時ウェブサイトで公開。  
→本校のSGH 広報用のブログは、開設からのページビュー数が12000を超えた  
→SGH 甲子園で表彰を受けた生徒の発表原稿は、複数校から教材としての利用の願い出
- 4) 研究開発報告書は、全SGH 指定校およびアソシエイト校に送付するとともにウェブで公開。

⑥主体的・協働的な学びを実現する授業の研究

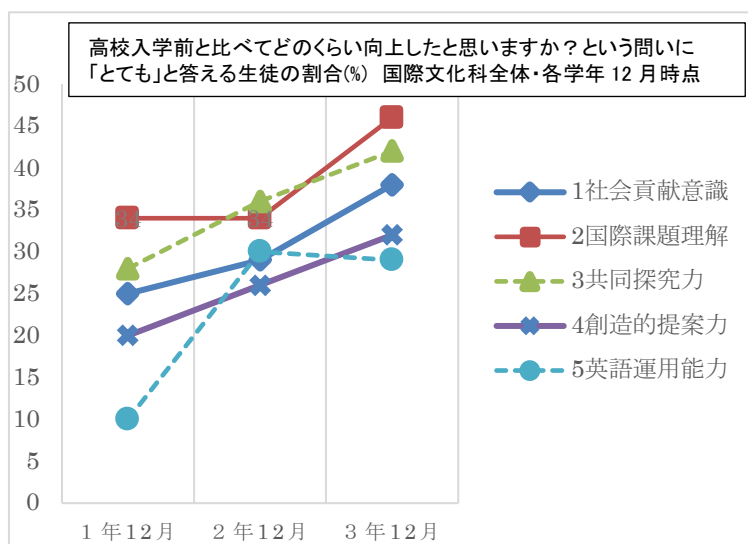
- 1) 研究を推進する組織として **Deeper Active Learning WP** を立ち上げ。[4月]
- 2) 次期学習指導要領改訂の方向性、育むべき資質・能力を知るとともに、その具体的方策としてのアクティブラーニングについて知り、考えるための教員研修を実施。講師は、新坊昌弘 関西外国語大学英語キャリア学部教授。[7月5日]
- 3) 校内授業研究月間を設定し、アクティブラーニングの導入を試みている授業を中心に相互見学とフィードバックの交流会を開催。[11月]
- 4) アクティブラーニングの導入を試みている授業のビデオを素材に教員研修を実施。[2月26日]  
→課題研究の授業担当者から、他の授業での発問の形式が豊富になった等報告。

⑦事業評価と報告書作成

- 1) 中間評価での指摘に応えるため、選択式に加えて記述式の質問項目を含んだアンケートを各研修等の直後にできる限り行うよう評価方法を改善。  
→数字の意味を「ことば」で裏付ける評価へ。
- 2) アンケートで質問する項目を分類・整理するとともに、質問項目に簡潔な名称を与え、表示上・引用時に便利でわかりやすいものに改善。詳しくは研究報告書に記載。  
→目標とする力の「見える化」へ
- 3) 従来に引き続き、全校生を対象に教育効果を測定するためのアンケート調査[12月]を、また課題研究担当者を対象に聞き取り[12月]およびアンケート調査[2月]を実施。

## 7 目標の進捗状況、成果、評価 一本校の研究開発が目標とする5つの意識・理解・能力について一

昨年12月の調査で各目標について「高校入学前と比べて自分ほどのくらい向上したと思いますか?」と尋ねた結果(「とても」「多少」「ほとんどない」から選択)について示す。全体の傾向に続いて、目標ごとにSGH対象か、あるいは希望者対象の研修に参加したかどうかで差が顕著なもの( $\chi^2$ 検定による有意差が認められるもの)を取り上げる。このほかの評価方法・指標および具体的な数値については、「目標設定シート」および「研究報告書」に記載する。



(注記「SGH対象生徒」は、1年生は国際文化科全員157名、2年生は国際文化科のうち「人権・労働・環境」に関わる研究テーマの講座およびTOEFL講座の生徒76名、3年生は国際文化科のうち選択科目GSまたはTSを履修した生徒48名。)

【学年ごと・国際文化科全体】入学時と比べて「とても」向上したと答えた生徒の割合は、目標1から4は概ね学年進行で高くなっている。目標5は、2年での伸びが大きい。

## ◆目標1 社会貢献意識：「社会に貢献しようとする意識が高い。」

【群別】1年生では希望者対象の研修に参加した生徒(積極群)がそうでない生徒と比べて良い成績を示している[35%/17%]。夏季フィールドワーク研修直後に取ったアンケートでは参加者の81%がこの目標に「とても貢献した」と回答している。来日外国人高校生の生活・社会活動に取り組む高校生の経験について本人から聞いたこと、誰にも保障されるべき権利についてワークショップを通して体感したことがその理由であることが生徒の言葉から読み取れる。

## ◆目標2 国際課題理解：「国際的課題(国をまたぐ問題・多くの国に共通する問題・国際的支援)について理解が進み、複数の視点から検討できる。」

【群別】1年生では希望者対象のSGH研修に参加した生徒(積極群)がそうでない生徒と比べてかなり良い成績を示している。夏季フィールドワーク研修直後に取ったアンケートでは参加者の88%が、この目標に研修が「とても貢献した」と回答している。A1同様、国際的な課題を具体的に感じる経験となったことがその理由であることが生徒の言葉から読み取れる。また、3年SGH群の成績が良い。国際的課題について学習・発表・討論する機会が豊富であったためであることが生徒の言葉からわかる。

## ◆目標3 協同探究力：「国際課題について、助言を求めたり意見を交換したりしながら研究を進めることができる。」

【群別】3年生のSGH群の成績の良さが際立っている。例えばTSでは、模擬国連活動のために国・国際機関・国の政策などについてグループでリサーチし発表する活動を繰り返していた。また、GSでは、討論の進行の訓練や批判的な質問をグループで準備する活動に力点を置いていた。こういった経験がこの結果につながっていると考えられる。(この点については、今年度の記述式解答を求める質問でカバーできていなかった。)



## 1. 研究開発完了報告書

◆目標 4 創造的提案力：「国際課題について、各種関係者が納得できるような柔軟で創造的な提案を（完璧でなくとも、自分なりに）考え、説明できる。」

【群別】3年のSGH群の成績が高い。学年後半で取り組んだ模擬国連についての感想で、「共同提案国を得るための交渉を成立させるためには相手国の状況をよく理解することが重要だと分かった」と複数の生徒が書いていた。こういった経験が理由として大きいことが考えられる。

◆目標 5 英語運用能力：「社会の問題について、英語で主張や意見交換ができる。」

【群別】しかし、3年のSGH群に注目すると、この成績が非常に高い。SDGsを中心とした国際問題や社会問題を扱う高度な内容であったが、ビデオで導入し、新聞や国際機関の文書で基本知識を学び、リサーチを行なって発表するという活動に繰り返し取り組んだ成果であると推測される。

<添付資料>目標設定シート

## 8 次年度以降の課題及び改善点

- ① 課題研究と発表の質を高めるための指導法の研究開発
  - 1) 【教員間の連携】評価の観点は統一のものを策定した。これを元に、さらに適切で使いやすいものに改善する。・1年「探究基礎」および2年「探究」の担当者が経験を持ち寄る機会をさらに増やす。・研究内容を学内に発信し、関連する他教科の授業担当者が助言をしたり、関連について授業で言及したりするような連携をさらに進める。
  - 2) 【現場との連携】・企業や公共施設へのメールや電話による取材、また高校生対象のアンケートを課題研究のために実施する生徒が増えてきた。運営指導委員から勧められている「地元にある取組」への取材を促していく。
- ② 大学等との連携計画についての相談と調整
  - ・国連グローバル・コンパクトや交流の実績がある台湾国立中科実験高級中学を足がかりに、引き続き連携が可能な大学・高校を探す。
- ③ 「GS」の指導法、及び、「TS」におけるGCの導入方法の研究開発
  - ・さらに2年「探究」の授業とのつながりを生徒に意識させられるよう努める。
- ④ 国際性とコミュニケーション・ツールとしての英語力を向上させる取組
  - ・研修旅行での交流を、中期的には、親睦を深めるレベルから、一定のテーマについて情報交換をするレベルへと交流内容を深化させるよう方策を考える。
- ⑤ 英語版報告の学校ホームページでの公開を含む、成果の還元・普及
  - ・今年度は優秀論文にタイトルと要約・キーワードの英訳を加えて掲載する。この経験をもとに、全ての研究について同様の英訳をつけるように指導していく。中期的には、課題研究について国内外の指導教員と学生、そして現場にいる人々が情報交換する場に発展させられるよう努める。
- ⑥ 運営指導委員会の開催
  - ・社会事業に取組む委員に「現場」との仲介を依頼し、取材先を充実させる。
- ⑦ 事業評価と報告書作成
  - ・生徒の成長過程を辿れるよう、個人が識別できる調査方法に変更することを検討する。

### 【担当者】

担当課	教育振興室高等学校課	TEL	06-6946-2387
氏名	香月 孝治	FAX	06-6944-6888
職名	主任指導主事	e-mail	KatsukiKo@mbox.pref.osaka.lg.jp

ふりがな	おおさかふりつせんりこうとうがっこう	指定期間	27～31
学校名	大阪府立千里高等学校		

## 平成27年度スーパーグローバルハイスクール 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）										
		25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	目標値(31年度)	
自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数										
a	SGH対象生徒:			197	194	166			60人	
	SGH対象生徒以外:	40人	40人			348	393			20人
目標設定の考え方: SGH対象生徒について社会問題への関心増とともに3倍に。学校全体として、現状の倍近くに引き上げ。※高校在学中の経験として尋ねている。										
自主的に留学又は海外研修に行く生徒数										
b	SGH対象生徒:			66	79 (46)	73 (49)			7人	
	SGH対象生徒以外:	4人	4人			90 (19)	86 (36)			3人
目標設定の考え方: SGH対象生徒について3年間2人ずつ増、その後維持。目標は現状の約2倍。 ※27年度は全国際文化科生徒中の数、( )内の数字は、今年1年に限定し、詳細について申告があった数。										
将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合										
c	SGH対象生徒:			89%	94%	91%			40%	
	SGH対象生徒以外:	10%	10%			76%	76%			10%
目標設定の考え方: SGH対象生徒について3年間毎年度約10ポイント増。※「はい」+「多少」の合計。「はい」に限定すると62%と37%										
公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数										
d	SGH対象生徒:			16	12	3			5人	
	SGH対象生徒以外:	人		1人			8	7		
目標設定の考え方: SGH対象生徒について2年め以降3年間毎年1人ずつ増。※高校在学中の経験として尋ねている。H29年度より表彰内容を精査し、定義を限定した。										
卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合										
e	SGH対象生徒:			-	95%程度	95%程度			70%	
	SGH対象生徒以外:	45%	45%	45%程度	40%程度	70%程度			45%	
目標設定の考え方: SGH対象生徒について3年間毎年5～10ポイント増。※担当者による推測値。C1レベルの生徒も含む。										
(その他本構想における取組の達成目標)										
f	SGH対象生徒:									
	SGH対象生徒以外:									
目標設定の考え方:										

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）								
	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	目標値(31年度)
a	課題研究に関する国外の研修参加者数							
	人	0人	10	12	10			16人
	目標設定の考え方: 国外研修の意義が伝わるとともに年間計画に位置付けるようになるため、毎年度2人程度増と想定。							
b	課題研究に関する国内の研修参加者数							
	人	0人	127	121	113			120人
	目標設定の考え方: 完成年度には半数以上が何らかの研修・フィールドワークに参加することを想定。							
c	課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数							
	校	0校	0	0	0			4校
	目標設定の考え方: 年間計画の調整を伴うため、2年ごとに1校増と想定。							
d	課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)							
	人	10人	46	39	50			48人
	目標設定の考え方: 年間計画の調整を伴うため、初年度は難しいが、完成年度には2年生各テーマグループに2人を2回。							
e	課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)							
	人	0人	12	18	24			24人
	目標設定の考え方: 年間計画の調整を伴うため、初年度は難しいが、完成年度には4つのテーマに5,6人を想定。							
f	グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数							
	人	1人	11	14	5			8人
	目標設定の考え方: 大会のテーマが関係するとともに、年間計画の調整を伴うため、2年ごとに2人増と想定。H29は内容を精査し定義を厳密にした。							
g	帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)							
	30人	30人	57	52	37			45人
	目標設定の考え方: 年間計画を調整し相手側と連携し留学生を増やすよう取り組むため、2年ごとに5人増と想定。							
h	先進校としての研究発表回数							
	回	1回	0	0	0			4回
	目標設定の考え方: 1~3年次までの指導方法の研究開発を振り返り、役立つ情報を提供するため4年目より発表回数を増。							
i	外国語によるホームページの整備状況 ○整備されている △一部整備されている ×整備されていない							
	×	△	○	○	○			○
	目標設定の考え方: 26年度に整備を始め、年度内に完成させる。							
j	(その他構想における取組の具体的指標) 実践報告会の実施							
					○			
	目標設定の考え方: 3年目から成果普及のため校外の教員向けに実施する。							

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度
全校生徒数(人)	911	950	960	953	946		
SGH対象生徒数			254	312	284		
SGH対象外生徒数			706	641	633		



## 2. 研究開発構想の概要(抜粋)

## 2. 研究開発構想の概要（抜粋）

### (1) 研究開発構想名

グローバル・マネジメント力を備えたリーダーの育成計画

### (2) 研究開発の目的・目標

#### 1) 目的:

国際的な課題について、ステークホルダーがWin-Winの関係となるような提案を行う力であるグローバル・マネジメント力を備えたリーダーを育成するための教育課程の研究開発。

#### 2) 目標

生徒に対し、次に掲げるグローバル・マネジメント力を育成することを目標とする。

高い社会貢献意識

国際的課題についての多面的な視点と深い理解

国際的課題について他者と連携・協調しつつ探究する力

ステークホルダーがWin-Winの関係となるよう柔軟かつ創造的な提案を行う力

高いレベルのコミュニケーション・ツールとしての英語力

### (3) 研究開発の概要

- ① 課題研究の研究領域として国連グローバル・コンパクト（以下、GC）の4分野(労働，環境，人権，腐敗防止)を取り上げ，GC参画企業とNGOの取組の比較，及び，GCの取組に係る日米比較という手法により多面的な視点を育むための指導法を研究開発する。  
→立場や利害が対立する領域を課題研究の対象とする。
  - ② 国連・大学・企業・NGOと連携し，フィールドワーク等を通じ研究者・実践家の生き方に直接触れることにより，高い社会貢献意識とGCに係る深い理解を育むとともに，高いレベルのコミュニケーション力としての英語力を向上させたための効果的な研修計画を研究開発する。  
→国際的課題に取り組む大人の姿に触れる
  - ③ 生徒が互いに協力しながら連携機関等より適切に指導・支援を受け，必要な情報を収集・分析・整理する力を身につけることができる指導法を研究開発する。  
→外部の教育資源の導入と論理的思考を促す指導法の研究
  - ④ 上記①～③を通じ，ステークホルダーがWin-Winの関係となるよう柔軟かつ創造的な提案を行える力を生徒に育むための教育課程を研究開発する。  
→3年間で、「知る」、「調べる」、「提案する」へと発展させる学習場面の提供
-

## (4) 学校全体の規模（平成 29 年度）

全日制の 課程	第 1 学年		第 2 学年		第 3 学年		計	
	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
国際文化科	160	4	158	4	154	4	472	12
総合科学科	159	4	159	4	156	4	474	12
計	319	8	317	8	310	8	946	24

## (5) 研究開発の内容等

## 1) 全体について

## A. 現状の分析と課題

本校においては、国際文化科における課題研究の質を向上させ、国際的課題に高い関心をもつ人材育成の裾野を拡大するとともに、グローバル・リーダーを育成することが課題である。そのため、国際文化科における課題研究の領域に国連グローバルコンパクト(GC)4分野を取り入れ、GC課題研究コースを設置する必要がある。また、1・2年次についてはそれぞれの発達段階に応じたテーマを提示すること、3年次については英語で発表・討論するための選択科目を拡大することが必要である。加えて、本校がSSHにより研究開発してきた、課題研究停滞期における指導法を応用することが必要である。

## B. 研究開発の仮説

仮説1. 国際文化科の生徒を対象とする。課題研究が本格化する2年次以降については、GCに係る課題研究のコースを設置し、同コースを指導する教員チームを組織することが必要である。また、生徒の主体性を育みつつ、発達段階に応じたテーマを示す。それにより、グローバルな課題に対する高い関心と深い理解をもつ人材育成の裾野の拡大とグローバル・リーダーの育成を共に達成することができる。

仮説2. GCに関わるステークホルダーそれぞれの利害関心について学び、企業とNGO、及び、日・米の取組について生徒が比較対照するとともに、地域の企業家等の支援を受け、実生活との関わりの中で課題研究を行う仕組みをつくる必要がある。それにより、現実に即した、柔軟かつ創造的な提案を行えるようになる。

仮説3. GCやグローバルな課題に取り組む人たちと直接触れあう機会や見学・実習を多く取り入れることが必要である。特に、中間発表会後の研究停滞期にそうすることにより、生徒はモチベーションを維持するとともに進路や生き方について思索を深める。

仮説4. 互いに切磋琢磨するようなリーダー層を育て、他の生徒を牽引する仕組みをつくる必要がある。そのことにより、優れた意欲・能力を有する生徒を育成・支援することができるようになる。

## 2) 課題研究について

### A. 研究領域

GCの4分野である「人権」「労働」「環境」「腐敗防止」を設定する。この研究領域は、本校がすでに国際文化科の課題研究において多くの生徒が取り上げてきたものである。この領域を明示することにより、生徒がこれまで以上に具体的にテーマを設定することができ、研究の質が向上すると考えている。

### B. 連携機関、及び、連携の内容

○ 課題研究においては、次の機関等と連携する。

国際連合日本代表部（以下、国連）

大阪大学国際公共政策研究科（以下、阪大）

関西学院大学「国連ユースボランティア」派遣日本訓練センター（以下、関学）

グローバル・コンパクト・ジャパン・ネットワーク（以下、GCジャパン）

アジア・太平洋人権情報センター（以下、ヒューライツ大阪）

大阪府中小企業家同友会北ブロック（以下、同友会）

Anti-Defamation League（以下、ADL）（これらの機関等を総称し以下、大学等）

○連携の内容については、次の通りである。

- ・国連…本校5期生の沼田隆一氏（元国連開発計画勤務）と連携し、ニューヨーク研修時に、日本代表部より国際的な課題、及び、GCについてご講義いただく。
  - ・阪大…蓮生郁代准教授にご協力いただき、年度末に実施する課題研究発表大会においてご指導・ご助言いただく。また、同研究科が主催する次の行事等についてご案内いただき、本校生に参加させる。
    - ・国際的課題に係る講演会
    - ・サマーキャンプ（全国高校生を対象とした国際的課題についての宿泊研修会）
    - ・高校生を対象とした国際公共政策学会、等
  - ・関学…同大学「国連ユースボランティア」派遣日本訓練センターと連携し、開発途上国等においてボランティアに取り組んだ学生によるご講演、及び、本校生の課題研究へのご指導・ご助言をいただく。実施時期については、中間発表会以後の課題研究の展開・発展期とする。
  - ・GCジャパン…同事務局を通じ、団体として本校生の課題研究に対しご指導・ご助言いただくことについてご承認いただいている。複数の企業のご担当者より、それぞれの具体的な活動についてのご講義、及び、課題研究中間発表会におけるご指導・ご助言をいただく。
-



- ・ヒューライツ大阪…ジェファーソン・プランティア氏（主任研究員）と連携し、本校1年生対象に、約5日間の研修会（日帰り）を実施することとしている。テーマは、GCの意義、市民の立場からGCに期待するもの、及び、優れた企業の取組についての紹介である。また、中間発表会において指導と評価もしていただく。
- ・同友会…同北ブロック事務局を通じ、中間発表会以後の課題研究の展開・発展期において、本校生による企業訪問受け入れ・フィールドワークと、インタビュー等に対するご指導をいただく。
- ・A D L…ニューヨーク研修時に、多面的な視点をもつことの意義、課題研究チーム等集団内の協力関係を高めるためのスキル等について、参加体験型学習によりご指導いただく。また、ニューヨーク研修においては、ターニャ・オダム氏（Global Diversity and Inclusion and Education Consultant and Executive Coach）と連携し、生徒が、GCや企業の社会的責任（CSR）推進に取り組む米国企業を訪問し、フィールドワークやインタビュー等を行えるよう企画する。

### C. 各学年の課題研究

#### 【1年次】

##### ・課題研究の目的

- ① 課題設定から論文作成までの指導法の研究開発。
- ② 国際文化科の生徒160名全員の、グローバルな課題と、GC、及び、研究領域に対する知識・関心を向上させること。
- ③ グローバルな課題とGCについて高い関心を持ち、課題研究において優れた意欲・能力を有する生徒を育成すること。

##### ・仮説との関係と期待される成果

生徒の自発性を育みつつ、1年次の発達段階に応じたテーマを設定することにより、限られた時間内に質の高い調査研究が行えるようになる。また、課題設定から論文作成までの知識・スキルが向上するため、課題研究の質が向上する。

- ① 企業の取組とNGOの取組を比較対照させることにより、課題研究の質が向上する。
  - ② 1年生全員がグローバルな課題とGCについての基礎知識を獲得するため、グローバルな課題に対する高い関心と深い理解をもつ人材育成の裾野が拡大する。
  - ③ GC課題研究コースを設置し、同テーマに対し意欲関心のある生徒を集めることにより、将来のグローバル・リーダーを育成・支援することができるようになる。
  - ④ 中間発表以後、研究停滞期において、同友会等関係者へのインタビューを行わせることにより、生徒のモチベーションを維持させることができる。また、リーダーとしての自覚が高まり、将来のグローバル・リーダーとして成長する契機となる。
-

### 【2年次】

#### ・課題研究の目的

- ① 課題研究と発表の質を高めるための指導法の研究開発。
- ② GC課題研究コース生徒のテーマについての理解をさらに深めるとともに、大学等関係者と連携し、情報収集や先行研究について調査したり、チームをうまくとりまとめたりするなど、マネジメント力を含む課題研究のスキルアップを図ること。
- ③ 特に高い関心をもつ生徒をリーダーとして育成・支援すること。

#### ・仮説との関係と期待される成果

- ① 生徒の自発性を育みつつ、1年次より難易度の高いテーマを設定することにより、生徒のモチベーションが高まるとともに、限られた時間内に質の高い調査研究が行えるようになり、課題研究の質が向上する。
- ② 企業の取組とNGOの取組に加え、日米の取組を比較対照させることにより、課題研究の質が向上する。
- ③ GC課題研究コース・リーダーを中心に、国連本部、ADL等における研修を実施することにより、リーダー間の連帯感が強まり、課題研究に対するモチベーションがさらに向上する。
- ④ 中間発表会以後、研究停滞期において、同友会等関係者へのインタビューを行わせることにより、生徒は、進路や生き方についての思索を深めるとともに、課題を実生活との関わりの中で探究できるようになる。
- ⑤ 3月に、GC課題研究コースの優秀チームをADL等に派遣し、インタビュー等を行わせることにより、グローバルに活躍したいというモチベーションをより高めることができる。

### 【3年次】

#### ・課題研究の目的

- ① 3年次の選択科目として、平成28年度に「グローバル・スタディーズ」を新設するとともに、生徒が課題研究の内容について英語により発信・提案し、討論する力を育むこと。なお、指導教員はGC課題研究コース選択生徒に対し、同科目、あるいは、既存の「トピック・スタディーズ」を選択することを促すこととする。
  - ② ADLと連携し、米国において発表・提案、討論する機会を設けるよう努め、生徒が海外の志を同じくする企業・団体関係者とネットワークを築くことができるようにすること。
  - ③ 阪大の国際公共政策学会をはじめとする研究発表会、GC等が主催する研究会等に参加するよう努めるとともに、全国の志を同じくする企業・団体関係者とネットワークを築くことができるようにすること。
  - ④ TOEFL受検者を40名以上とし、海外大学へのダイレクト進学者を複数名出すこと。
-

・仮説との関係と期待される成果

- ① 3年次の選択科目の中に、「グローバル・スタディーズ（GS）」（2単位）を新設する。目標は、国際的な課題をテーマとして取り上げ、高度な英語によるコミュニケーション力を育成することである。本校にはすでに、同じ指導法を用いている選択科目「トピック・スタディーズ（TS）」（2単位）があり、例年20～40名が選択している。今回、GSを新設することにより、グローバルに活躍することを目標とする生徒層が拡大する。
- ② 「GS」と「TS」といった授業において、GC課題研究コースのテーマを取り上げることにより、同テーマについての思索が深まるとともに、発表・討論等を行うために必要な高度な英語力を習得できる。

### 3) 課題研究以外の取組

#### A. 学校設定科目「グローバル・スタディーズ」の新設

3年次の選択科目として、平成28年度に「グローバル・スタディーズ（GS）」を新設し、国際的な課題やGC課題研究コースのテーマについて、高度な英語によりプレゼンテーションや討論を行える力を育成する。また、TOEFL iBT等を活用した指導を行う。

#### B. 「トピック・スタディーズ」でGC等をテーマとすること

3年次選択科目「トピック・スタディーズ」の指導項目の中に、国際的な課題とGC課題研究コースのテーマを基にした、英語によるプレゼンテーションや討論を取り入れる。

#### C. ICT機器等を活用した反転授業と教科指導

1年次「英語文法」・2年次「英語ライティング」において1年間の授業映像を製作し、反転授業を実施。英語・国語・地歴公民・理科等においてICT機器・視聴覚機器を効果的に活用する。

#### D. グローバル・リーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の取組内容・実施方法

・全員対象海外研修旅行の実施

引続き、国際文化科の全生徒（160名）に、2年次、オーストラリアにおいて、5日間のホームステイを軸とした研修旅行を実施する。

・国際理解講座の開催

1・2年次に、国際文化科の生徒全員を対象に、JICA職員等を招き、国際理解講座を行う。平成26年度については、ハワイ大学教授を招き、講演会を実施した。今後引き続き、外部講師による研究会等を実施する。

・海外の高校生との交流

長・短期留学生を積極的に受け入れる。（毎年30名以上）ハイスクール・ディプロマッツ交流（全米選抜生徒との交流）、大阪府カリフォルニア友好交流（日本語を学習している生徒との相

---

---

互交流), 日仏高校生交流(フランスの日本語・日本文化を学習している生徒との相互交流)等, 海外高校生との交流と討論会を実施する。今後, 以上の取組を継続する。

## (6) 研究開発計画・評価計画

### 1) 第一年次(平成 27 年度)

#### A. 研究開発計画

##### ① 課題設定から論文作成までの指導法の研究開発

- a. 「探究基礎」の教育課程における導入部分(「気づき」「課題設定」「調査計画」)について平成 25 年度開発したものを改善するとともに, 後半の指導法について検討し, 策定する。
- b. 「探究基礎」及び「探究」の教育課程における G C 課題研究コースに係る指導・支援方法について検討し, 策定する。
- c. G C 課題研究コース選択生徒が 80 名以上となるような働きかけ方について研究する。
- d. 中間発表会以後の「停滞期」における指導法について研究開発する。

##### ② 大学等との連携計画についての相談と調整

- a. 大学等との連携について, 関係機関と調整し, 年間計画を作成する。
- b. グローバル課題・G C について, 指導教員対象の研修を実施する。
- c. G C 課題研究コースに意欲・関心を有する 1 年生約 10 名によるニューヨーク研修を実施するとともに, 現地において国連・A D L 等と研修内容について協議する。

##### ③ 「G S」の指導法, 及び, 「T S」における G C の導入方法の研究開発

- ・「G S」の指導法, 及び, 「T S」における G C の導入方法を研究開発する。

##### ④ 国際性とコミュニケーション・ツールとしての英語力を向上させる取組

- ・国際文化科の海外研修が質の高いものとなるよう計画する。

##### ⑤ 「探究基礎」に係る実践等の英語版報告を作成し, 学校ホームページにアップロードする。

#### B. 評価計画

##### ① 課題設定から論文作成までの指導法の研究開発

- a. 「探究基礎」「探究」の教育課程, 及び, G C 課題研究コースに係る指導・支援方法, 中間発表以後の「停滞期」における指導法が策定できたかどうかにより評価する。(「探究」については, 平成 27 ~ 28 年度の 2 年間で開発する。)

b. GC 課題研究コース・リーダーを発掘できたかどうかについて、指導教員による観察等により評価する。

② 大学等との連携計画についての相談と調整

・大学等との連携計画について策定できたかどうかにより評価する。

③ 「GS」の指導法、及び、「TS」におけるGCの導入方法の研究開発

・「GS」の指導法、及び、「TS」におけるGCの導入方法を開発できたかどうかにより評価する。(平成27～28年度の2年間で開発する。)

④ 国際性とコミュニケーション・ツールとしての英語力を向上させる取組

・国際文化科の2年次の海外研修が高い質となるよう計画されたかどうかにより評価。

⑤ 「探究基礎」に係る実践等の英語版報告を作成し、学校ホームページにアップロードする。

・「探究基礎」に係る実践を中心とした英語版報告が作成され、学校ホームページにアップロードされたかどうかにより評価する。

**2) 第二年次(平成 28 年度)**

A. 研究開発計画

① 課題研究と発表の質を高めるための指導法の研究開発

a. 「探究」の教育課程、及び、GC 課題研究コースに係る指導・支援方法、中間発表以後の「停滞期」における指導法について検討し、策定する。

b. 第二年次におけるGC 課題研究コース・リーダーに対する指導法について策定する。

c. 第二年次の中間発表以後の「停滞期」における指導法について研究開発する。

② 大学等との連携計画についての相談と調整

米国研修について、調整し、年間計画を作成する。

③ 「GS」の指導法、及び、「TS」におけるGCの導入方法の研究開発

「GS」の指導法、及び、「TS」におけるGCの導入方法を開発できたかどうかにより評価する。(平成27～28年度の2年間で開発する。)

④ 国際性とコミュニケーション・ツールとしての英語力を向上させる取組

国際文化科の海外研修旅程、及び、事前指導計画を作成する。

⑤ 「探究」に係る実践を中心とした英語版報告を作成し、学校ホームページにアップロードする。

---

## B. 評価計画

### ① 課題設定から論文作成までの指導法の研究開発

- a. 「探究」の教育課程，及び，GC 課題研究コースに係る指導・支援方法，中間発表会以後の「停滞期」における指導法が策定できたかどうかにより評価する。
- b. GC 課題研究コース・リーダーを発掘・支援できたかどうかを，指導教員の観察等により評価。

### ② 大学等との連携計画についての相談と調整

大学等との連携計画について策定できたかどうかにより評価する。

### ③ 「GS」の指導法，及び，「TS」におけるGCの導入方法の研究開発

「GS」の指導法，及び，「TS」におけるGCの導入方法を開発できたかどうかにより評価。

### ④ 国際性とコミュニケーション・ツールとしての英語力を向上させる取組

国際文化科の海外研修終了後，生徒への意識調査を実施し，評価する。

### ⑤ 「探究」に係る実践を中心とした英語版報告を作成し，学校ホームページにアップロードする。

「探究」に係る実践を中心とした英語版報告が作成され，学校ホームページにアップロードされたかどうかにより評価する。

## 3) 第三年次(平成 29 年度)

### A. 研究開発計画

#### ① 大学等との連携計画についての相談と調整，及び，研究発表の実施

- a. 課題研究に係る研究会・会議について調べ，生徒の発表・提案を行う。
- b. 全国のSGH校によるSGH生徒研究発表会へ参加し，口頭発表を行う。
- c. 本校の3年間の取組の実践報告会を実施する。

#### ② 「GS」，及び，「TS」の指導法の研究開発

「GS」，及び，「TS」の指導法を研究開発する。

#### ③ 海外大学へのダイレクト進学促進

#### ④ 「探究」「探究基礎」の優れた作品の英語版を作成し学校ホームページにアップロードする。

---

## B. 評価計画

- ① 大学等との連携計画についての相談と調整、及び、研究発表の実施
  - a. 研究発表の質について、大学等関係者等より感想・意見をいただき、評価する。
  - b. 研究発表に係る表彰等により評価する。
- ② 大学等との連携計画についての相談と調整  
大学等との連携計画について策定できたかどうかにより評価する。
- ③ 海外大学へのダイレクト進学促進。  
海外大学へのダイレクト進学者数により評価する。
- ④ 「探究」「探究基礎」の優れた作品の英語版を作成し、学校ホームページにアップロードする。  
課題研究優秀作の英語版の作成と学校ホームページへのアップロードにより評価する。

### 4) 第四年次(平成 30 年度)

卒業生に対してアンケート等を実施し、高校卒業後の意識の変容や大学卒業時の進路選択意識等の追跡調査を行う。その他は、第三年次と同じ。

### 5) 第五年次(平成 31 年度)

府内高校・全国 S G H 校対象に 5 年間の取組の実践報告会を開催。その他は第四年次と同じ。

### 6) 研究開発成果の普及に関する取組

研究授業の公開・研究成果報告会の実施・学校ホームページへの課題研究の情報提供

大阪府内の高校および S G H 校を対象に公開授業と研究成果報告会を実施する。

夏季休業中に、近隣の中学生を対象として英語力アップ講座を実施する。

他の S G H 校との交流、S G H 生徒研究発表会、大阪府内 S G H 校合同研究発表会へ参加

学会・各種研究発表会等での研究成果の報告

研究過程や研究成果について、本校ホームページでの情報提供を随時行う。

**(7) 研究開発成果の普及に関する取組**

全国のSGH校によるSGH生徒研究発表会へ参加し、口頭発表を行う。また、府内の高校及び全国SGH校を対象に、本校の取組の実践報告会を開催し、本校が開発研究した「探究力を育成する指導法・教材集」「コミュニケーション・ツールとしての英語力を高める指導法・教材集」を作成し配布する。また、研修旅行等の成果を検証し報告書を作成し、配布する。それらについて、本校ホームページにおいて情報提供する。

**(8) 幹事校としての取組**

該当なし

**(9) 研究開発組織の概要（経理等の事務処理体制も含む）**

**1) SGH運営指導委員会**

SGH研究開発事業の運営に関し、専門的見地から指導、助言に当たる。学校教育に専門的知識を有する者、学識経験者、関係行政機関の職員等、第三者によって組織する。

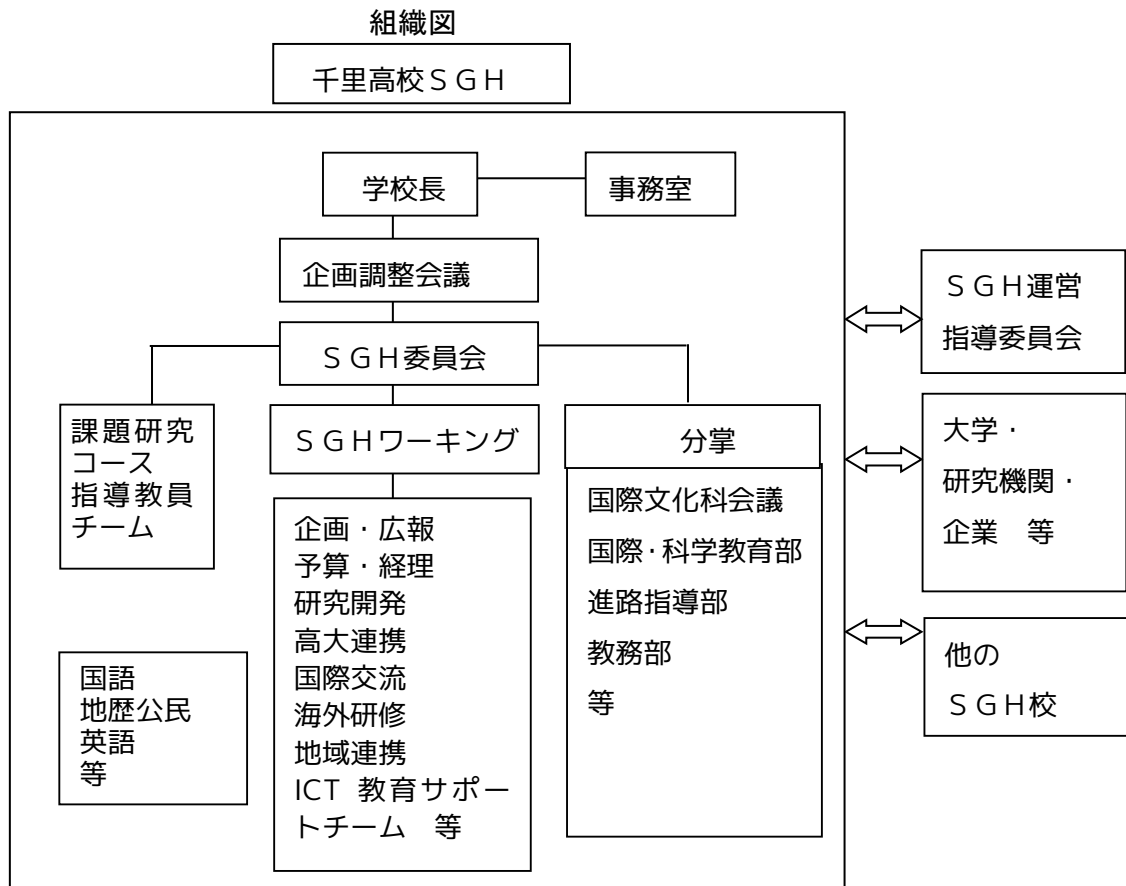
**2) SGH委員会**

SGH研究開発事業全般について、企画、運営、実施、研究開発、予算編成等を担当する。ワーキンググループを設け、各業務に当たる。

**3) 課題研究コース指導教員チーム**

GC課題研究コース、及び、その他の課題研究を指導する教員により構成する。指導法・評価検証方法を検討・作成・共有し、課題研究の推進役を担う。







## 3. 評価の方法

### 3. 評価の方法

#### 留意した点

- 中間評価での指摘（下記）を受け改善を図った。

「…しかし、課題研究や成果の検証方法が生徒アンケートに偏っており、アンケート結果はS G Hの成果か判断が難しいものもあるため、特に課題研究の取組や成果については、具体的な生徒の探究の姿での提示など今後は改善が必要である。」

#### 改善点

- ① 生徒アンケートは、研修実施後すぐに選択式および記述式のアンケートを実施し、「数値」と「言葉」を組合せて評価するようにした。  
(12月に行う1年を振り返っての調査に加えて実施)
- ② 課題研究等の担当教員による評価を研究報告書に掲載することにした。  
(これまでは担当者間で共有するに止まっていた。)
- ③ 指摘への対応とは別に、生徒アンケートの質問項目をカテゴリーに分類して、<カテゴリー記号+番号+7文字までの名称>を付与し、認識、表示しやすくした。

**生徒対象アンケートの改善**

夏季グローバルセミナー2017アンケート

1 今回の研修を受けて、皆さんの気持ちにどんな変化がありましたか。

① はい ② 多少 ③ はい-え

1 留学、海外研修の楽しさを知った。 0 0 0 ●

2 自己探求が深まった。 0 0 0 ●

3 グローバルな視野が広がるようになった。 0 0 0 ●

4 グローバルな関係がより親密に理解できるようになった。 0 0 0 ●

5 世界の課題について学んだ。 0 0 0 ●

2 次に挙げる主要高校のSGHの目標について、今回の研修はどのくらい貢献したと思いますか。

④ とても ⑤ 多少 ⑥ ほとんどない

1 国際に貢献しようとする気持が湧いた。 0 0 0 ●

2 国際的課題について理解が深まり、その解決の視点が広がった。 0 0 0 ●

3 国際的課題について各機関と連携できるような柔軟で創造的な提案を考へ、実行できる。 0 0 0 ●

3 全体的な印象として

① はい ② 多少 ③ はい-え

1 この研修に参加して良かったですか。 0 0 0 ●

41 世界の現状について、知らなかったことで大切だと思うことはどんなことですか。

42 あなたが生きて行く上で「難題」になったと思うことはどんなことですか。

1年 組 番 氏名

6. 生徒の反応

① アンケート

国際文化科1年希望者対象：夏季グローバルセミナー

81%	15%	A1 社会貢献意識
88%	12%	A2 国際理解
73%	25%	A4 創造的提案力
96%	4%	B1 国際課題理解
100%	0%	B6 リアルな理解

② 生徒のこぼれ

質問1：世界の現状について、知らなかったことで大切だと思うことはどんなことですか。

1. ずっと世界のことについては好きだったけど、今まであまり人権や、社会的に弱い立場となってしまう状況にある人々に目を向けたことがなかった。けれど、詳しく実際に体験した人や、活動に参加している人の話を聞いて、世界的な動きで人権をどんな人にも保障することが大切だと分かりました。
2. 在日コリアンの人が、以前は民間企業の就職差別や公務員、弁護士などの国籍条項のせいでも者など限られた職業にしか就けなかったこと。
3. イスラームのことを知ることはとても大切だと感じました。自分の勝手な先入観で、イスラームは●●と決めつけていました。相手のことを知る前に、勝手な先入観を持つと新たな差別につながる。イスラームは他の宗教と何も変わらない、平和を願っている宗教なのだと感じました。

7. 評価

- ① 期待したほとんどの指標で8割以上の生徒が「効果があった」と答えている。希望者対象の研修であることを考慮しても非常に高い数字であり、各指標に役立ったとの実感を持つ参加者が多かったと推定される。
- ② 直接的な効果は期待できない項目 A4 創造的提案力（「国際課題について、各種関係者が納得できるような柔軟で創造的な提案を考へ、説明できる。」）にも3/4の生徒が「効果がある」と答えている。「生徒のこぼれ」からすると、人権 立場の多様性・先入観について知る中で、対話による役割を認識し、それが提案力に繋がると感じているものと推定される。

## 評価指標の全体像

---

- 生徒による評価（アンケート）
  - ・ 国際文化科：講演・研修等の直後（記述＋選択式）＋12月（選択式・クロス集計にも利用）
  - ・ 総合科学科：12月（選択式・クロス集計にも利用）
  - ・ 両学科とも：学校教育自己診断アンケートの結果（選択式・経年変化を見るために利用）
- 教員による評価
  - ・ 講演会や研修等：担当者が研修ごとに評価。
  - ・ 課題研究：①ルーブリックを授業初期に生徒に示し、時期に応じて項目を選択利用しながら評価および指導に利用。  
②中間期と終盤に指標を立てて数値＋コメントで評価→自己点検・次年度担当者への申し送りに利用。
- 第三者による評価
  - ・ 2年生の課題研究に対して、企業 CSR 担当者・国際問題に関わる大学教員・運営指導委員が年2回生徒の発表を見て評価および助言。
  - ・ 2年生の全ての課題研究に対して個別に、大学院生が評価および助言。
  - ・ 運営に対して、運営指導委員が年2回評価および助言。
  - ・ 外部試験の結果も参考にする。

## 資料

---

- 本校のアンケートで用いている質問項目 | カテゴリーと略称のリスト（次ページ）

《資料 本校のアンケートで用いている質問項目 | カテゴリーと略称のリスト》

(◆は、項目名の略称。アンケートにはこの略称で表示。/ 矢印の後の「 」は質問内容。)

## A. 本校が育成することを目標とする「グローバルマネジメント力」

各目標について、「高校入学前と比べて自分はどのくらい向上したと思いますか？」

各目標について、授業・研修等がどのくらい貢献したと思いますか？」

### A.1 高い社会貢献意識

→「社会に貢献しようとする意識が高い。」◆A1 社会貢献意識

### A.2 国際的課題についての多面的な視点と深い理解

→「国際的課題（国をまたぐ問題・多くの国に共通する問題・国際的支援）について理解が進み、複数の視点から検討できる。」◆A2 国際課題理解

### A.3 国際的課題について他者と連携・協調しつつ探究する力

→「国際課題について、（先生やクラスメイト等に）助言を求めたり意見を交換したりしながら研究を進めることができる。」◆A3 協同探究力

### A.4 ステークホルダーが Win-Win の関係となるよう柔軟かつ創造的な提案を行う力

→「国際課題について、各種関係者が納得できるような柔軟で創造的な提案を（完璧でなくとも、自分なりに）考え、説明できる。」◆A4 創造的提案力

### A.5 高いレベルのコミュニケーション・ツールとしての英語力

→「社会の問題について、英語で主張や意見交換ができる。」◆A5 英語運用能力

## B. その他本校が期待する効果

### B.1 グローバルな問題に対する関心の高まり

→「高校入学時と比べて、グローバルな問題に対する関心が高まりましたか？」

◆B1 国際課題関心

### B.2 国際課題に取り組む意欲の形成

→「将来グローバルな問題について、自分の知識を活かして必要ならリーダー的役割を果たしたいと思いますか？」◆B2 国際課題意欲

### B.3 多角的検討の必要性に対する認識

→「高校入学時と比べて、現実の問題の解決策を考えるには、多様な立場からの検討が必要だという認識は高まりましたか？」◆B3 多角検討認識

### B.4 事実や意見を調べる力

→「ある問題について、事実や意見を調べる力は向上したと思いますか？」

◆B4 リサーチ能力

### B.5 わかったことを伝える力

→「調べたことを整理しわかったことを筋道立てて述べる力は向上したと思いますか？」

◆B5 レポート能力

### B.6 グローバルな課題を具体的に理解

→「グローバルな問題をより現実的に理解できるようになりましたか？」

◆B6 リアルな理解

B.7 研修経験の波及効果

→「この研修で得た知識を、課題研究の時間に他の人のために役立てましたか？」

◆B7 研修経験波及

B.8 グローバルな大学への進学希望

→「国際化に重点を置く大学へ進学したいと思っていますか？」◆B8 国際大学希望

B.9 大学の専攻分野選択への影響

→「課題研究や SGH 関連の講演・研修が大学の専攻分野の選択に影響を与えたと思いますか？」◆B9 専攻分野影響

B.10 知的好奇心の高まり

→学校教育自己診断アンケート「課題研究の授業は知的好奇心を高めている。」

◆B10 知的好奇心向上

B.11 将来の進路・生き方について考える機会の提供

→「将来の進路について考えた。」◆B11 進路検討機会

C. SGH 統一のアウトカム指標

C.1 自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数

C.1.1) →「高校在学中に自主的に社会貢献活動に取り組んだことがありますか？」

◆C11 社会貢献経験

C.1.2) →「高校在学中に自主的に自分の成長のためネットや本などを使って情報集めをしたことがありますか？」◆C12 自己研鑽経験

C.1.3) 上記のどちらかまたは両方の経験がある生徒◆C13 貢献研鑽経験

C.2 自主的に留学又は海外研修に行く生徒数

C.2.1) →「高校在学中に留学または海外研修（「海外研修旅行」を除く）に行きましたか？」◆C20 留学研修経験

C.3 将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合

C.3.1) →「将来留学したいと思っていますか？」◆C31 留学希望

C.3.2) →「将来国際的に活躍したいと思っていますか？」◆C32 国際活躍希望

C.3.3) 上記のどちらかまたは両方を希望する生徒◆C33 留学活躍希望

C.4 公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数

C.4.1) →「公的機関から表彰されましたか？」◆C41 公的表彰経験

C.4.2) →「グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会において入賞しましたか？」◆C42 大会入賞経験

C.4.3) 上記のどちらかまたは両方の実績がある生徒◆C43 表彰入賞経験

## D. 参加満足度

### D.1 全体としての印象

→「参加してよかった。」◆D1 参加満足評価

### D.2 成長が実感できたか。

→「自分は成長したと思いますか。」◆D2 成長実感

### 《項目略称の整理》

#### A. 本校が育成することを目標とする

「グローバルマネジメント力」

- ◆A1 社会貢献意識
- ◆A2 国際課題理解
- ◆A3 協同探究力
- ◆A4 創造的提案力
- ◆A5 英語運用能力

#### B. その他本校が期待する効果

- ◆B1 国際課題関心
- ◆B2 国際課題意欲
- ◆B3 多角検討認識
- ◆B4 リサーチ能力
- ◆B5 レポート能力
- ◆B6 リアルな理解
- ◆B7 研修経験波及
- ◆B8 国際大学希望
- ◆B9 専攻分野影響
- ◆B10 知的好奇心
- ◆B11 進路検討機会

#### C. SGH 統一のアウトカム指標

- ◆C11 社会貢献経験
- ◆C12 自己研鑽経験
- ◆C13 貢献／研鑽経験
- ◆C20 留学研修経験
- ◆C31 留学希望
- ◆C32 国際活躍希望
- ◆C33 留学／活躍希望
- ◆C41 公的表彰経験
- ◆C42 大会入賞経験
- ◆C43 表彰入賞経験

#### D. 参加満足度

- ◆D1 参加満足評価
- ◆D2 成長実感



## 4. 実践報告と評価

### 仮説の要約と略称

- 仮説1.** 教員の指導力が増し発達段階に応じたテーマを設定  
→グローバルな課題に対する高い関心と深い理解が生まれる。  
<略称：国際課題に関する関心・理解の促進>
- 仮説2.** 利害の対立を学ぶ・セクター別／国別取組について比較対照する・実生活との関わりの中で課題研究を行う  
→現実に即した柔軟かつ創造的な提案を行えるようになる。  
<略称：現実的な提案力の育成>
- 仮説3.** 国際的な課題に取り組む人たちと直接触れあう機会や見学・実習を行う  
→モチベーションを維持する+進路や生き方について思索を深める。  
<略称：探究意欲の刺激・キャリア形成への貢献>
- 仮説4.** リーダー層を育て他の生徒を牽引する仕組みをつくる  
→優れた意欲・能力を有する生徒を育成・支援することができる。  
<略称：積極層の意欲・能力の向上と波及効果>

(1)	国際文化科	『国際理解』特別授業(1)	2017年
	1年全員対象		6月20日・22日
	クラス単位・計160人		本校図書室
		高校生の日常と国際的な課題のつながり	

## 概要

企業・地方公共団体・市民に対して国際人権に関わる情報を提供している一般財団法人アジア・太平洋人権情報センターから松岡秀紀研究員を学校設定科目『国際理解』にゲスト講師として招いた。

高校生の日常とグローバルな課題がどのように結びついているか、そして企業・市民・行政の各セクターがどのように手立てを講じているかを伝え、SDGs との関連について考えるワークショップを行っていただいた。

## 位置付け

- 本校 SGH の指導で取り上げる課題を導入する。
- 年度後半の諸課題考察の際には、この授業で得た「日本と世界とのつながり」を生徒たちが意識して取り組むことができるよう指導していく。

## 目的

- ・日本の高校生の日常が国際的な課題とつながっていることを知る。
- ・課題解決のため NGO・企業・国際機関等様々なステークホルダーの取組があることを理解する。

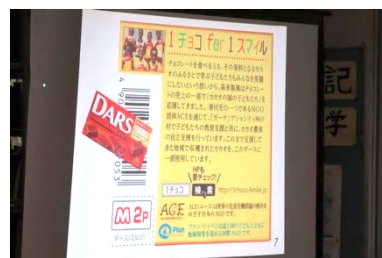
## 仮説

- ・仮説1. 国際課題に関する関心・理解の促進
- ・仮説2. 現実的な提案力の育成
- ・仮説3. 探究意欲の刺激・キャリア形成への貢献

## 学習の様子



↑グループワークのしやすい図書室を利用した。



↑身近な例としてチョコレートを取り上げ、児童労働との関連を紹介した。



↑グループで、児童労働の問題がSDGsのどの目標とどう関連があるのかを考えた。

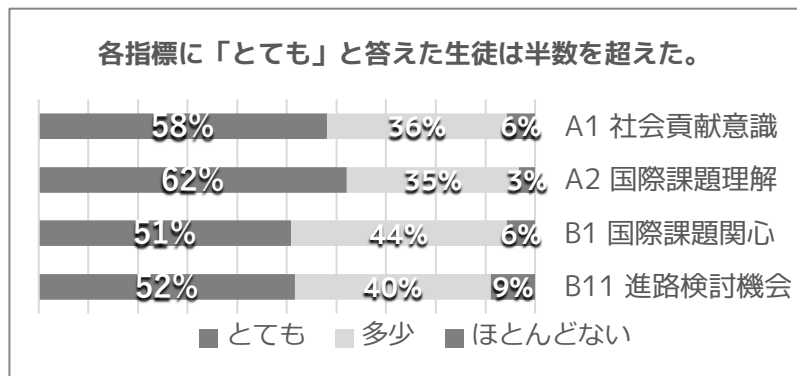


↑グループの代表が報告し全体で共有した。

## 評価

- 国際問題の導入として、理解が進み関心を高めることに非常に効果があったと言える。
- 社会貢献意識を高めることにもなった。
- 進路を考える機会の提供にもなった。

## Evidence 1 | Data



## Evidence 2 | Voice 生徒の声

“ “  
 少しでも世界で起きている課題について考え、できることを積極的に始めようという気持ちになった。

“ “  
 明日からできることだったら、少しでもニュースを気にするとかだと思う。

“ “  
 個人個人は世界規模の出来事とはあまり関係ないと思っていましたが、実はつながっているんだと思いました。

“ “  
 どんな進路を選んでも（NGOとか国連とか直接そういうものじゃなくても）国際的な問題を解決していくための機会があるということがわかった。

---

## 今年度の主な改善点

---

- SDGs の各目標との関連を内容に加えた。
- グループワークを導入した。

## 担当者の振り返り

---

- 課題導入の目的は達成できた。この授業で学んだことを「国際理解」の年度後半、また来年度の「探究」に活かしてくれることを期待したい。
- グループワークを加えていただいたため、授業時間内におさまりきらないクラスもあった。生徒への指示等を徹底して時間短縮を図る必要がある。

## 資料

---

- ① 授業の進め方
- ② ワークシート  
(次ページ以降に掲載)

### 《資料① 授業の進め方》

(1)4人グループを作り着席（授業開始前に指示）

(2)講師自己紹介

(3)自分のまわりの現実と世界の現実

<個人ワーク>

①ワークシートを記入し、数名が全体で共有

→世界の現実（諸課題）を紹介（水不足、IT化、宗教の対立、気候変動など）

②これらの問題と自分の生活がつながっていることを確認する

(4)「つながり」の具体例としての DARS

<グループワーク>

①グループでワークシートを記入し、全体で共有  
ワークシート項目

・ DARS の材料は何？

・ DARS を作る人は誰？

・ DARS を食べる人は誰？

②1 チョコ for 1 スマイルの紹介

(5)児童労働の現実

児童労働解決に取り組む NGO である ACE の HP 画像等を使いながら、世界には学校教育の機会を失って、児童労働に従事する子どもが多く存在することを確認する

(6)企業の社会的責任(CSR)

①森永製菓、Panasonic、ファミリーマートの例を提示しながら CSR を解説する

②1 チョコ for 1 スマイル(森永)については映画『バレンタインー揆』の予告編も紹介する

→企業や NGO の役割を「セクター」という考え  
方から解説する

(7)持続可能な開発目標（SDGs）

①国連広報センターの動画を用いて紹介する

<グループワーク>

②SDGs の 17 の目標から、最も重要だと考えるものをグループの話し合いの中で 4 つ選び出す。

③各グループが選んだものを理由とともに全体共有する。

(8)本授業のまとめ

・「自分」はバリューチェーンを通じて「世界」とつながっている

・見ようとしないと見えない「現実」もある

・社会的諸課題の解決に向けて、企業、NGO、国連などが取り組んでいる

・国際社会では SDGs の取組が行われている

## 《資料② ワークシート》

### 「世界とのつながりを考える」

#### 【話の流れ】

1. カップヌードルと DARS
2. 企業、NGO の取り組み
3. 国際社会の取り組み（SDGs）
4. これからの自分

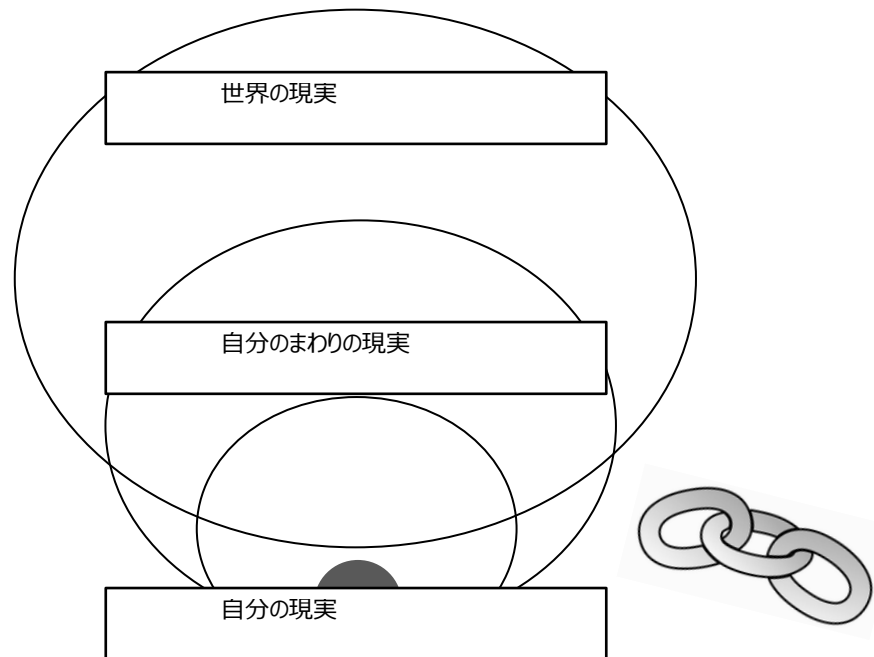


CSR

(企業の社会的責任)



#### 【現実】



#### 【まとめ】

- ・ 「自分」はバリューチェーンを通じて「世界」とつながっている。
- ・ 見ようとしないと見えない「現実」もある。
- ・ グローバルでもローカルでも多くの社会的課題があり、企業、NGO（NPO）、政府、国際社会（国連）のそれぞれが解決に向けて取り組んでいる。
- ・ 企業もバリューチェーンを通じて世界とつながっており、企業の事業活動が社会と環境に及ぼす「影響」に対する責任を CSR（企業の社会的責任）という。
- ・ 国際社会では、SDGs（持続可能な開発目標）の取り組みが行われている。

(2)	国際文化科	<h1 style="margin: 0;">1年国際文化科講演会</h1> <p style="margin: 0;">人々のストーリーを描く～国際問題の研究者から高校1年生へのメッセージ～</p>	2017年
	1年全員対象		7月7日
	4クラス合同 160人		本校視聴覚室

## 概要

スマートフォンにも使われている「紛争鉱物」に関する国際的なルールが、現地の人々の目にはどう映っているのか。この問題を研究テーマに現地取材を行ってきた若手研究者である猪口絢子氏（大阪大学大学院 国際公共政策研究科比較公共政策専攻 博士前期課程2年）を講演に招いた。

研究の内容と現地での取材の様子を紹介するとともに、研究対象であるコンゴ民主共和国の隣国ルワンダにおける虐殺について生徒の質問に答えて説明していただいた。また、国際問題を研究する大学院生の生活や高校生へのメッセージについても話していただいた。

## 位置付け

- 6月の「国際理解」ゲスト授業に続き、さらに生徒の国際問題への認識・関心を高める。

## 目的

- ・日本の高校生の日常が国際的な課題とつながっていることを知る。
- ・「紛争鉱物」問題を現地で取材した方から話を聞くことで、国際問題をリアルに理解する。
- ・研究者というキャリアがあることを知り、進路についての考えを広げる機会とする。

## 仮説

- ・仮説1. 国際課題に関する関心・理解の促進
- ・仮説2. 現実的な提案力の育成
- ・仮説3. 探究意欲の刺激・キャリア形成への貢献

## 学習の様子



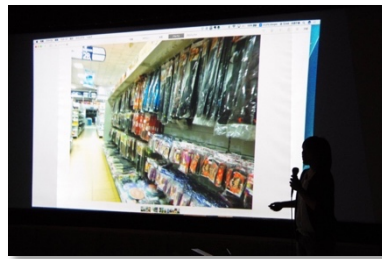
↑メモを取りながら講演を聴く生徒たち



↑事前アンケートの結果を元に話を始める講演者  
手前は司会を務める委員の生徒



↑代表質問の後も会場から次々に質問が出た。

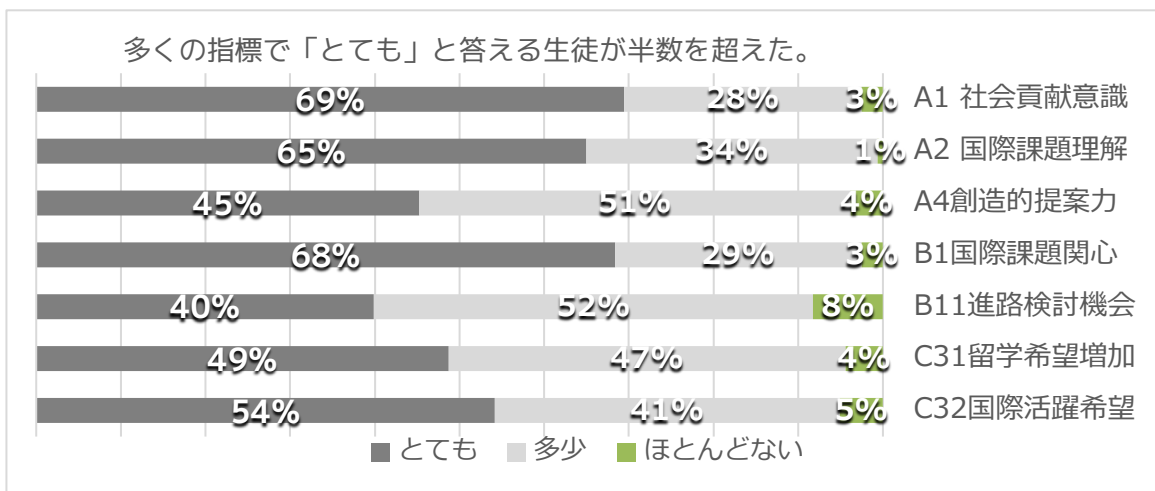


↑写真を示しながら現地の様子を紹介する講演者

## 評価

- 国際問題について理解が進み関心を高めることに非常に効果があった。
- 社会貢献意識を高めることに非常に効果があった。
- 国際的に活躍したいという気持ちを高めることに効果があった。
- 留学したいと思う気持ちを高めることに高い効果があった。

## Evidence 1 | Data



## Evidence 2 | Voice 生徒の声

“グローバル”な眼をもって世界中の先進国も途上国も、良い所も悪い所もたくさん学びたいと思いました。

「植民地構造は、まだなくなっていない」：世界の他のところでは、生活できない人もいるということが私は気になる。

将来は国連など、国際公務員として働きたいと思っているから「大阪大学法学部国際公共政策研究科」という名前を覚えておきたい。

私も猪口さんと同じようなことに興味があるので、猪口さんのように一つのことを研究したいと思いました。



---

## 今年度の主な改善点

---

- 講師との打ち合わせをもとに、事前準備として『アフリカクイズ』を用意し、委員の生徒がクラスで実施するようにした。
- 「紛争鉱物」は、生徒が初めて聞き、かつ複雑な問題であるので、講演の冒頭に短いビデオを使って紹介した。このビデオは講師に紹介してもらったもので、NGO が作成したウェブ上で公開されているものである。
- 運営を生徒主体にし、司会のほか、講演後にまず代表質問を委員の生徒がするようにした。このことで委員以外の生徒からの質問が活発に出された。

---

## 担当者の振り返り

---

- 生徒から活発に質問が出されたのは運営を生徒主体にしたからだと考えている。これにより講演の内容と生徒の知識とのギャップをうまく補うことになり、生徒にとっての relevancy が向上することになった。例えば、フロアからの質問により、ルワンダの虐殺についての解説が補足された。ルワンダの虐殺について「初めて詳しく知った」と書いている生徒は多かった。
- 先進国の影響を強く受けがちな国際社会のルールが、必ずしも現地の人々にとって「良いルール」と言えるとは限らない。これが講師のメッセージだった。これを受けて「国際＝英語・欧米」と考えていた生徒の意識が変化した。この変化は生徒の言葉に表れており、これが指標 A2 への肯定的回答に繋がっていると考えられる。

---

## 資料

---

- レディネスの向上と測定のための事前配付アンケート

《資料 レディネスの向上と測定のための事前配付アンケート》

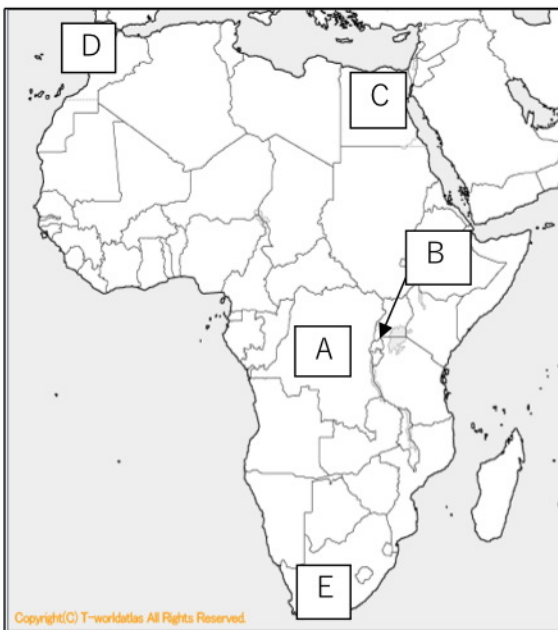
～7月 SGH 講演会～ 1年( )組( )番 名前( )

**1、アフリカって？**

「アフリカ」と聞くと何を連想しますか？心に浮かんだものを自由に書いてください。

**2、アフリカクイズ** 次の①～⑤の国はどこでしょう。A～Eから選んで記号で答えましょう。

①( ) ②( ) ③( ) ④( ) ⑤( )



- ①ピラミッドで有名な「エジプト」。
- ②地中海の入り口にある多文化国。ユニークな町並みや地中海料理で有名な「モロッコ」。
- ③2010年にアフリカ大陸初のワールドカップが開催された「南アフリカ」。
- ④地下資源に恵まれ、オカピ野生生物保護区などユネスコ世界遺産リストに登録された自然遺産もあるが、内戦により現在は世界最貧国の一つ「コンゴ民主共和国」。
- ⑤1994年のジェノサイド（大虐殺）の後、現在は「アフリカの<sup>シンガポール</sup>奇跡」とも言われるほどの経済成長を遂げている。美しい「千の丘の国」としても有名な「ルワンダ」。

**3、紛争鉱物とは？**

「紛争鉱物」とは、なにを指す言葉だと思いますか？想像して説明してみましょう。

**4、千里から世界へ SGH 講演会 予告**

7月7日（金）テスト最終日、視聴覚室にて、国際文化科SGH講演会（60分）があります。

「講師：大阪大学大学院 国際公共政策研究科 博士前期課程 猪口絢子さん」

「テーマ：国際問題の研究者から高校1年生へのメッセージ（仮）」

4限 LHR・昼食（12：30～13：10）・5限講演会（13：10～14：20頃）

視聴覚室に13：10集合・開始。指定座席（番号順）に着席。貴重品と筆記用具を持参すること。

(3)	国際文化科	<h2 style="margin: 0;">夏季 Glocal フィールドワーク研修</h2> <h3 style="margin: 0;">地元大阪の国際問題を知る</h3>	2017年
	1年希望者対象		8月1～3日
	延87人		府内3箇所と 本校図書室

## 概要

国内にもグローバル課題の相似形と言えるものがある。在日外国人の援助を行う「とよなか国際協会」、大阪大学の学生を信者の中心とする「大阪茨木モスク」、在日韓国・朝鮮人を主体としながらも国籍にかかわらず生徒を受け入れ国籍を越えて考え活動する越境人の育成をめざす「コリア国際学園」を訪問した。

生徒たちは、訪問先で人との出会いを通して普段知る機会の少ない地元の国際問題を学習した。また、アジア太平洋人権情報センター職員の講義・ファシリテーションにより国際人権の基本を学んだ。さらに、学習したことをクラスで紹介するためのプレゼンテーションスライドと読み原稿をグループで分担して作成した。

## 位置付け

- 意欲の高い生徒（潜在的リーダー）を少人数だからこそできる現場訪問に連れて行く。
- 経験を協働作業でまとめる経験をするとともに、クラスに波及させる。

## 目的

- ・ 国際問題が地元にも存在することを実例を通して知る。
- ・ どこでも誰にでも保障されるべき人間としての権利について理解する。
- ・ 地元の実践家との出会いを通して、自らの生き方について刺激を受ける。

## 仮説

- ・ 仮説1. 国際課題に関する関心・理解の促進
- ・ 仮説2. 現実的な提案力の育成
- ・ 仮説3. 探究意欲の刺激・キャリア形成への貢献
- ・ 仮説4. 積極層の意欲・能力の向上と波及効果

## 学習の様子



↑権利の選択ゲームを通して様々な権利を学んだ。



↑ネパールから来日し日本の高校に通う2人から経験を聞いた。



↑モスク訪問前にコリア国際学園の教室をお借りして、研究者からイスラム教の基礎知識を学んだ。



↑モスクの指導者イマームから説明を受けた。生徒たちは幼い娘さんと一緒に写真を撮らせてもらった。より人間的な交流になった。



↑コリア国際学園の都校長から設立経緯を教わった。



↑コリア国際学園の在校生の佐藤さんから写真を使った社会活動の経験を聞いた。多くの生徒が刺激を受けた。



↑毎日最後に1日を振り返って感じたことを言語化し、共有した。



↑アクティビティー：Privilege Walk。与えられた役割で、読み上げられた行動を支障なくできたら1歩前に進み、支障があると感じたら1歩下がる。バックグラウンドによる有利不利を体感した。



↑哲学カフェのスタイルでアクティビティーで感じたことを共有した。



↑再び国際人権について学び、アクティビティーの意味を確認した。



↑3日間の経験を元にグローバルリーダーが持つべき資質と能力をグループで考えた。



↑グループで考えた結果を発表し共有した。

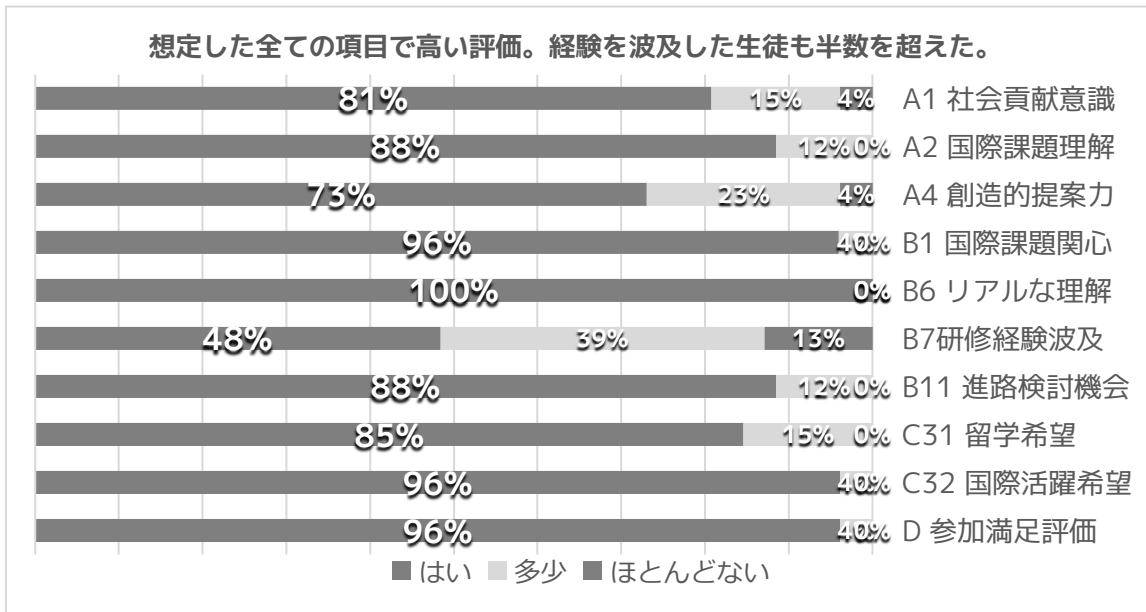


←クラスに持ち帰って学んだことを報告するためのスライドと原稿をクラス混成のグループで分担して作成した。10月の「探究基礎」の初回授業で報告した。

## 評価

- 想定した全ての指標に非常に高い効果があった。(社会貢献意識・国際課題の理解と関心・創造的提案力・国際活躍希望・留学希望・進路検討機会)
- リーダー層の育成としても効果があったと言える。研修で学んだことを他の生徒のために役立てた生徒も半数に達し、これは「探究基礎」の教員の観察(希望者対象の研修に参加した生徒の多くが積極的役割を果たしていた)からも裏付けられる。

## Evidence 1 | Data



## Evidence 2 | Voice 生徒の声

ずっと世界のことについては好きだったけど、今まであまり人権や、社会的に弱い立場となってしまう状況にある人々に意識を向けたことがなかった。けれど、詳しく実際に体験した人や、活動に参加している人の話を聞いて、世界的な動きで人権をどんな人にも保障することが大切だと分かりました。

佐藤さんが話していたフィジーでの留学体験の話を聞いて思ったのは、私たちが知っていることだけが必ずしも全てではないということです。テレビなどでよく取り上げられている良い面だけでなく、貧困などの大変な面にも目を向けることが大切だと思いました。

しっかり事実を知り、その上でマイノリティの人と共存し公正な社会を作っていくことが大切だと思いました。

イスラームのことを知ることはとても大切だと感じました。自分の勝手な先入観で、イスラームは〇〇と決めつけていました。相手のことを知る前に、勝手な先入観を持つと新たな差別につながる、イスラームは他の宗教と何も変わらない、平和を願っている宗教なのだと感じました。

同じ高校生が、写真展など開いていて、とても刺激を受けました。私も彼女のようになりたいという気持ちになりました。

外見ですべて判断せず、まずはコミュニケーションを取ったりして、相手を知ることが大切だと学びました。

もっとたくさんのことを恐れずに挑戦していこうと思いました。また、自分の興味のあることを国際貢献に活用できたら良いなと思いました。

## 今年度の主な改善点

- 国際人権についての学習を、最新のアクティビティーを取り入れた体験型のものに変更した。
- コリア国際学園のご協力で、在校生との直接対話が実現した。

## 担当者の振り返り

- コリア国際学園の在校生から社会活動を実際に行なっている話を聞かせていただいた。これは非常に参加生徒への影響が大きく、かなり多くの生徒が刺激を受けたと書いていた。人との出会いが実際の行動に移す生徒が生まれる契機になると確信した。
- 体験型の学習は、やはり心に残るようだ。引き続きアジア太平洋人権情報センター等から優れた活動を紹介していただき取り入れていきたい。

(4)	国際文化科	<b>『国際理解』特別授業(2)</b>	2017年
	1年全員対象		9月20日・21日
	クラス単位・ 計160人		本校図書室
高校生 の 日常 と 国際 的 な 課題 の つ な が り			

## 概要

社会課題に対し、利害関係者が Win-Win の関係になるような解決策を考える。この学習に、大阪、西淀川公害訴訟の企業との和解金の一部を基金に設立された「公益財団法人公害地域再生センター：あおぞら財団」から栗本知子研究員を講師を迎え、ロールプレイを中心とした参加体験型学習を行った。

生徒たちは、5人グループの中でそれぞれ異なる役割カードを渡される。市役所の担当係長・公害患者の親・工場の経営者・地元の医者・工場で働く住民である。与えられたシナリオからスタートし、その後は自由に合意のための話し合いを進めていく。最後に西大阪での和解に至るまでの経緯と日本の公害対策法制の変遷を学習した。

## 位置付け

- ここまでの2回の研修から、地元で実際にあった事例に目を向ける。
- 引き続きグループ活動を中心に据え、後期の「探究基礎」の学習につなぐ。

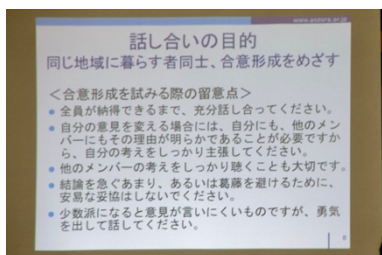
## 目的

- ・ 国際問題が地元にも存在することを実例を通して知る。
- ・ 利害調整が必要な問題を解決の難しさを知る。
- ・ どのように異なる立場にいる人を想像し意識を向けるべきかについて、体験を通じて学習する。
- ・ 地元の実践家との出会いを通して、自らの生き方について刺激を受ける。

## 仮説

- ・ 仮説1. 国際課題に関する関心・理解の促進
- ・ 仮説2. 現実的な提案力の育成
- ・ 仮説3. 探究意欲の刺激・キャリア形成への貢献

## 学習の様子



↑ロールプレイ開始前に合意形成が目的であることを確認することが重要。



↑初めは各役割の立場を表明する内容のシナリオに沿ってスタートする。



↑シナリオが最後まで行ったら、自分の立場ならどう発言するかを想像しながら合意形成を目指して話し合う。



↑講師は話し合い時間終了後に各グループでの様子を聞く。他の生徒にも伝わるように、アイデアや行き詰まった点を拾い上げながらコメントしていく。



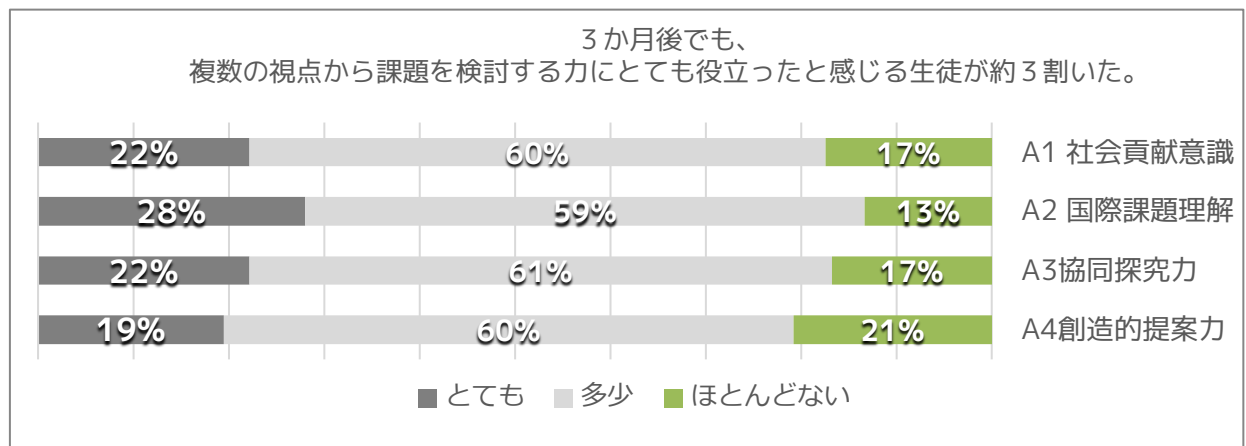
←最後は、活動を振り返り、役割を離れて自分はどう感じたかを言語化する。

## 評価

- 生徒が直後に書いた「ふりかえり」の文章からは、立場の違う関係者の意見調整の難しさ、そして、対話の大切さを感じていることがわかる。3ヶ月後のアンケートでも、4つの評価項目のうち、「複数の視点から課題を検討する力」に貢献したと答えている生徒が最も多い。相対的に数値の低い「創造的提案力」にどう繋げていくかが課題である。
- 同じく「ふりかえり」の文章から、公害問題については習ったことはあるが、関係者の思いまで知ったのは初めてで、さらに学びたいという記述があった。一般的な知識と具体的な事例の往復の大切さと、この授業の意義が認められる。

## Evidence 1 | Data

研修後約3ヶ月経った12月に実施したアンケートでも約3割の生徒が複数の視点から検討する力にとっても効果があったと答えた。(この研修では直後の選択式アンケートは実施せず)





## Evidence 2 | Voice 生徒の声

“ “  
公害の被害は、直接的な被害者だけでなく、加害者となってしまった企業に働く人たちにも大きな影響を与えてしまうことが印象に強く残った。

“ “  
みんなが他者の意見をしっかり受け入れ、考えた上で、自分の意見を主張していくことが大切だと思った。

“ “  
大阪に住んでいたけれど、西淀川の公害問題について知ったのはここ最近(の事前学習において)。過去があつての現在なので、もっと環境について考えていきたい。

“ “  
どちらかが悪いというわけではなく、どちらも生活に関わっているという問題だったので難しかった。

“ “  
自分になりきることで他人事ではなく、身近に感じることができた。

“ “  
今までは、歴史や公民の授業で公害があったという事実だけしか知らなかったが、いろんな立場があることがわかった。

## 今年度の主な改善点

- 合意形成のプロセスの中でどんなことが起こるのかを感じることが重要であることを強調する、ロールプレイの説明を全て終えてからシナリオを配るなど、手順を洗練させた。

## 担当者の振り返り

- 1 つの問題にも多様な立場・見方が存在することを体験的に学べたことが生徒の感想から読み取れる。
- ふり返しシートの項目 1 や 3 のおかげで、ロールプレイの経験を生徒の身近なものにできたと思われる。

項目 1 「今の話し合いをふりかえり、あなた自身(役割でなく)なら、どう考えますか？  
(例えば被害を拡大させないためにまずすること、その他、思いつくことなど)」

項目 3 「ロールプレイをふりかえって、将来、あなたの身近で、予想していなかったような問題が起きたとき、どんなことを心がけたらいいと思いますか？」

## 資料

- ① ロールプレイ「203x 年、あなたの町で公害が起きたら？」の進め方
- ② ロールプレイ「あなたならどうする？」 ふりかえりシート

## 《資料① ロールプレイ「203x年、あなたの町で公害が起きたら？」の進め方》

ねらい：社会課題について、多角的な視点で考える

立場の違う者同士の対話を体験する

進め方：

- 0) 事前に、4～6人のグループになっておいてもらう。
- 1) これからお芝居形式で、合意形成を目的とした話し合いに取り組んでもらうことを伝える。ファシリテーターが状況設定を読み上げる。(2分)
- 2) 各グループに「役割カード」セットを配付(内容が見えないよう折るか、裏返して)。くじ引きの要領で、一人一枚「役割カード」をひく。(2分)
- 3) それぞれ役割カードの台詞を黙読して役作りの時間をとる。(2分)
- 4) ロールプレイ開始。役割番号の順番に「役割カード」に書かれた台詞を読み上げた後、自分の役割になりきって、この状況でどう発言するか自由に考え、意見交換する。「役割カード」に書かれていないことに関しては、想像して自由に発言してよい。目標は、ともにまちに暮らす住民として、対応の仕方について合意形成をすること(話し合いの過程が大事なので、時間内に結論がでなくてもよい)。(10分)  
＜役割設定＞ 5人グループがベストだが、4人or6人でも実施可能。
  - 1 市役所の環境担当係長
  - 2 住民A(患者の親。ただちにX工場の操業を止めて原因を調べるよう要求)
  - 3 X工場の経営者(病気の原因だと噂されている)
  - 4 地元診療所の医者
  - 5 住民C(問題の工場で働く。操業を止められては困る)
  - 6 ジャーナリスト(地元紙新聞記者。あとから取材した様子を発表する。)
- 5) 話し合いが終わった後、どのような話し合いが行われたか、いくつかのグループから発表してもらい、全体で共有する。(5分)
- 6) 「ふりかえりシート」を配付。役割を降りて本来の自分に戻り、個人作業で、①～③を記入する。(5分)
- 7) 「ふりかえりシート」をもとにグループで感想を共有(8分)
- 8) 全体で共有(5分)
- 9) 西淀川公害裁判の際には、最終的には地域を共によくする「地域再生」という広く共有できるビジョンを患者が示したことで和解に至った。目の前の利害でなく、高次の目標を立てることで対話が進む可能性を説明する。(3分)
- 10) 「ふりかえりシート」の④に全体を通しての感想を記入(3分)  
\*時間があれば…(8の後のタイミングで)
  - A) 大気汚染を放置した場合何が起きるか? 「因果関係図」を描いて分析
  - B) どうすれば合意形成ができるか、役割を降りて話し合う。
  - C) 「公害患者の物語」シートを配布。被害が悪化してしまうと、どれほどのリスクがあるかを学び、公害被害の不可逆性を学ぶ。

## ■進め方の留意点

### \* 「合意形成」をめざす話し合いの進め方について

- ・参加者の中には、立場の違う者同士が話し合うというと、ディベートを連想する人もいる。ディベートでは最終的に勝敗をつけるが、この活動のねらいは勝敗をつけることにはない。
- ・同じ町に住む住民同士として、今後も共に暮らしていく関係性であるから、なまじ勝敗をつけようとして関係性が悪化するようなことがないよう、話し合っしてほしいという主旨を学習者に十分に伝える必要がある。
- ・また、学習者の中には早く結論を出そうと、多数決をしようとする人もいるかもしれない。
- ・必要に応じて、下記のような「合意形成をするときの注意点」を示すなどして、十分に話し合うように主旨を伝える。
  - <合意形成をするときの注意点>
    - ・全員が納得できるまで、充分話し合ってください。
    - ・自分の意見を変える場合には、自分にも、他のメンバーにもその理由が明らかであることが必要ですから、自分の考えをしっかりと主張してください。
    - ・他のメンバーの考えをしっかりと聴くことも大切です。
    - ・結論を急ぐあまり、あるいは葛藤を避けるために、安易な妥協はしないでください。
    - ・少数派になると意見が言いにくいものですが、勇気を出して話してください。

### \* 想定される参加者からの反応

- ・ロールプレイの最中は、グループの様子を見て回り、必要に応じて働きかけるとよい。
- ・参加者から「これでは情報が足りない」という反応が返ってくるかもしれない。しかし、実際に公害が起きた場合にも、住民には十分な情報がないことが多い。情報が足りない状態で話し合うことを体験してもらうよう促す。
- ・グループによっては短時間で「住民Aが引っ越せばよい」「市役所が工場を止める間の人件費を払えばいい」といった結論を出して話し合いを止めてしまう場合もある。その際はファシリテーターから「引っ越しの費用は誰が負担するのか?」「病気になった人全員が納得して引っ越すだろうか?」「工場の人件費を税金で負担することに、他の住民は納得するだろうか」といった投げかけをし、さらに話し合いを行うよう促す。

### \* 「ふりかえり」の際に言及したいこと

- ・ロールプレイを進めていると、結果的に住民AよりX工場の経営者や住民Cの発言力が強くなる場合が多い。実際、公害患者は少数派であり、患者の立場に立った公害対策が進められるようになるには、患者たちは市民組織をつくるなどして声をあげることが必要だった。社会課題が起きた際、少数派の意見を聞くことの大切さに言及したい。

《資料② ロールプレイ「あなたならどうする？」 ふりかえりシート》

ロールプレイ「あなたならどうする？」 ふりかえりシート

あなたの役割は？

①今の話し合いをふりかえり、あなた自身（役割でなく）なら、どう考えますか？（例えば被害を拡大させないためにまずすること、その他、思いつくことなど）

②ロールプレイでは、互いに率直に言いたいことを言えていましたか？ 言えなかった人がいたとしたら、それはなぜだと思います？

③ロールプレイをふりかえって、将来、あなたの身近で、予想していなかったような問題が起きたとき、どんなことを心がけたらいいと思いますか？

④その他、思ったこと、印象に残ったことなど、全体を通しての感想

(5)	国際文化科	<b>総合的な学習の時間『探究基礎』</b> <b>課題研究の基礎をグループ活動を通して学ぶ</b>	2017年
	1年全員対象		後期:10月~3月
	20人 ×8グループ		週1回 2時間連続授業

## 概要

『国連グローバル・コンパクト』が取り組む10のグローバル課題を対象にして、課題の発見から解決までの道筋を学習する。

本校作成の冊子「探究基礎通信」をテキストに、個人とグループの取組を交互に繰り返す。このテキストは授業の進め方を含んだワークシート形式にしてある。

生徒たちは、

- ・第1段階として、国連グローバルコンパクトについて知り、課題はどのように設定するのかを学ぶ。
- ・第2段階として、文章や表、グラフの的確な読み取り方を学ぶ。
- ・第3段階として、ディベートを通じて、課題を多面的にとらえ根拠に基づいた主張を行う方法を学ぶ。
- ・第4段階として、グローバルな課題に対しチームで課題を設定し、解決のための仮説とその検証およびプレゼンテーションを行うことで2年次における探究の取組に向けて基礎固めを行う。

## 位置付け

- 前期に導入（「種まき」）をした国際的な課題を扱いながら、課題研究の方法を指導し、2年生での課題研究『探究』につなぐ。

## 目的

- ・グローバルな課題を対象に、問題解決のための基礎力を養う。  
基礎力とは以下の通りである。

「人権」「環境」「労働」の領域を対象に、

- ①文章・グラフを読解する
- ②要約する
- ③課題設定・仮説と検証・解決への道筋を理解する
- ④討論を通して意見を統合する
- ⑤プレゼンテーションとレポートの形式を知る

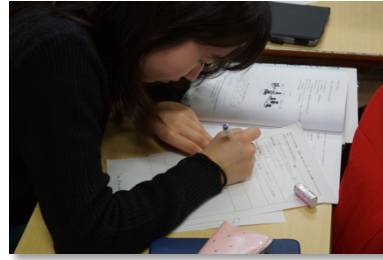
## 仮説

- ・仮説1. 国際課題に関する関心・理解の促進
- ・仮説2. 現実的な提案力の育成
- ・仮説3. 探究意欲の刺激・キャリア形成への貢献

## 学習の様子



↑20人クラスで、机はグループ活動にすぐに移れるように配置します。



↑まずは個人で考えてテキストの課題に答えます。



↑その後グループで意見交換します。



↑「ここにこう書いてあるから…」と意見は根拠を示しながら述べることを重視します。



↑終盤は、論理的に意見を述べ、相手の意見を批判的に検討する力を伸ばすことを目的に日本語ディベートに取り組みます。



↑ディベートの審判員は、優劣を判断するだけでなく、両方の意見を止揚できる「第3のアイデア」を考えるという課題を与られます。



↑「第3のアイデア」を出し合い、優れている点を比較検討します。



↑2月の学習成果発表会「千里フェスタ」では、ディベートのライブ対戦を公開した他、「第3のアイデア」を掲示して紹介しました。

## 評価

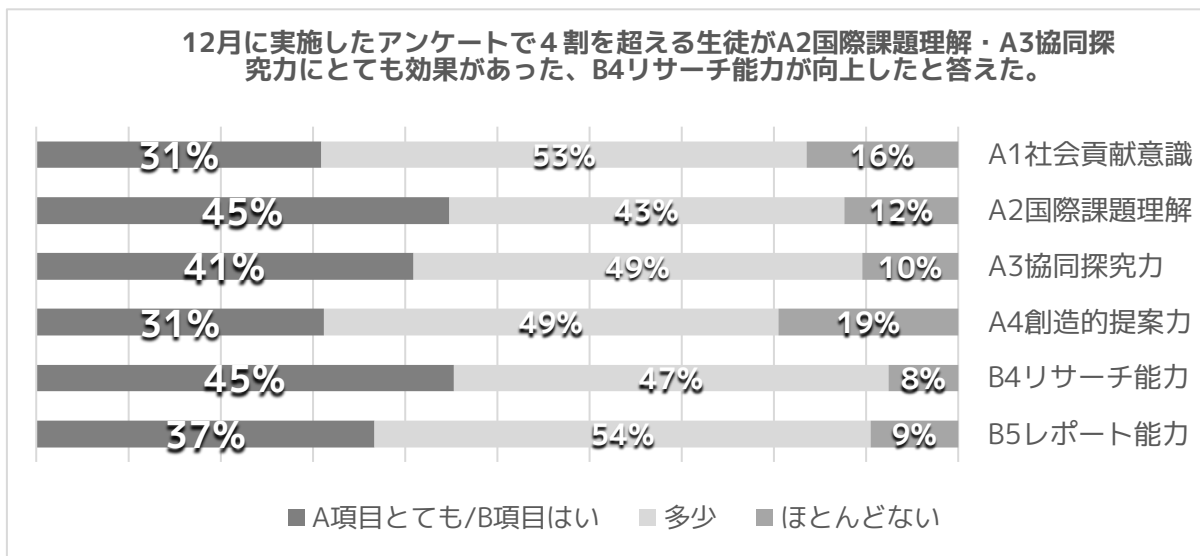
- 本校の目標とする力のうち、A2 国際課題理解・A3 協同探究力に「とても」効果があったと感じる生徒の割合が高く、4割を超える。これらは昨年度と比べ 10 ポイント以上高い数字となった。(昨年の数字は順に 34%, 32%)「グループ活動をする力も伸びた」との教員のコメントもある。

→数値向上の要因として指導教員の談話から推測されるのは、この科目を指導した経験のある教員が増えてきたこと、2年時の『探究』の指導内容を理解している教員が（全員ではないが）指導していることだ。

- 数値から B4 リサーチ能力・B5 レポート能力の向上にもよく役立っていると言える。これは、「情報を無批判に受け入れなくなった。」との教員のコメントと合わせて「探究力」の向上として評価できる。
- 希望者対象の研修に参加した生徒は、この時間のグループ活動の際にリード役になっていた、との教員の観察がある。意欲の高い生徒が活躍する場ともなっていると言える。

→次ページに指導教員 7 人の評価（6項目・5段階+コメント）を掲載している。

## Evidence 1 | Data



## Evidence 2 | Voice 担当教員 7 人の声

次ページに掲載

《探究基礎 授業担当教員 7人の振り返り》

- ・リーダーになる生徒を中心に主体的に動いていた。
- ・ほとんどの生徒は自分の意見を考えグループ内で発言していた。役割の割当てによって人任せにしていた生徒も動き出した。
- ・発表が多いので全員が「自分もやらなければ」という意識を持っていたと感じる。


- ・生徒に身近な課題でよかった。
- ・ディベートは難しいと言いながらもよく取り組んでいた。
- ・比較的身近でイメージしやすそうだった。

**5点満点で評価すると？**

生徒は主体的に取り組んでいましたか？	3.8
提示したテーマは適切でしたか？	3.8
生徒たちの研究の質は、十分に高かった？	3.5
希望者研修参加生徒は、活動に貢献していた？	4.0
生徒のモチベーションは、下がらなかった？	3.8
指導教員チームの連携は、うまく取れていた？	3.7

- ・特にグループ討論の際、積極的。
- ・グループの中心になり、他の生徒を引っ張ってくれた。
- ・積極的に進行役をしたり、鋭い内容の発言で刺激を与えたりしていた。
- ・もともと積極的な生徒だったため。

- ・頑張りや伝わるものの、後半のテーマの絞り込みが甘いように思えた。そのため本人たちが苦勞していた。
- ・個々にいろいろな資料を探し出して、それをグループでうまく共有していた。
- ・限られた時間でおこなったものとしては大変よかった。時間が限られていることを意識させる必要がある。



- ・他の先生に教えてもらったことが大変役に立った。
- ・同じクラス担当の先生とは情報を共有して進める機会を多く取っていたが、他のクラスの状況も知りたいと思った。ディベート前に進め方の確認する機会を作るなどするとよい。
- ・ペアの先生がとても気にかけて話をしてくださったので。

- ・テキストの順が適切なため。
- ・ディベートの時の方が活動しやすそうだった
- ・データや文章の読み取りは、テンポを上げてみては？退屈そうに見える生徒もいた。ディベート以降は自ら考えていた。
- ・「後半は同じことの繰り返しで飽きた」との声があった。

生徒にどんな変容があったでしょう？

- ・初めと比べると、情報を鵜呑みにしなくなったと思う。
- ・「考える」ことに慣れていなかった生徒たちがしっかりと考えるようになった。
- ・グループ活動をする力がより強くなった。
- ・2年生の発表を見て、来年は自分の番と自覚が増したように思う。

先生その他の授業のスタイルに影響は？

- ・生徒に発表をさせるパターンが増えた。グループで考えた内容を紙に書かせ、それを全体に示しながら説明させるなど。(国語)
- ・発問時に理由まで求めるようになった。また、グループで相談させることが多くなった。(社会)
- ・このタイプの授業は初めて受け持ったので、いろいろと勉強になった。(英語)



---

## 教材担当者の振り返り | 指導の力点と課題

---

- 以下のことができるよう工夫した教材を作成した。アンケートの結果・指導教員の評価から、生徒たちは、ワークシートに前向きに取り組み、経験を通して学んでくれたと考えている。
- ・ グローバル社会での様々な問題の存在を確認できる。
- ・ 課題を疑問文で表現し、根拠を伴った仮説を設定、仮説を検証し解決案を導き出すという論証の方法を学ぶことができる。
- ・ 個人での情報収集と考察をチームで精選していく過程を学ぶことができる。
- ・ 明確な根拠を持った説得力のあるプレゼンテーションの方法を学ぶことができる。
- ・ 課題の発見・仮説の整理・解決案討議のために「思考マップ」を利用し、チーム活動を円滑に進めることができる。

→今年度のテキストは、下記 URL に掲載している。

[http://www.osaka-c.ed.jp/senri/sgh/images/kisotext\\_2017.pdf](http://www.osaka-c.ed.jp/senri/sgh/images/kisotext_2017.pdf)

- 以下の点が課題である。
- ・ 情報の信頼性を見極めさせること
- ・ 書籍の利用を高めること
- ・ グローバルな課題を身近な課題に置き換えて考えさせること

(6)	国際文化科	<b>総合的な学習の時間『探究』</b>	2017年4月～
	2年全員対象		通年
	15人程度 ×10グループ		週1回 2時間連続授業

## 概要

国際文化科2年生全員が課題研究に取り組む。今年度は以下の6テーマ 10 講座に分かれて研究を進めた。

「企業活動と人権・労働・環境」  
「人権が守られる社会を作るには」  
「男女共同参画」  
「児童虐待」  
「『教育』に関わる諸問題について」  
「政治・経済上の諸問題と解決への展望」

講座に分かれるまではクラス単位で、プレゼンテーションの技術や論文の基本事項の学習（標準的な構成や論拠を示して主張を述べる等を高校生が書いた例を使って確認する）を行った。

講座に分かれてからは、各2回の講座内発表会・合同発表会・大学院生による個別論文指導を節目に

して論文やプレゼンテーションを提出/発表し、教員や他の講座生徒からコメントをもらい、ステップアップ/洗練させていった。

今年度は全講座統一のルーブリックを設定することができたので、5月には生徒に評価のポイントを示し、常に意識させながら指導した。

8月には希望者を募り、大阪大学国際公共政策研究科主催の研究合宿に派遣した。

10月には企業訪問研修の機会を設け、実際の企業における取組を研究に採り入れられるようにした。

11月には希望者を募り、SGH 全国高校生フォーラムでの英語によるポスター発表に派遣した。

2月には全研究を校内学習発表会「千里フェスタ」で発表し、2人チームで7000字の論文にまとめて提出した。

## 位置付け

- 1年での種々のゲスト授業・研修・「探究基礎」を受けて、2年生全員が取り組む本校のSGHで最も中心的な教育/学習活動である。
- 生徒の自発性をベースに、1年次より難易度の高いテーマを設定することにより、生徒のモチベーションを高め、限られた時間内で質の高い調査研究を行うよう指導する。
- 課題解決型研究とするため、最終的には不完全でも何らかの解決案を示すよう求める。

## 目的とそのための方法

- ① 2～3人での研究を促すことで、協同で研究を進める経験をさせる。
- ② 情報の出所の明示を徹底して求め、また、書籍・論文にあたることを促すことで、確かな情報に基づき、現実的な提案ができるようにする。
- ③ 論理の飛躍を指摘し/自己点検させ、また、仮説と検証を求めることで、説得力のある結論を導くことができるようにする。
- ④ 論文提出と口頭発表、それに対する評価を複数回行うことで、レポートの形式を学び、説得力のあるプレゼンテーションができるようにする。

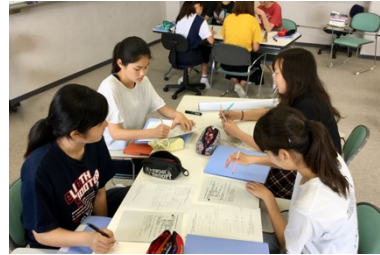
## 仮説

- ・ 仮説 1. 国際課題に関する関心・理解の促進
- ・ 仮説 2. 現実的な提案力の育成
- ・ 仮説 3. 探究意欲の刺激・キャリア形成への貢献

## 学習の様子



↑講座に別れる前の授業で論文の良し悪しを検討している。



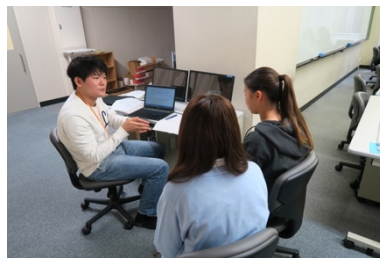
↑講座に分かれた初期の段階、ドキュメンタリー映画を見て、メモを元に自分が問題だと感じた部分を述べ合っている。  
これらの活動を通じて自分の問題意識を明確にし、また、共同研究の仲間を見つけしていく。



↑ペアで研究を進めている。

調査を分担して行ったり、発表ではスライドと原稿を分業したり、原因や解決案についてアイデアを出し合ったりしている。

指導教員から出された「ダメ出し」も、アイデアをブレインストーミングしながら落ち込むことなく対応していた。



↑あらかじめ送っておいた論文について大学院生からアドバイスを受けている。

指導教員とは違う角度から良い点や直すべき点を指摘される。この指導を、生徒は高く評価している。



↑10月の中間発表会では、講座の代表10組が発表をし、全員が聞く。



↑10月・2月の代表発表に対しては民間企業でCSRを担当しておられる方と外国人の人権に取り組んでおられる大学の先生から、各研究の意義と助言をお話いただいた。他の生徒や指導教員にもとても参考になった。

## 評価と課題・新たな仮説

○ リサーチ力やレポート力の非常に高い向上実感に比べると、本校が目的としている A1~A4 に対するこの授業の貢献度の評価があまり高くない。教員の記述評価（次のページ）でも研究への取組の熱心さは共通して評価しているが、研究の質についてはまだ高いとは言えないと考える教員は多い。

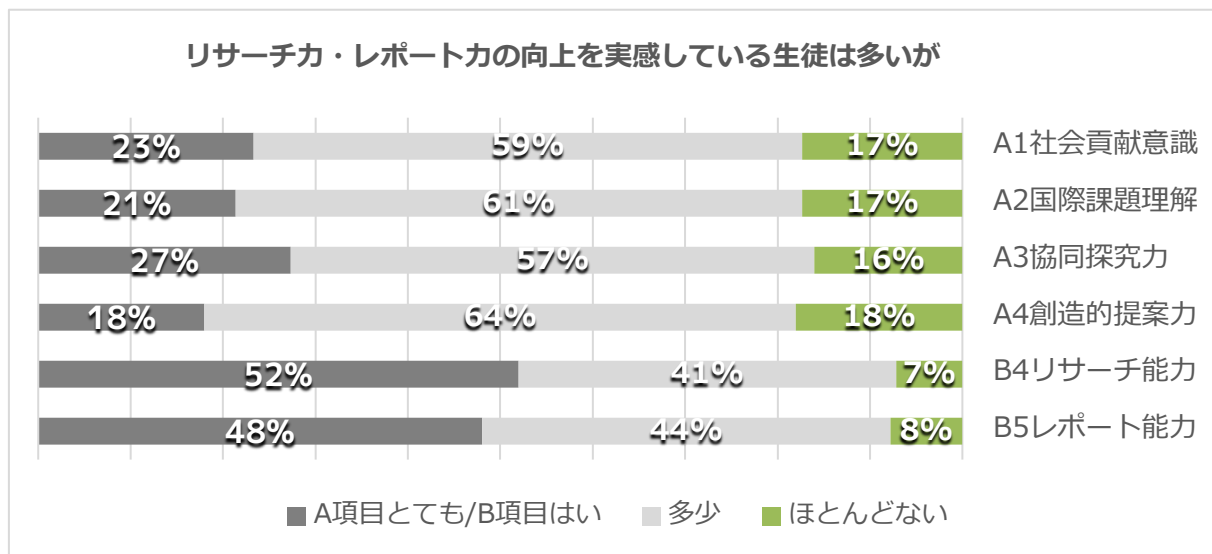
→形を作るのに/形を作らせるのに追われてしまっているのが原因ではないだろうか。2月に最終の授業を迎え、自分が担当する講座で、共同研究を勧めた理由を改めて述べた後、「実際はどうだった？」と尋ねたところ、全ての生徒がその素晴らしさを嬉しそうに語ってくれた。このように少し立ち止まって、良い部分に光を当てる、大きな意義について考える必要を感じた。

<新たな仮説> → 今後は、指導教員が次のような意味づけを意識的にすることによって、これらの生徒の意識を表す数字も好転するのではないかとと思われる。

- ・それぞれの研究が持つ社会的意義を指摘する
- ・企業や NGO において実際に行われている活動に触れさせる
- ・日米等の国際比較を促し、国際的な課題として位置付ける
- ・共同作業の良さを言語化する

○一方で、具体的な行動としては、企業や自治体に問合せをする、アンケートを実施するという積極的な調査が出てきた。共同研究だから思い切った行動もやってみようと思えたという趣旨の発言が複数聞かれた。

## Evidence 1 | Data



## Evidence 2 | Voice 担当教員6人の評価と声

・共同研究だと相談しながら進められるので、アンケートや問合せなど積極的な活動が格段に増えた。

・「やりなさい」と一度も言うことがなかった。自分たちで取り組んでいた。

・途中休憩することを見ることはほとんどなかった。

・特に指示を出さなかったのに、各チームがいろいろなデータにあたって積極的に取り組んでいた。

・研修内容と研究のつながりを改めて指摘すると、研修での経験を論文に取り込むことができた。→つなぐ手助けが必要。

・相関は強くは感じられない。

・生徒個々によって取り組み方はちがった。

・定期テストごとの会議でいろいろ共有できたのはよかった。ただ、実際の授業内容については個々に委ねられていた。→探究基礎のようにベースとなる教材はあった方がよいかもしれない。

・共通認識を確認できる事項は昨年より増えた。→役割分担（成績と出欠の管理、共通プリントの作成）を進める。

・必要な連絡や情報は共有できていた。研究の手法そのものを教えるノウハウがないと戸惑う。正しい参考文献の書き方など、自分が知らず、前もって指導できなかった。

・国連グローバルコンパクトの原則に沿ってテーマを設定したのが、意図が明確でよかった。

・最後まで絞り込みができなかったものもあった。「絞り込み」という観点での評価が必要？

・少し広がったかもしれないが、適切だったと言える。

5点満点で評価すると？

生徒は主体的に取り組んでいましたか？	4.2
提示したテーマは適切でしたか？	3.5
生徒たちの研究の質は、十分に高かった？	2.8
希望者研修参加生徒は、活動に貢献していた？	2.8
生徒のモチベーションは、下がらなかった？	3.8
指導教員チームの連携は、うまく取れていた？	3.5

・本や論文を読む力が弱いので、わかりやすく内容の薄いネット情報を参考にしがち。→「自分たちの案」ではなく、「先行事例の改善案」を目標にして、先行研究の読み取りをする時間を取るべきかもしれない。

・先行研究（書籍）、聞き取り、アンケートの実施が不十分。→分野に関わる書籍の読破を義務付ける。

・しばしば先行研究が後付けになっていた。→参考文献を読ませる。

・熱心だったが、発表やレポート作成の締切に追われていた、という感じでもある。

・やり遂げなければいけないという感覚は持ち続けていた。

・講座代表が決定後や最終発表会後の授業では、すべきことを全て完成させた組は時間を持て余していた。←考えた解決策を実行に移すプラン作りを促すとよいのでは。

・生き生きした表情が絶えず見えた。2回の講座内発表、2回のTAと担当教員からの添削指導最終発表会がいいリズムを作っている。

生徒にどんな変容があったでしょう？

・人と協力することが少しうまくなったと思う（頼ることや責任感等）。

・研究の流れの理解、客観的な文章表現の体得。考え、協議し、案を出し合って検討する共同作業。

・世の中の課題に対しての興味が増したと思う。

この授業の指導経験が先生にもたらした変容は？

・課題を与える→委ねる→不足や他の問題との関係を指摘する、という指導法を応用している。

・講座内発表・相互評価の回数を増やした→考えをまとめる、異なる視点の提供に役立った。

## 指導上の課題

---

- 以下の点については今後とも丹念な指導が必要である。
  - ・情報の信頼性を見極めさせること
  - ・書籍の利用を高めること
  - ・仮説の検証とその繰り返しをさらに深めさせること
  - ・聞き取り・アンケート・実地調査という研究方法を増やすこと
  - ・参考文献の示し方を正確にさせること

## 資料

---

- ① H29年度に使用した課題研究評価のためのルーブリック
- ② 「探究」講座別研究タイトル一覧
- ③ 「探究」の学習をふりかえっての生徒によるフィードバック
- ④ 大学院生 TA による論文個別指導に関する、TA による評価とフィードバック
- ⑤ 大学院生 TA による論文個別指導に関する、生徒による評価とフィードバック

## 《資料① H29 年度に使用した課題研究評価のためのルーブリック》

○今年度は年間を見通した,全講座統一の指標を策定し指導と評価に利用した。

			評価時期
A 課題の設定	① 問題の把握と原因分析	社会的な問題の実態を把握し原因を分析できている	前期
	② リサーチクエスト	一年間の研究にふさわしいリサーチクエストを設定し、適切な研究手法を選択している	
B 課題の解決	③ 論理性	論理に飛躍やねじれ、因果関係の取り違えがない	後期
	④ 説得性	結論は先行研究や対立意見を踏まえ現実的なものとなっている	
	⑤ 限界の明示	問題を解決するにあたり残された課題を具体的に示している	
C 情報の収集と選択	⑥ 図書・論文の活用	3つ以上の図書・論文に接し、資料・統計をもとに論を組み立てている	通年
	⑦ ウェブサイトの活用	ウェブサイトの情報は信頼できるものを利用している	
	⑧ アンケート・インタビュー・実地調査等の実施	アンケート・インタビュー・実地調査（大学・企業訪問を含む）を実施している	
D レポート	⑨ レポートのルール	定められた書式・文字数を守り、誤字や話し言葉、文のねじれがない	通年
	⑩ 参考文献	参考文献の引用のルールを守り、記載のしかたも適切である	
E プレゼンテーション	⑪ 時間配分と分かりやすさ	時間配分が適切で話し方のスピード・音量・視線も適切である	通年
	⑫ スライド	図表はポイントが明示され、プレゼン内容を過不足なく提示できている	
F スケジュール管理	⑬ 計画性	研究計画書を作成し、定められた期限までにレポート等の提出ができている	通年
G 協働	⑭ 役割分担	広がりのある研究になるよう役割分担をし、作業を進めている	通年
	⑮ 相互の高めあい	互いの意見を批判的に検討し、建設的に提案できている	
H 校外での発表	⑯ 校外での発表	校外での発表に積極的である	年度末

## 《資料②「探究」講座別研究タイトル一覧》

### 1. 講座・企業活動と人権・労働・環境 (1 講座)

1. 「私たちにできること～高校生がファストファッションを動かす!？」
2. 「日本の男女間の賃金格差をなくすためには」
3. 「どうするブラック企業!?労働環境を改善するには～IT 企業～」
4. 「ファストファッション企業のリサイクル活動に意味はあるのか」
5. 「多国籍企業と人権」
6. 「バングラデシュにおけるアパレル産業の課題解決のために」

### 2. 講座・男女共同参画 (2 講座)

7. 「男女平等に家事をするためにはどうすればいいのか」
8. 「『ワンオペ育児』を知っていますか」
9. 「残業を減らすためにはどのようにすれば良いのか」
10. 「男性が育児休暇を取りやすくするためにできとは」
11. 「女性が働きやすくするために企業ができることとは」
12. 「どうすれば日本の夫の家事参加時間を延ばすことができるのか」
13. 「トラックドライバーの長時間労働を改善するには」
14. 「課題解決型授業に効果はあるのか」
15. 「よい国ドイツの労働環境」
16. 「茨木市の待機児童をなくすためにはどうすればよいのか」
17. 「男性の育児休業率を上げるためには」
18. 「どうすれば女性技術者は増えるのか」
19. 「結婚・子育てと仕事を両立させる女性管理職への道」

### 3. 講座・人権が守られる社会を作るには (1 講座)

20. 「学校現場におけるセクシュアル・マイノリティに対するいじめを減らすために」
21. 「電車での痴漢を減らすにはどうすればいいか？」
22. 「L G B T の労働環境を改善するには」
23. 「どうすればフェアトレードの商品を普及させることができるのか」
24. 「シリアにおける子どもの学ぶ権利を守るためにどのようにすればよいか」
25. 「どうすればネットでの部落差別の書き込みを減らせるのか？」

### 4. 講座・児童虐待 (2 講座)

26. 「両親が協力して子育てをできるようにするためにはどうすれば良いのか」
  27. 「児童虐待の負の連鎖を止めるためには」
  28. 「親の知識不足による児童虐待をどのようなプランで解決するのか」
  29. 「虐待傾向にある親を減らすにはどうすれば良いか」
-



#### 4. 実践報告と評価 >(6) 総合的な学習の時間『探究』

---

30. 「虐待と母子世帯の貧困」
31. 「児童虐待に対して学校教育がするべき取組とは」
32. 「女性が活躍できる職場を作るためにはどうすればいいのだろうか」
33. 「地域ネットワークで児童虐待を発見・抑制するには」
34. 「児童虐待による虐待死を減らすには」
35. 「児童虐待に関する制度改善」
36. 「待機児童を減らすためには」
37. 「障害を持ったために親から虐待を受けている子供たちをどうしたら守れるのか」

#### 5. 講座・政治・経済上の諸問題と解決への展望 (2講座)

38. 「TPPの挫折から考える日米EPAの在り方とは？」
39. 「アメリカ第一主義政策の及ぼす影響への最良の対策とは何なのか」
40. 「フランスのテロとその背景から日本が学ぶべきこととはなにか」
41. 「日本に原子力発電をとりいれるためにはどうすればよいか」
42. 「ヨーロッパの難民問題を解決するには？」
43. 「グローバリズムVSナショナリズム ～永遠の闘争 In Japan～」
44. 「中部アフリカの飢餓の問題について日本にできることとはなにか？」
45. 「世界的食糧危機に立ち向かうためにはどうすればよいか」
46. 「北朝鮮が民主化することは可能か」
47. 「イスラム地域の民主化」
48. 「ギリシャの経済危機を再び起こさないためには、どのような対策が必要なのか？」
49. 「日本が長期的にGDPを伸ばすには？」
50. 「在日韓国人へのヘイトスピーチをなくすには？」
51. 「アメリカの麻薬大量消費から引き起こされるメキシコ国内の『麻薬戦争』とは？」

#### 6. 講座・『教育』に関わる諸問題について (2講座)

52. 「小学校での外国語活動は必要なのか」
  53. 「開発教育によるグローバル人材育成のための教育」
  54. 「日本の奨学金制度はこのままでいいのか」
  55. 「怠け者って、呼ばないで」
  56. 「学校図書館って、必要ですか？」
  57. 「近年の体罰事件から見る部活動における効果的な指導法」
  58. 「なぜ体育の授業は必要なのか」
  59. 「教育に及ぼす『恋愛学』の在り方」
  60. 「子どもの不登校を減らすには」
  61. 「日本の音楽教育に必要なことは」
  62. 「少人数教育の促進」
  63. 「集中力を勉強に役立てるためには」
-

#### 4. 実践報告と評価 >(6) 総合的な学習の時間『探究』

---

64. 「スマートフォンの悪影響～家庭での自習について～」
65. 「ゆとり教育は本当に失敗だったの」
66. 「全ての学生が農業体験を行えるようになるためには」
67. 「全ての子どもに家庭を」
68. 「睡眠不足ともたらす影響」
69. 「自己表現力を伸ばすには～アメリカ教育から学んで～」
70. 「勉強と部活の関係性」
71. 「体罰は合理的か」
72. 「逆転合格者から見る受験勉強法」
73. 「教育が受けられない子どもたち」
74. 「フィンランドの教育から取り入れられること」
75. 「諸外国から見る日本の教育の問題点と改善点」
76. 「すべての子どもに音楽教育を行うには」
77. 「東アジアの教育」
78. 「詰め込み教育は有効か？」

#### 7. 講座・TOEFL 探究 (2 講座)

TOEFL 探究では、TOEFL iBTに必要な四技能の習得を目標とし、様々なトピック(社会問題や専門的な分野)を学ばなかで、総合的に使える英語を身につける。年間一人3回の公開プレゼンテーションを行い、発表力を養っています。学習成果発表会では10名の代表生徒が自分の興味のあるトピックについてリサーチし自ら分析した内容を英語で発表しました。

79. Labelling
  80. Ideology
  81. Love or Addiction
  82. Social Influences on Individuals
  83. The World without God
  84. Infinity Mirrors
  85. Is it really the same circle?
  86. Common Sense and Islamic Women
  87. Not English, but Englishes
  88. Privilege
-

## 《資料③ 「探究」の学習をふりかえっての生徒によるフィードバック》

○生徒の記述回答から具体的な経験とそれによる成長の実感が読み取れる。

### 1.人間としての成長

・今までなら知るだけでそこで終わっていたけれど、その先の、自分たちにできることまで考えることで、自分自身の成長につながったと思います。その中で、実際にアンケート調査を行ったのはとても大きかったです。やるかどうか迷ったけど、たくさんの人が協力してくれたおかげで、研究にも役立ちそうなことが見えてきて、より研究を深めることができました。何でもやってみる“行動力”はとても大切なものだと思えました。自分が何か行動を起こそうと思えば結構周りの人は協力してくれる！ということもわかったので、積極的にいろいろな

ことを行動に移していけるようになりたいと思います。

・世界には普通の生活をするこすら厳しい環境で生きている人々がいる、というのは知っていたけど、この研究をするまで詳しくは知らなかったし、機会もなかったので知れてよかった。世界の良いところや理想だけではなく、悪いところをしっかりと学ぶことはとても大事だと思えました。これからは、少しでも興味を持つことがあれば、調べたり知る努力をしようと思う。「知る」ことはとても大切だと学びました。

### 2.できるようになったこと

・国際比較をすることで他の国と比べて日本の抱えている問題の原因に気づいたり、良い部分の数値が高い国ではなぜそうなるのか、と追求する力が伸びました。

・自分の意見に対して自分で疑問を持ったり、批判的な意見を持って、深く考え、見つめ直したりすることが出来るようになりました。

・1つの物事についてデータなどから分析していき、自分の考えを述べる力が伸びたと思います。もっと深く考える力を伸ばしたいなと思います。

・授業で短い時間で原稿を考えパワーポイントを作り発表するというのを繰り返すうちに、人前で話すことにも慣れ、プレゼンの技術を上げることができたと思います。

・今日の世界では、いろいろな人権問題が存在するという事を知り、どうすれば解決できるのか、その解決策は現実的なのかなど、問題に対しての探究力を身に付けることができた。1つの物事に対していろいろな視点から見ることがついたらと思う。

・中間発表のための論文づくり、大阪大学フューチャークローバルリーダーズキャンプを通して、根拠となる情報源の集め方、論理的に考え、自分の論文に常に「なぜ？」と考え、筋が通った文章が書けるようになった。

・調べたことを自分の言葉でわかりやすく文章にする力は伸びたと思う。

・必要なデータを選びとる能力、自らの考えを論理立てて補強していく能力がついたと思った。

### 3.うれしかったこと

・なかなか自分の思うようなデータが見つからず、戸惑うことも多かった。しかし、インターネットで多くの論文を読み通していく中で、少しずつ自分が探しているデータを見つけられた時は嬉しかった。

・論文を筋道立てて書くのは時間が掛かった分だけ達成感がありました。

・一番成長したと思うところは、パソコンに慣れたことです。最初はフォルダの開き方、上書き保存の仕方など分からないことだらけだったけど、今では全部分かるようになったし、USBも使えるようになったし、将来につながる事が出来るようになりました。

## 4. わかったこと

- ・たった1つの問題にでも、たくさん原因があり、その原因をつきとめることも容易ではないけれど、それをふまえてたくさんのデータなどをもとにして解決策を考えることもとても大変で想像以上に難しいということがわかりました。
- ・具体的な改善策を考えるときに、問題をまず整理してみたら、さかのぼっても、さかのぼっても問題がたくさんでてきて、的確に1つずつ直していける改善策を考えたいと思いました。
- ・代表発表したことによって、見やすいパワーポイントを作ること、わかりやすく自分の言葉に置き換えることの大切さも学びました。

## 5. 大変だったこと

- ・ネットや本で調べたことを、すべて参考文献という形で示さないといけないのはとても大変でした。
- ・最終論文を仕上げている中で、スケジュール的に過密であったため、はじめに提出した時は、思うような論文に仕上げることができなかった。しかし、千里フェスタまでに仕上げるために計画を立てて、実行することができた。

## 6. 研究へのコメントについて

- ・今回は1人で最後まで探究したので、別の視点から物事を見る機会が少なくたどりつく答えが(ex. 仮説や解決策)同じまたは似たようなものになってしまうのが一番の課題でした。しかし、大学生の方やコメントーターの方から意見がもらえたことで自分の研究課題内容がより濃いものになったと思います。そのような機会をもうけてもらえたことはとてもうれしかったです。
- ・論文の作成では、大学院生の人に細かいアドバイスを頂き、また、前期で取り組んだ青年海外協力隊の方とのメールのやり取りは、現地の生の声を聞くことができ、とても貴重な経験になりました。

## 7. 伸ばしたい力

- ・もっと積極的に行動することです。NPOなど活動している団体に話しを聞くなどをしていけたらもっと内容が深まったのかなぁと思います。

- ・研究をする上で、客観的に考えていくことが重要だと実感した。
- ・自分たちが思いつくようなこと(解決策)はほとんど既の実施されているなぁと思った。
- ・チームで論文を完成させることが難しいことにも気づいた。
- ・テーマ設定をする時は、全然具体的なテーマはなくて、何となく日本語に関連することが調べられたらいいな、くらいにしか思っていなくて、正直今のテーマになることは想像していませんでした。でも最終的に外国語活動を調べる中で、日本語の重要性についても調べられたので、過程が大切だと知りました。

- ・論点や話題がずれないように書くのはとても意識していないとできなくて、とても難しかったと思います。
- ・ウェブサイトを調べるのも、どの情報が正しいのかすごく考えさせられたし、本を読むにしてもどの部分を引用するか考えるのが難しかったです。でも、文章をたくさん書いたことによって、文章力がついたのでよかったです。

- ・大学院生や大阪大学の研修などで、多くのフィードバックをもらうことができました。コメントは、自分にとって厳しいものが多かったけど、そのフィードバックによって、私は自分が導き出したい論文を書くことができ本当に良かったと思う。
- ・探究発表を通して気がついたことは、様々な視点から物事を見ると考え方が多数あるということです。質問されたとき、「そのことについては考えなかった」と思わせることができました。以上のことから、1つの課題に対してもっとたくさんの視点から考えていたらもっと良くなっていたと思う。

- ・自分が調べたことをわかりやすく他者に伝える力をもっと伸ばしたいと思いました。

- ・一つの視点にとらわれて行き詰まることが多々あったので、様々な視点から見る力がまだ足りないと思ったので伸ばしたい。
- ・もっと上手くまとめたり、わかりやすい順番で言えたと思うからちゃんと骨組みを作れる力を伸ばしていき

い。

- ・探究を通して社会的問題の根底を知れたので、もっといろいろな問題に目を向けて自分の考えを持てるようになりたいです。

## 8. 共同研究のメリット

- ・アンケートは、一人なら踏み切れなかった。
- ・参考文献・プレゼンテーションスライド・論文を分担して同時並行で進められた。
- ・同じデータに対してでも違う視点から検討できた。その結果現実的な案を考えられた。
- ・苦手なことを補い合えた。

- ・集められる情報が倍になった。

- ・アドバイスがもられた。(適切な表現・語彙・デザイン・間違い)

- ・ウェブ上のドライブを利用したので、書いていることがずれない、家でも合わせられる。

- ・ひとりでは行き詰まっていそうな時も、ふたりなら大丈夫と思えた。

## 《資料④ 大学院生 TA による論文個別指導に関する、TA による評価とフィードバック》

○生徒への指導と同時に、教員の指導に対しての具体的な提案ももらった。

### 1. 指導しての感想

#### ◆肯定的評価◆

- ・ データや文献、アンケートなどしっかりした調査を行い、高い問題意識で取り組まれているのが印象的でした。
- ・ 前回アドバイスをしたところが適切に修正されていて、非常に良い内容になっていると感じました。しかし、出典の書き方等、抽象的に説明せずに、具体例を挙げた上で細かく説明する必要があると学びました。
- ・ 前回に比べ、調べた内容、レポートに量・質ともに進展が見られました。
- ・ 3ヶ月前の指導と比較して、自分自身の問いを深めてより厚みのある論文となっていました。
- ・ 皆さんが工夫して見やすいスライドにできるよう頑張っているのが伝わってきました。7分で伝えたいことをまとめるのは大変ですが、上手く要点をまとめて話すのは、今後活かされると思います。

### 2. 今後に向けての提案

#### ◆論文添削を依頼した講座◆

- ・ 今後も事前にレポートを送る形で進めて頂けると、当日の短い時間の中でいろいろとアドバイスさせて頂くことができるかと思います。
- ・ 全体でのスケジュール等教えていただくと、レポートにコメントをする際にどこまで深くコメントをするのかの参考になると思いました。
- ・ 文脈ごとに段落をつける、インターネットからの情報だけではなく本や論文等も参照する、出典を必ず正しく書くということの指導が必要だと思えます。
- ・ 実際の発表を見てのアドバイスもしたかった。

#### ◆否定的評価◆

- ・ 調べた問題について、知識が増えたものの、それらをまとめて「ストーリー」にするための自分たちの問題意識や主張が見えてきていないように感じました。
- ・ 「〇〇についてはどう考えますか」のように回答を求める質問やコメントをすると固まってしまう生徒がほとんどでした。
- ・ 学生は「字数が足りない！」という点をとにかく気にしていると感じられました。字数を埋めるために、引用箇所が膨大になっていたり、それによって肝心な自分たちの主張がわかりにくくなっていたりしていたことが気になりました。
- ・ 一度がんばって調べた内容について、論文の筋道とズれていても削らない生徒さんが多い印象を受けました。

#### ◆講座内発表へのコメントを依頼した講座◆

- ・ 論文添削の方が時間がとれてよいと思います。
- ・ レーザーポインター等を使った発表練習をしておくと、よりよい発表ができるようになるかと思いません。
- ・ コメントペーパーに加えて、発表後の質疑応答の時間を設けた方がよいと思います。
- ・ 発表に向けて調べた内容を述べるだけではなく、自分達がどのような問題が重要だと考えるのか、一般的なイメージとどのようにちがうと思うのか、そのうえで自分達の意見を明確に主張することを強調し

ていくと、より伝わる発表になると思います。調べた本やWebなどの内容をまとめるときに、問題点や問題への分析視点に注目していくと、自分達の問題意識や主張を考えやすいでしょう。

- 発表に関して、せっかく論文の方では充実した内容が書かれているのに、自分の意見を述べる時間がなくなったり、薄くなってしまふ場面が多く見られたので、発表時間内にいかに必要な情報をチョイスし、要点を伝えていくかというところの練習、場慣れといった部分は今後必要になるかと思います。
- 今後スライドの作り方や発表の仕方など、詳しい点にアドバイスできるような機会があればより多くのことを伝えられるかなと感じました。

◆全般◆

- 今回のレポートを書くまでに、どのような指導をなされていたのかが知れたらよかった。(お手本のレポートがあるという旨を聞いたので、体裁等含め一度読んでおきたかった)
- 今回は2回のみ添削で関わる形でしたが、もう少し指導する時間があれば細かい修正等もできるかと思っています。時間の関係で難しいかも知れませんが…。
- 初めてレポートを書くということなので、字数は一人あたり800字程度からスタートし、分量よりも構成や質に意識を向けられるように促した方が心理的負担が少なく、より取り組みやすいのかな、と思いました。
- 互いの論文を読み合って、助言する機会があると、日本語のクセや論文のルール、構成などの理解が深まるように感じました。また、関心のある分野の論文を読んでみてもよいかと思います。
- 問いを見出し、そこから探究する際に多面的に検討されていた発表は少なかったようにも思えます(ある側面について深く掘られていましたが)。問いを設定してから「どう考えていくか」を追加指導され

るとより良い探究活動につながるのではと感じました。

- 全体として理論的なまとまりや整合性が重視されているようでしたが、学生側の具体的な関心や興味を取り入れてレポートが作成されていくとより良いと感じた。
- 大学の問題かもしれないが、自分の研究テーマに近い探究があるのに、違う分野のものを割り当てられたので不安であった。

## 《資料⑤ 大学院生 TA による論文個別指導に関する、生徒による評価とフィードバック》

○先輩研究者としての具体的で実戦的な助言が役立ったと高い評価をしている。

○回数を増やしてほしい、複数の助言者からできたらコメントが欲しいとの要望も出ている。

### (1) 2017年10月分

#### 1. どういう点で有意義でしたか

- ・もっと範囲を絞って調べることで、新しい視点が大事ということを教わった。
- ・次に調べることで、その調べ方が分かった。
- ・レポートの書き方、調べる事柄や書籍の効果的な使い方を知ることができた。
- ・定義の再確認、ピックアップすべき課題の確認（どこを掘り下げるべきか）と調べ方。引用・参考文献は事実性の確認、英語で調べる。興味のあることを調べることの大切さ。
- ・データを引用するときのコツや、これから調べることを考えるときの過程などを教えてもらって、次にレポートをつくる時に役立つと思った。
- ・簡単に1つのサイト、団体を信じてそれを自分の意見と

まげてレポートにしてしまっていたのだと気づいた。

- ・中間発表会を終えた時点でアドバイスをもらい、自分達の考えを見つめ直すことができた。
- ・本格的な論文を読む際に、特に着眼すべき点を教えてもらえた。
- ・探究の進め方や流れを教えてもらい、自分たちの中で曖昧だった部分が明らかになった。改善すべき点がたくさんあることに気がついた。
- ・文献や資料をもう一度読み返すことも良いし、自分たちの疑問をもう一度何でもいいから書き出して、そこから始めるのも良いと知った。
- ・自分たちのレポートの中には、曖昧な所がたくさんあった。気づけなかった部分なので指摘されてよかった。

#### 2. 何か提案はありますか

- ・次の大学院生からの指導のときに、もう一人の方の話を聞きたいです。

### (2) 2018年1月実施分

#### 1. どういう点で有意義でしたか

- ・アンケートしたことを有利に生かす方法。
- ・実際に相談しながら改善点を教えていただいた。
- ・自分たちでなかなか気づけない所／分かっていない所を客観的に指摘してもらった。
- ・自分にはない視点からアドバイスをもらえた。
- ・レポートの構成についての見やすい、読みやすい書き方、ポイントを指摘してもらった。

- ・具体的に論文の良い点や悪い点を教えていただいた。
- ・こういう事柄について調べたらもっと良くなるよというアドバイスや、こういうことを付け加えると良いよということを教えていただいて、より良いレポートが書けると思った。
- ・聞き手を掴む質問について教えていただいた。
- ・Excelの使い方。

#### 2. 何か提案はありますか

- ・時間があるなら、複数のTAから違った視点でのアドバイスを受けたい。



(7)	国際文化科	<b>秋休み企業・大学訪問研修</b> <b>最前線で働く人から学ぶ</b>	2017年
	1,2年希望者		10月5日、6日
	1年 53名 2年 46名		京阪神の 10企業1大学

## 概要

二期制をとる本校には秋休みが2日ある。平日で授業のないこの2日を利用して実施した。

課題研究と本校の目標に関わるテーマを挙げ、グローバルコンパクト・ネットワーク・ジャパン関西分科会等を通じて協力いただける企業・大学を募り、訪問させていただいた。

下記写真下に記載しているテーマを中心に具体的な取組等をお話しいただいた。

少人数で詳しくお話いただけるよう、企業は1箇所8~10名の定員とした。自分の課題研究に関わる企業を訪れる2年生の希望を最優先し、可能な場合、1年生も参加できるようにした。

## 位置付け

- 地元にある企業の実際取組とその取組の最前線で働く人に出会う機会。
- 2年生は自分の課題研究のための機会、1年生は視野を広げる機会

## 目的

- ① 企業の社会的責任(CSR)について企業における具体的な取組を学ぶ。
- ② 働くということについて、具体的に考える契機とする。
- ③ 国際協力・国際貢献について基本的な考え方を学ぶ、学生国際ボランティア経験者から実情を学ぶ。

## 仮説

- ・仮説1. 国際課題に関する関心・理解の促進
- ・仮説2. 現実的な提案力の育成
- ・仮説3. 探究意欲の刺激・キャリア形成への貢献
- ・仮説4. 積極層の意欲・能力の向上と波及効果

## 受入れ企業・大学と実施場所

- ・NTN 株式会社 本社
- ・IDEC 株式会社 本社
- ・株式会社ダイフク 本社
- ・大阪ガス株式会社  
実験集合住宅 NEXT21
- ・株式会社ヒロコーヒー  
伊丹いながわ店

- ・中西金属工業株式会社 本社
- ・株式会社マンダム 本社
- ・株式会社江坂-起業家支援センター
- ・株式会社トラベル・フロンティア  
(会場は江坂-起業家支援センター)
- ・日本電産株式会社 本社
- ・関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス

## 学習の様子



↑NTN  
▶ダイバーシティの推進



↑IDEC  
▶働き方改革・人間性尊重経営



↑ダイフク  
▶健康経営



↑大阪ガス  
▶温暖化対策を中心とした環境への取組



↑ヒロコーヒー  
▶良い生産と良い消費の実現



↑中西金属工業  
▶子育てとの両立のための環境作り



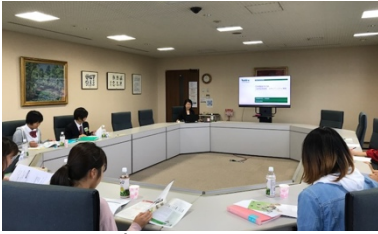
↑マングラム  
▶多様性に対する理解と対応



↑江坂-起業家支援センター  
▶働くとはどういうことか



←トラベル・フロンティア  
▶東南アジア貧困層へのボランティア体験ツアー



↑日本電産  
▶紛争鉱物開示ルールへの対応

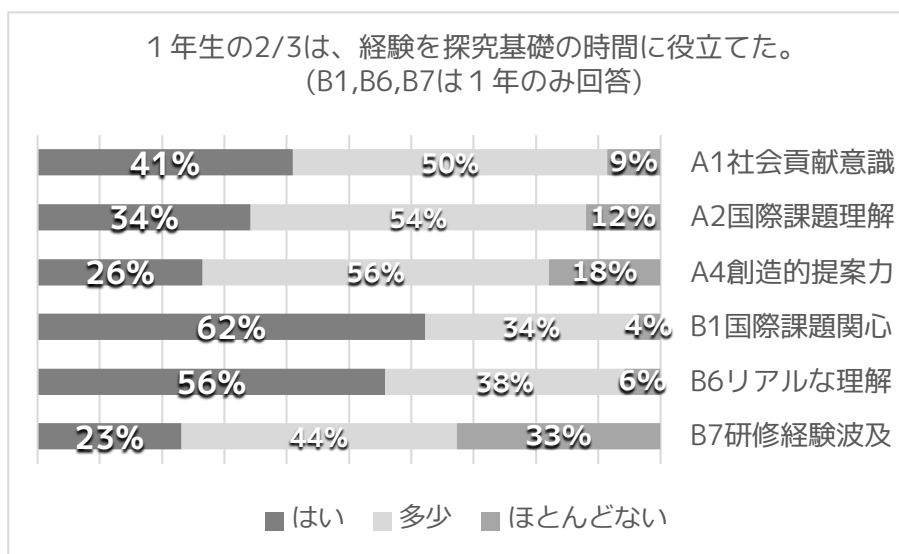


↑関西学院大学  
▶国際協力と国際貢献

## 評価

- 主目的である自分の課題研究の調査に役立ったかどうか、アンケートの質問でカバーできていない。参加全生徒の研修後レポートを読み返してみたところ、自分の課題研究と関係がある所に行っているにも関わらず、全くその関連について述べていないものが多い。以下にあげるような良い効果はあるのだが、これは問題で、教員が意識的に「つなぐ」指導が必要である。
- 社会的責任に取り組まれている担当者から具体的に経験や活動をお話いただくことで、「A1 社会貢献意識」「B1 国際課題関心」「B6 リアルな理解」を高めることになっている。
- 1年生の参加者の2/3が研修の経験を「探究基礎」の時間に他の生徒のために使っている。このことから、波及効果があると言える。
- グローバルリーダーとしての資質について学んだ生徒や、日本の教育のありかたについて疑問を持った生徒、将来どのような会社に勤めたいのか、どのように働きたいかについて考えた生徒がいたことが、生徒の「ことば」からわかる。このことから、社会貢献意識の向上や今回アンケート項目に入れなかったが、キャリア形成にも役立っていると言える。

## Evidence 1 | Data



## Evidence 2 | 生徒のことば

“ 社内には、安心して気軽にお子さんを預けることのできる保育所もありました。また、他にもジムがあったりもして、社員さん誰もがのびのびと仕事に励める環境が素敵だなと思いました。部署が違って交流できる場づくりも大切だと学びました。

↑この生徒は女性が活躍できる制度についての研究をしていました。

“ CSRと聞くと、企業と社会の関わり方などぼんやりとしたイメージしか持っていませんでした。しかし、そのイメージがはっきりとしたものになりました。

“ 私は7月の講演で話を聞いて紛争鉱物に興味を持っていたので楽しみにしていました。アメリカで改正された法律で紛争鉱物の調査したものを報告する義務ができました。その調査は私が考えていたものよりも大変なものだと思いました。しかし調査をすることで怪しい精錬所がわかってきて、その鉱物は買わないようにして紛争鉱物を買っているところの精錬所は減っていくらしいのでよかったと思いました。

“ 社員の人用の海外インターンシップに行かれた方の経験談や、フランスから来ておられる社員の方のお話を聞くことができました。海外で働きたいとはそれほど思っていなかったのですが、お話を聞いて働きたいと思いました。

“ 国によって‘当たり前’と思っていることや判断基準が異なっているので、拒否反応を起こして反発するのではなくてそういう考え方もあるのだと思って受け入れることが大切だと学びました。

“ サステナブルコーヒーは環境と人権を重要して作られたものであり、特に北欧で進んでいると学んだ。日本で進んでいない理由は日本が環境教育に力を入れていないためだと思った。

“ 利益だけでなく社会にも貢献している、そういった企業理念を持っている会社に入社したいと強く思いました。

“ 会社内にモスクを配置する改修や、礼拝の時間を設けることで、よりグローバルな企業に近づこうという姿勢に感銘を受けました。

“ 多くの企業が自社の製品の研究や利益のためだけではなく、原料を環境に優しいものを使ったり、募金したり、貧しい国々で教育の手伝いをしたり、様々な場面で社会に貢献していることを知った。

(8)

国際文化科

2年希望者

10名

**海外研修****ニューヨークでダイバーシティへの対応を中心に学ぶ**

2018年

1月2日~7日

アメリカ合衆国  
ニューヨーク市**概要**

それぞれの人が持つダイバーシティ（多様性）への理解と対応力がグローバルリーダーの資質として欠かせない。

この研修では、歴史的に多様性に向き合わざるを得ない米国、その中でも限られた地域に多様な人種・民族・経済的地位の人々が隣り合って暮らすニューヨークを訪れた。

生徒たちは、民間企業や地域社会等で多様性の問題に取り組む人々から彼らの活動を聞き、あるいはワークショップ形式で学んだ。

また、米国の移民に関わる歴史的背景について実物を通して学べる博物館を訪れガイドから説明を聞いた。

これらに加えて、中型バスで移動することによりニューヨークの地区による居住者層の違いを体感

した。また、ニューヨーク在住で国連で長く勤務していた本校卒業生のお宅を訪れ、国際機関で多様な人々と一緒に仕事をする上で大切なことや国連で勤務することになった経緯についてお話を伺った。

希望者多数のため、日本語および英語で書いた小論文（これまでに取り組んできたグローバル課題およびこの研修で学びたいことについて）の提出を求め、各種研修への参加実績と合わせて選考を行った。

研修前・研修中・研修後にそれぞれ、これまでの経験を生かした指導を行った。

また、研修の成果は、学習成果発表会で口頭発表するとともに、日英両言語でレポートにまとめ、本校 SGH ウェブサイトに掲載した。

**位置付け**

- 多様生への対応をテーマに、米国において社会にインパクトを与える活動をしている人々と出会い、直接学ぶ機会を提供する。
- 学校の代表として研修を受け、経験を他の生徒に伝えることを求める。

**目的**

- ① Diversity に対する理解を深める。  
↑Diversity が日常かつ課題であるニューヨークの現実を体感することにより
- ② 背景・属性の異なる人と対話・協働する力を身につける。  
↑属性の異なる人との対話・協働の経験者の実体験から学ぶことにより
- ③ 社会問題を解決する意欲・能力を高める。  
↑多様性を受け入れ、誰もが暮らしやすい社会の実現のために挑戦している人がどう取り組んでいるのかを学ぶことにより

**仮説**

- ・仮説 1. 国際課題に関する関心・理解の促進
- ・仮説 2. 現実的な提案力の育成
- ・仮説 3. 探究意欲の刺激・キャリア形成への貢献

**講師/訪問先と研修内容/生徒の学習の様子** (文字入りの写真は生徒作成のスライドから)

・ Museum of Chinese in America

移民として在米中国人がどのように扱われてきたか、その歴史の変遷を学習した。



← 専門のガイドにより英語で説明を受けた。

・ TENEMENT Museum

初期のヨーロッパからの移民がどのような住居に住み生計を立てていたかを学習した。



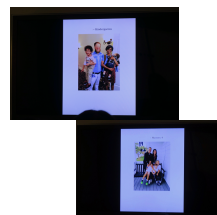
← 専門のガイドにより英語で説明を受けた。

・ Eva Vega 氏

>多様性を受け容れる社会への変革のために主に学校を舞台に活動している。

>氏が多様性教育を担当している学校(The Town School)に招いていただき、実際の学校の施設や備品、取組に多様性の重視がどのように反映されているのかを紹介していただいた。

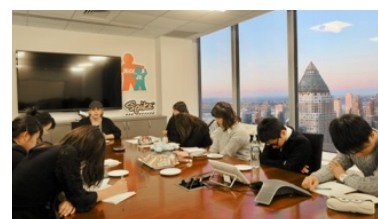
>また、メディアを利用した活動を一緒に行っている下記お二人の研修をアレンジしていただき、全体を通して生徒の理解が進むように、導入およびまとめ(全体を振り返りのワーク)を行っていただいた。



← The Town School では、児童の家族の写真を校内の通路にあるモニターに順に表示して多様な家族のあり方を可視化していた。



← トイレも男女共用のものを用意していた。



← 振り返りのワークの様子。このあと帰国後のアクションプランを書き、発表した。

・ Lisa Maxwell 氏 (Vice President, Product Marketing, MasterCard)

>ジャマイカから米国に移住し、苦労して就職に必要な学位を得、自らの経験を生かして成功を収めた。また、黒人女性の教育を支援する社会活動にも参加している。

>渡米してからの外国人であり黒人であったために生じた問題について、また、多様な消費者との対話を重視したマーケティングについて詳しく聞いた。

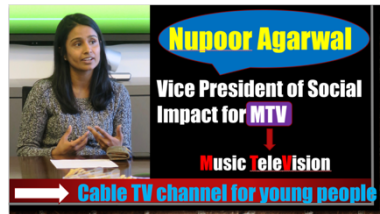


←大雪のためテレビ会議システムによる対話になった。

・ Noopur Agarwal 氏(Vice President, Social Impact, MTV/VH1/Logo)

>MTV の青年層向けチャンネルである MTVU で社会改革部門を担当している。

>例としてご自身が制作に携わった番組（人種間の対話のなさに風穴をあけることに挑戦したドキュメンタリー）を見せて、取組を紹介してもらった。



←メディア企業 ViaCom 社の会議室で。

・ Anti-Defamation League

>反差別に取り組む社会団体。差別や分断に関連して社会一般にメッセージを発信する他に、トレーニングプログラムを開発・実施している。また、教員向けに教材となるリソースを提供している。

>生徒たちに Microaggression をメインテーマにトレーニングを実施し、また、社会に対してどのような活動を行っているのかを実例を挙げて紹介してもらった。



←アクティビティの様子。

・ 沼田隆一氏

>ニューヨーク在住。国連開発計画を中心に長く国連で勤務した。

>多様な同僚や政府職員と仕事をする時には、いかに相手の背景を理解し、かつ自分のペースを守りながら対話をするかが重要といった経験を紹介していただいた。



←国連本部そばのご自宅で講演をしていただいた。

- ・ 芳野 あき 氏 (International Migration Organization コンゴ民主共和国常駐事務所 Programme Officer)

>就職後に、メキシコ留学時代に抱いた国際協力の仕事をしたいという気持ちが高まりコロンビア大学大学院に入学し、現在の職に就かれた。

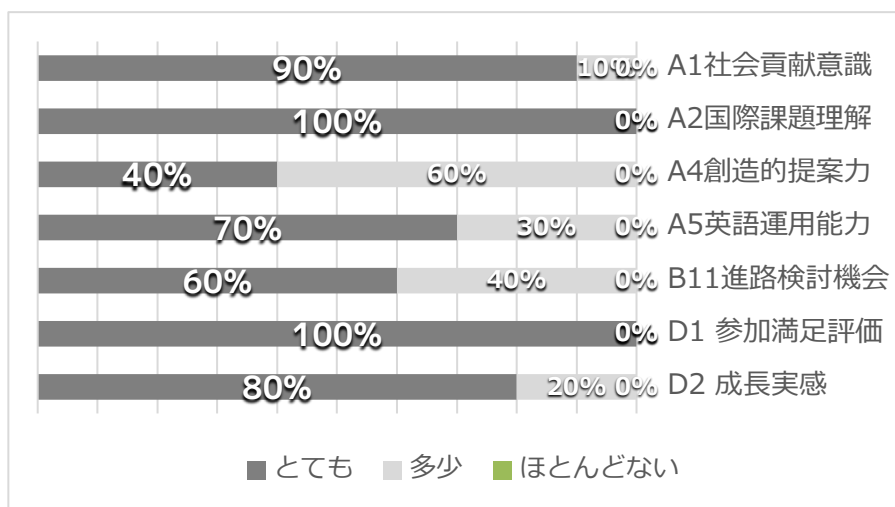
>このようなご自分のキャリア形成を中心にお話しいただいた。

## 評価と課題

- 主目的としている多様性への対応という課題に対する理解は非常に進んだことが、数字（A2 国際課題理解）からも生徒の言葉からもわかる。
- 社会課題に取り組む多くの人物とその活動に接することで社会貢献意識も高まったと言える。
- 創造的提案力は、4割の生徒がとても役立ったと述べているが、相対的には低い。指導教員からすれば、社会改革に取り組む講師たちの活動から汎用性の高いノウハウのヒントを読み取ることは可能だった。しかし、これは生徒たちにはとても難しいことだった。このことは渡米中毎晩行った生徒とのミーティングや校内発表の指導の中でしばしば感じた。かなり丁寧に、「つなぐ」作業を教員がする必要があった。
- 事前に想定していなかったが、8割の生徒が人間としての成長を実感したと答えている。講師をしていただいた方が多くが、職を変えながら自分のめざしたいことを追求してこられたことを聞いて、自分の生き方に影響を受けたことを指していることが、生徒の言葉からわかる。

## Evidence 1 | Data

「とても」効果があったに注目すると、A1 社会貢献意識・A2 国際課題理解の数値が非常に高い。一方、A4 創造的提案力の数値が他と比較すると低い。





## Evidence 2 | 生徒のこぼ

“

学んだのは、日本の中の diversity ・ 人権教育の方法 ・ 質問の仕方 ・ ミーティングの意義。

“

ダイバーシティに対する理解 ・ 社会的少数者の意味 ・ 国際的に活躍するためにすべきこと。

“

Diversity をマーケティングに使うという考え方。多くの人種が世界にあるということが実感できた。積極性の大切さ。意志の強さが大切。社会問題に貢献したいという意欲が増えた。

“

たくさんの成功をおさめられてこられた方々に会ってみたら、沢山の職場で経験を積んでこられてそれを今の職業にいかしている方がほとんどだった。

“

自信を持つことの大切さ ・ マイペースに進み続けること ・ 自分のしたいことを貫くべきということ ・ 同じ目標を持ち一緒に頑張る仲間の大切さ

“

ニューヨークは、2 ブロック進んだだけで、町の景色はもちろん住んでいる人の人種などに変化が見られ、すごく刺激を受けた。ニューヨークは都会だとひとくくりに考えていたが、ニューヨークの中でも富の格差があることを知った

“

自分の力不足も感じた。英語の聞き取りとか、特に話すことが自分ではできないと思った。これからもっともっと頑張ろうと思えた。

“

いろいろな人会遇到たくさん自分の知らないこととか、こうだと思っていたことがそれがすべてじゃないということも学べた。将来のことを考える機会もたくさんあった。

## 資料

### ○旅行スケジュール

1月2日

- ・伊丹空港から羽田空港へ移動
- ・羽田空港から JFK 空港へ移動
- ・ニューヨーク到着後、ブルックリンブリッジパーク、911 メモリアルパーク、ウォール街等を見学

1月3日

- ・The Town School にて Eva Vega 氏による研修
- ・Museum of Chinese in America ガイドツアー
- ・TENEMENT Museum ガイドツアー

1月4日

(大雪により国連本部見学不可のため予定を変更)

- ・Metropolitan Museum 見学
- ・自然史博物館見学
- ・沼田氏 ・ 芳野氏による研修

1月5日

- ・Lisa Maxwell 氏による研修
- ・ADL による研修
- ・Noopur Agarwal 氏による研修

1月6日

(大雪の影響で JFK 空港からの便の出発が大幅に遅れ、乗継便を変更、深夜に学校にて解散)

- ・JFK 空港から成田空港に移動
- ・成田空港から羽田空港に移動
- ・羽田空港から関西空港に移動
- ・関西空港から学校に移動

(9)	国際文化科	学 習 成 果 発 表 会	2018 年
	1,2 年全生徒		2 月 8 日~10 日
	636 名		本校 23 会場
		「 千 里 フ ェ ス タ 」	

## 概要

国際文化・総合科学両学科 2 年生の課題研究の発表のほか、22 会場に分かれ、169 発表を行った。研究発表だけではなく、最先端の研究者による基調講演、音楽選択生の合唱の発表、家庭科の作品展示、海外研修の報告発表、ディベート（日本語 3、英語 4 対戦）等も公開した。

本校が国際科学高校に再編された時からスタートし、今年で 13 回目となる。

日程は 3 日間で、初日は合唱コンサート、基調講演、「国際理解」映画会、SSH 国内・海外研修報告会等を開催した。2 日目、3 日目は課題研究をはじめとする発表を分科会場に分かれて行った。

今年度は一般公開日としている 3 日目を初めて土曜日に設定した。他校教員向けに SGH 実践報告会を開くことがその理由だったが、これまでは平日のため来にくかった保護者から好評だった。約 150 家庭が参観に来られた。

基調講演には、京都大学 iPS 細胞研究所から原田直樹氏においでいただき『iPS 細胞の可能性～変異と遺伝病の治療～再生医療が人類に問いかけるもの』のテーマで文系理系に関わらず知っておくべき研究の最前線を紹介していただいた。

発表では普通教室を多く使う。この場合、生徒のタブレットから無線でプロジェクターにスライドの映像を送出した。

## 課題研究『探究』の発表形式と発表の様子

○国際文化 2 年生課題研究『探究』は合計 79 件を次の 3 つのスタイルで発表した。



### ①SGH 代表発表：

各講座の代表が視聴覚教室で発表し、コメンテーターにより講評がなされる。



発表後のコメンテーターと発表者



### ②探究プレゼン：

普通教室で 30~40 名の観客を想定して発表する。



### ③探究セッション：

普通教室で、両学科の 1 年生 7,8 人が指定されて観客となり、発表の後全員が、質問あるいは意見を述べるのが求められる。

(10)	国際文化科	<b>3 年 生 へ の 指 導</b> 高度な英語運用能力の育成をめざす英語選択科目 『トピック・スタディズ(TS)』と『グローバル・スタディズ(GS)』	2017年4月～
	3年選択者		通年
	TS 35人 GS 12人		週2回 各1時間

## 概要

2年で学んだグローバルな社会課題について英語で読み・書き・発表し・討論する力に焦点をあてる。

『トピック・スタディズ(TS)』では、まず各国の事情と国際機関の働きを発表活動（グループで分担してリサーチし、プレゼンテーションにまとめて発表する）を通して学んだ。

その後は、模擬国連の枠組みを用いて学習を進めた。担当することになった国の政策・世論をグループでリサーチして主張を組立て、決議案を書き、共同提案国を得るために交渉を行った。

この流れと並行して SDGs からテーマを選び学習した。教材には各課題の現状や国際的な動きについて学習した。教材にはニュース記事や国連機関作成の資料、NGO 等が作るビデオを用いた。

『グローバル・スタディズ(GS)』では、TOEFL に対応できる英語力の育成を意識して授業を進めた。

社会の現象を素材に、どのようなイデオロギーに基づいているのか、良い点と悪い点は何かを検討し、論理を緻密にするための批判的質問を考え、最後には Discussion Facilitation（実りある討論にするため、適切な質問と論点の整理を行って進行する）ができるようにカリキュラムを組んで授業を進めた。

また、並行して、発表をする機会を設けた。自分が選んだ事象について、授業で学んだ分析の枠組みを使って発表することを求めた。

テーマは、現代の社会で意見の分かれる課題— Nuclear power, Feminism, Unfair treatment, Labor shortage, Privilege walk, Priority seat など、環境・労働・人権を中心とするものとなった。

## 位置付けと目的

- 内容的には2年での課題研究を受け、また、2年でのディベートの経験を受けて、グローバルな社会課題について英語で論理的に意見交換をする経験をくぐらせる。

## 仮説

- ・ 仮説1. 国際課題に関する関心・理解の促進
- ・ 仮説2. 現実的な提案力の育成

## 生徒の学習の様子『トピック・スタディズ(TS)』



国連機関を中心とした各種国際機関の実績と課題をグループで分担して調べ発表した。この組の担当は国連グローバルコンパクト。(UNGC)



ミニ模擬国連を行っている。難民受け入れの負担をどう分担すべきかについて、各国の立場・実績と今後の方針を述べている。



模擬国連で各国の立場を説明するスピーチを行なっている。テーマは核兵器禁止条約。



模擬国連でのスピーチ前の準備中。方針を話し合い、決まったら分担して作業を進める。



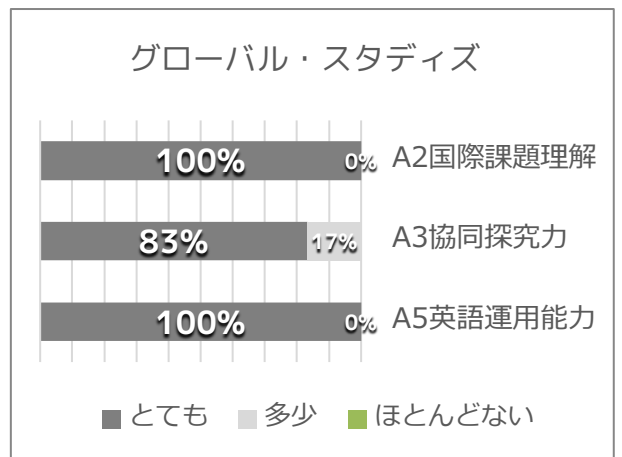
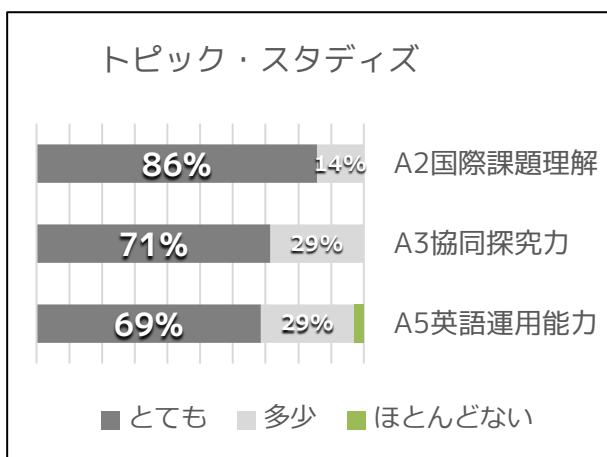
模擬国連：各国の立場決議案を明らかにした後、共同提案をするための交渉中。

## 評価と課題

- 生徒の回答の通り、国際的な課題への理解、共同して調査検討する力、英語運用能力に効果があったと認められる。
- 1、2年の研修や課題研究との関連については、実際にはあるのだが、生徒の中ではあまり意識されていない。他の取組と同様、教員が意識的に「つなぐ」必要があると思われる。

## Evidence 1 | Data

両科目ともそれぞれの力をつけるのに「とても」貢献したと答えている生徒が約7割以上を占める。ただし、トピック・スタディズ受講者 35 人のうち約3割が A5 英語運用能力について「とても」とは答えていないことには留意しておく必要がある。



## Evidence 2 | 生徒のこぼ

### 『トピック・スタディズ』

- “ 交渉を成立させるには、相手国の事情をよく理解する必要があるとわかった。
- “ 物事を解決するにはいろいろな見方で物事を見なければならないことを学んだ。
- “ 世界の問題について深く考えることができ、大学でも引き続き学びたいと思った。
- “ 初めは難しかったが、人前で英語で話すことに自信がついた。
- “ 留学したいので、この経験は役に立つと思う。
- “ 2年の探究で行ったプレゼンの力が役に立った。

### 『グローバル・スタディズ』

- “ 英語で論理的に考えて、問題について深く掘り下げる力を身につけることができた。
- “ 他の授業で体感できない強いプレッシャーによって、自分の能力を高めることができた。
- “ TOEFL のスキルだけではなく、英語でのプレゼンテーションやディスカッションを行う力を磨くことができた。
- “ レベルの高い環境の中で周りの生徒からの刺激を受けながら更なる高みをめざすことができた。

## 資料

### ○トピック・スタディズにおいて導入したテーマと授業の流れ

#### ①テーマ

- 1)多様な国連加盟国の立場・強み・課題  
《プレゼンテーション》
- 2)国連の掲げる SDGs
- 3)気候変動
- 4)貧困
- 5)平和維持活動

- 6)国連諸機関の役割と実績・課題  
《プレゼンテーション》

- 7)性差別
- 8)難民《テーマ学習後→ミニ模擬国連》
- 9)核兵器廃絶《テーマ学習後→模擬国連》
- 10)教育
- 11)飢餓

#### ②授業の流れ

##### 《テーマ学習》

ビデオ→読み物→話し合い→発表→エッセイ

※ビデオや読み物、エッセイは Google Classroom を利用して配信・回収・返却

##### 《模擬国連》

分担国のリサーチ→立場表明のプレゼンと文書→決議案作成→共同提案のための交渉→採決→振り返り



## 5. 運営

---

## (1) 運営指導委員会

平成 29 年度 第 1 回スーパーグローバルハイスクール(SGH)運営指導委員会

1. 日時：平成 29 年 10 月 17 日 11 時 35 分～12 時 25 分
2. 場所：千里高校 校長室
3. 出席者：

○運営指導委員

久 隆浩 委員 近畿大学 総合社会学部環境・まちづくり系専攻 教授  
藤本 英子 委員 京都市立芸術大学 美術学部 教授  
森田 直樹 委員 吹田市立高野台中学校 校長  
松下 信之 委員 大阪府教育センター 高等学校教育推進室 指導主事

○管理機関・大阪府教育庁

香月 孝治 教育振興室 高等学校課 教務グループ 主任指導主事

○千里高校

松本 透 校長  
堀辺 慶一 教頭  
大西 千尋 首席 (SGH 事業推進主担当・英語)  
村上 晃 教諭 (SGH 委員・「探究」担当・社会)  
野村 真理 教諭 (「トピック・スタディズ」担当・英語)  
今岡 仁美 教諭 (「探究」担当・英語)  
江口 拓馬 教諭 (「探究」担当・国語)

4. 次第：

- 1, 校長挨拶
- 2, 委員紹介
- 3, 委員長の選出
- 4, 本校の SGH 事業の取組状況報告-別紙資料に基づいて
  - 1) 前回の委員会以降の実績報告と今後の計画
  - 2) 2 年間の自己評価と文部科学省による評価
  - 3) 課題
- 5, 指導助言



## 主な助言

1. 中間発表について
    - ・発表がこなれてきた。
    - ・ビジュアル資料をもっと活用するとよい。あれば具体的にイメージできる。この場（運営指導委員会）でも、「見える化」をすることによって具体的なアドバイスができる。
    - ・テーマの絞り込みをさせる指導が大事。絞り込むことによって問題に入り込むことができる。
    - ・児童虐待や家庭の支援は中学でも直面している課題だ。地元をもっと活用すると良い。高野台小学校・中学校・市民センターなど連携が可能な資源がある。
    - ・参考文献の数が増えていると感じた。
  2. SGH 研究開発の効果について
    - ・SGH の取組は他の科目の指導法の変化に繋がっているだろうか。
    - ・SGH の取組の中でどのような学習の姿があるだろうか。
  3. 連携について
    - ・海外の高校との連携については、高・大・民間とさまざまなチャンネルがある。
  4. 「中間評価」について
    - ・同じことを行なっているけど、どのように評価・運営を行なっているかで評価が変わってくる。評価をする側の目から見たときのポイントは、「エビデンス」と「システム」だ。
      - 「エビデンス」：アンケートの結果＋声のリストアップ
      - 「システム化」：誰と誰が連携し、全体としてどう動いているか。「見える化」する。
  5. カリキュラムと教員組織について
    - ・公開することで、チームビルディングを進めることができる。例えば、全教員がアクティブラーニングをしよう、というムードを作るのに重要な役割を果たす可能性がある。学校協議会をそのように位置付けることもできる。2月の実践報告会もそのような位置付けをすると良い。
    - ・学校としてカリキュラムをきちんと検討しているだろうか。カリキュラム＝ポリシー（教育目標）＋ツリー（科目体系図）、この2つを「見える化」して共有するのがよい。つまり、明確な方針を立て、各科目がその方針のどこに位置付くのかを共有する。
    - ・これと並行して、大学ではファカルティディベロップメントのシステム化に取り組んでいる。目標と戦略を共有するとともに、人材育成・開発にも組織的に取り組むということだ。
    - ・外部人材の活用も積極的に検討すると良い。忙しい部分をどう外に振っていくか。これにより戦略を練る時間を確保しつつ、今以上の成果が期待できる。大学教員に来てもらうこともできるし、研究室に行くこともできる。「大学コンソーシアム大阪」に依頼することもできる。
  6. その他の助言
    - ・海外研修は、コネクションのある人を活用すれば色々な地域・内容を考えることができる。
    - ・ターゲットが明確にされた研究にするには、テーマの枠をはめることが重要。
    - ・SGH に取り組み、いかに学校の仕組み・授業が変わってきたかが問われている。
    - ・ホワイトボードを使ってテーマを公開することで、他の先生や生徒を巻き込んでいくことができる。ぜひ、運用を開始してもらいたい。
-

平成 29 年度 第 2 回スーパーグローバルハイスクール運営指導委員会

日時：平成 30 年 2 月 9 日 12 時 20 分～13 時 10 分

場所：千里高校 校長室

出席者：

○運営指導委員

久 隆浩 委員 近畿大学 総合社会学部環境・まちづくり系専攻 教授

藤本 英子 委員 京都市立芸術大学 美術学部 教授

森田 直樹 委員 吹田市立高野台中学校 校長

○管理機関・大阪府教育庁

香月 孝治 教育振興室 高等学校課 教務グループ 主任指導主事

○千里高校

松本 透 校長

堀辺 慶一 教頭

大西 千尋 首席（SGH 事業推進主担当・英語）

松井 活夫 教諭（SGH 委員・「探究」・「探究基礎」担当・国語）

村上 晃 教諭（SGH 委員・「探究」・「探究基礎」担当・社会）

江口 拓馬 教諭（「探究」担当・国語）

前橋 直子 教諭（「探究基礎」担当・国語・1 年担当）

二井 三喜夫 教諭（「探究」担当・社会）

野村 真理 教諭（「トピック・スタディズ」担当・英語）

今岡 仁美 教諭（「探究」担当・英語）

次第：

1, 校長挨拶

2, 本校の SGH 事業の取組状況報告-別紙資料に基づいて

- ① 前回の助言を受けた動き
- ② SGH アンケートの設計と結果（一部）
- ③ 実践報告会の進め方・資料・参加者
- ④ 来年度計画と予算

3, 指導助言

---

## 主な助言

### 1. 生徒の発表

- ・資料をきっちり作る、前を見て発表する、アンケートを自ら行うなど、進展が実感できる。
- ・テーマが重なっている研究同士はどのように交流しているだろうか。→講座が別であっても交流する機会を作ると刺激あって生まれてくるものがあるはずだ。
- ・来年度計画されている卒業生に対する追跡調査は大切だ。
- ・大きなテーマであっても、解決法を人任せにする（国や企業の責任だ等）のではなく、高校生としてできることを見つけさせるように促すべきだ。
- ・大学では「テーマ演習」という授業があり、自分たちが立てた問いに合わせて先生を探してくるようになっている。そういう発想があっても良い。
- ・発表に対する質問もよく出ていた。

### 2. 運営

- ・4、5年目は成果の発信と普及が求められる。

### 3. 指導方法の効率化

- ・できるだけ効率的なシステム化をすること（しんどい思いをせずにうまく回すか）が大切。  
例えば、
  - ・通常授業に探究の手法を取り込むことで負担感を減らす。
  - ・教材・授業資料の共有データベースの作成。
  - ・教授法の共有、テクニックを学びあう。授業見学はチェックではなく「良い所」を見つけてフィードバックするようにすると、心理的な抵抗が減る。

### 4. 評価

- ・評価方法は、体系立ってわかりやすくなってきた。引き続き改良を加えて行って欲しい。
- ・事前（新入生アンケート）、事後のアセスメントを同じ項目でしてみるとよい→生徒の成長、学びのポイントを把握できる。アセスメントの項目や質問の仕方については、各大学が実施・公開しているものを参考にできる。

### 5. その他の項目

- ・交流校・連携校として台湾はとても良い。日本と共通する面がたくさんあり、溶け込みやすい。
- ・報告会で大切なのは人数ではない。どの学校も忙しいこの時期に来てくれるのは熱心で元気な先生。だから来てくれた人を大切にすることが重要。
- ・「自分は何ができるのか」を生徒に考えさせるのなら、SDGs や環境・労働・人権・腐敗防止に関して学校は何ができるのかを考え、実行すべき。

## (2) 成果の普及

1. 課題研究『探究』の優秀論文集を作成し、Web で公開した。
2. 『探究基礎』テキストを作成し、Web で公開した。
3. 研修等は、SGH 専用のサイトおよびブログで、随時できるだけ詳しい内容を紹介した。
  - ・ ブログは開設以来 12000 ビューを超えた。



本校の SGH サイト

<http://www.osaka-c.ed.jp/senri/sgh/index.html>

4. 下記の要領で学習成果報告会「千里フェスタ」の最終日を公開するとともに実践報告会を開催した。
  - ・ 大阪府内の私立・公立の高校をはじめ、北海道・神奈川県・福井県の高校から、また、大学・中学からも参加があった。
  - ・ 土曜日開催としたため、保護者も例年よりかなり多く来場された。

発表の参観：他校教員等 13 名、中学生 90 名、他校高校生 13 名、保護者約 300 名  
実践報告会：他校教員等 7 名、本校教員 55 名が参加

- |                                     |
|-------------------------------------|
| 1. 日 時 平成30年2月10日(土) 9:00~14:30     |
| 2. 会 場 大阪府立千里高等学校 大阪府吹田市高野台二丁目17番1号 |
| 3. 内 容                              |
| 9:00 ~ 11:50 学習成果発表会                |
| 12:40 ~ 14:30 SGH実践報告会              |
| ・ 全体会のものち                           |
| ・ 分科会                               |
| ①課題研究 探究基礎と探究                       |
| ②課題研究以外の活動                          |
| (講演・国内フィールドワーク・海外研修・                |
| ワークショップ授業等)                         |
| ③英語のコミュニケーション授業                     |
| ④タブレットの運用・活用                        |

- ・ 今回の報告会は、対外的には、本校の取組を紹介し意見をいただくことを目的に、校内的には、普段十分にできない各取組の趣旨や内容の共有をすることを目的に計画・実施した。これに続いて2月26日に、生徒の体と頭が動く授業・タブレットの数学での活用をテーマに校内実践交流会を開催し、いい流れを作ることになった。

- ・アンケートより、他校からの参加者の声を紹介する。

Q 参考になったと感じいただいた点があればお書きください。

- ・「問題発見・分析→仮説→検証→解決案→新たな問題・課題」と、研究のルーティンが構築されており、それが生徒にまで浸透している点。
- ・各発表の後にコメンテーターの方々のコメントの時間を設定している点。発表者だけでなく、聴衆の参考にもなっていると思います。
- ・テキストも素晴らしいです。本校では担当者ごとに独自に作成していますが、統一されたものの方が生徒にとってはわかりやすいと思います。
- ・全体会での概要説明も千里高校の活動全体を知るのに役立ちました。
- ・各授業の実践例を挙げていただくなど、手厚く準備していただいております。ありがとうございました。
- ・探究基礎の進め方など、教材もいただきありがとうございました。
- ・探究科を設置予定です。生徒発表・報告会とも大変有意義でした。今後の参考にさせていただきます。テーマ設定のヒントを得ました。タブレット導入についてのヒントも大変参考になりました。
- ・英語でのディベートや TOEFL 探究の発表を見させていただきましたが、大変素晴らしかったです。普段の取組やご指導がきちんとなされている成果なのだろうと感心いたしました。
- ・タブレットに関して本校でも導入しようと考えているので、お話を聞いてよかったです。
- ・教科でどのようにタブレットを使っているのかを具体的にお話くださったので参考にになりました。
- ・タブレットの環境整備を先生方でされたというのは驚きました。公立校というお金をかけられない中での、参考になる実践例でした。



←全体会の様子  
発表会場の片付けと並行して行ったため、多くの本校教員は分科会から参加した



←分科会の様子



## 6. 資料

-教育課程表(平成 27～29 年度入学生)-

6. 資料 - 教育課程表(平成 27~29 年度入学生・共通)-

○国際文化科

平成 29 年度大阪府立千里高等学校 国際文化科 教育課程

(入学年度別、類型別、教科・科目等単位数)

入学年度		H29(Ⅰ年), H28(Ⅱ年), H27(Ⅲ年) 共通										計	備 考			
教科	科目	Ⅰ 年			Ⅱ 年			Ⅲ 年								
		共通	選択	後期	共通	選択	共通	選択	前期	後期	選択			選択		
国語	国語総合	5													13~17	
	現代文B					2	2									
	古典B					2	2									
	(学)現代文演習									+1	+1					
地理歴史	(学)古典演習											+1	+1		4~8	
	世界史A					2										
	世界史B							*2								
	日本史A							*2								
	日本史B								*2							
	地理A							*2								
公民	地理B								*2						2~6	
	現代社会	2														
	倫理											+1	+1			
	政治・経済												+1	+1		
数学	(学)政治経済演習											+1	+1		11~15	
	数学Ⅰ	3														
	数学Ⅱ					3										
	数学A	2														
	数学B					3										
理科	(学)数学ⅡB演習											+1	+1		7~20	
	(学)数学演習											+1	+1			
	物理基礎					△3										
	化学基礎	2						#3		◇2						
	化学															
	生物基礎							△3					+2	+2		
	地学基礎	2											+1	+1		
体育	(学)理科演習											+1	+1		10	
	(学)化学演習											+1	+1			
	(学)生物演習											+1	+1			
芸術	体育	3				2		3							2~6	
	音楽・美術・書道Ⅰ	2														
	音楽・美術・書道Ⅱ							#2								
外国語	音楽・美術・書道Ⅲ											+1	+1		0	
	家庭基礎	2														
	(学)生活科学							#1								
英語	情報			1		1									2	
	総合英語	5														
	異文化理解						2		3							
	時事英語							◇2								
	(学)トピック・スキミング									◇2						
	(学)ライティング・スキルズ					2		2								
	(学)リーディング・スキルズ											+1	+1			
国際文化	(学)LL速読演習					1									15~23	
	(学)英語語法演習											+1	+1			
	(学)グローバル・スキミング												◇2			
家庭	(学)英語以外の外国語研究					◇2		◇2							6~10	「(学)英語以外の外国語研究」は、中国語、韓国・朝鮮語、フランス語、ドイツ語、スペイン語から選択
	(学)グローバル・コミュニケーション	2				2		2								
情報	(学)国際理解						◇2		◇2						0~2	
	家庭課題研究											+1	+1			
教科・科目の計		31	0	1	0	28	5	16	2	7	4~7			94~97		
総合的な学習の時間				1										3		
総合的な学習の時間			2			1				0				3	国際理解(1年)、探究基礎(1年後期)、探究(2年)、志学	
総 計			35			35		30~33						100~103		
選択の方法		2年、*から1科目2単位、△から3単位、#から3単位 ◇から1科目2単位 3年、*から1科目2単位、◇から2単位。 選択群から前期7単位、後期4~7単位選択														



6. 資料 > 教育課程表

○総合科学科

平成29年度大阪府立千里高等学校 総合科学科 教育課程

(入学年度別、類型別、教科・科目等単位数)

入学年度		H29(1年), H28(II年), H27(III年) 共通												計	備 考
学年		I 年				II 年				III 年					
教科	科目	通年	前期	後期	通年	前期	後期	通年	前期	後期	通年	前期	後期		
		共通	選択	共通	共通	共通	選択	共通	共通	共通	共通	選択	選択		
国語	国語総合	5													
	現代文B				2					2					
	古典B				2					2					
	(学)現代文演習											+1	+1		
地理歴史	(学)古典演習										△2	+1	+1		
	世界史A				2										
	世界史B									*2					
	日本史A				*2										
	日本史B									*2					
	地理A				*2										
	地理B									*2					
	(学)世界史演習											+1	+1		
公民	(学)日本史演習											+1	+1		
	(学)地理演習											+1	+1		
	現代社会	2													
	倫理											+1	+1		
体育	政治・経済									*2					
	(学)政治経済演習											+1	+1		
芸術	体育	3			2					3					
	保健	1			1										
外国語	音・美・書I	2													
	コミュニケーション英語I	4													
家庭情報	(学)コミュニケーション・スキル*	1						1	1						
	(学)英語語法演習									2					
理数	家庭基礎	2													
	情報の科学	1			1										
	理数数学I	6													
	理数数学II				4							+2	+2		
	理数数学特論				3										
	理数物理	2					1	□2			△2, #4				
	理数化学	2				3						△2, #4			
総合科学	理数生物	2					1	□2				△2, #4			
	理数地理学											△2			
	課題研究														
	(学)サイエンス・セミナー											+1			
	(学)数学基礎演習									2					
英語	(学)数学総合演習											+1	+1		
	(学)トピック・リーディング*				2					2					
	(学)科学解法												+1		
	(学)科学探究				1										
総合科学	(学)ライティング・スキル*				2							△2			
	(学)リーディング・スキル*											+1	+1		
	(学)LL速読演習						1								
教科・科目の計		33	0	0	0	27	0	3	3	16	8	4	2~4		
ホームルーム活動		33				33				30~32				96~98	
総合的な学習の時間		1				1				1				3	
総合的な学習の時間		1				1				0				2	科学探究基礎(1年) 国際理解(2年)
総 計		35				35				31~33				101~103	
選択の方法		2年、*から1科目2単位、□から1科目2単位 3年、*から1科目2単位、△、#から8単位(同一科目選択不可)。 選択群から前期4単位、後期2~4単位選択													

---

**平成 27 年度指定  
スーパーグローバルハイスクール  
研究報告書・第 3 年次  
～実践の共有と前進のために～**

2018(平成 30)年 3 月 26 日発行

大阪府立千里高等学校  
〒565-0861 大阪府吹田市高野台 2-17-1  
TEL 06-6871-0050  
FAX 06-6871-2587

---



大阪府立千里高等学校SGHサイト  
<http://www.osaka-c.ed.jp/senri/sgh/index.html>